

故に、行政部面に顯はるゝこと少く、世も亦彼を以て岡田、澤柳等の如く行政家を以て目すること稀なりと雖も、其の實彼は行政部面に對して多大の野心を懷き、好機あらば躍出して大活動を試みんとする人物なり。故外山正一在世の時代に於ては、澤柳と上田とは相並んで世に迎へられたる新人材にして、共に等しく將來ある行政家として囑目せられたることあり。今や上田は純學界の人となりて行政部面にあらずと雖も、然かも之が爲めに彼れの政治的素質と手腕との没却せらるべきにあらず。唯池中の蛟龍となりて暫く風雲の到來を待てるのみ。是を以て我輩は世人の揚げんとする木場、嘉納を斥て上田を推し、之を岡田、澤柳と相鼎立せしめて、敢て文部大臣の候補者に擬す。蓋し下馬評の上乗なるべきを自信して耻ぢざるなり。

中に就いて、岡田と澤柳とは、凡ての點に於て好箇の對照たり。頭腦明晰にして、論理的判斷に富み、普通の行政官としては、比較的傑出したる讀書の量を有する點に於て全く同一なり。行政上の知識経験を有し、實行の能力に富む點に於ても亦略ぼ同一なり。教育界に相當の兒分を有し、或は多くの友人知己を有し、事をなすに多大の便宜を有する點に於ても亦略ぼ均等なり。教育に甚深の趣味を有し、一度は大臣の

椅子に坐りて、文教の大權を握らんとする野心は之を有すれども、其他の方面に對しては、何等の野心を有せざる點に於ても亦能く似たり。

然りと雖も、其他の點に於ては、兩者全く相反の所少しとせず。殊に其思想と性格とに於ては、著しく相違するものあるを見る。澤柳の少年時は手の着けられざる程の餓鬼大將にして、油揚泥棒なり。岡田の少年時は實着なる報徳信者の卵なり。澤柳の大學時代は居眠り好きの亂暴書生なり。岡田の學年時代は姿勢正しく椅子に腰掛けて講義を靜聽せる勤勉順良の書生なり。澤柳の性格は稍々天才肌にして、繩墨を輕視する傾きあれども、岡田は資性謹嚴真摯にして規律正しき生活を好み、且つ其の種の人物を愛す。澤柳の思想は平民的進歩的にして、事物を改革し、創業する事を好めども、岡田は稍々保守的思想を懷きて守成の才に長ず。澤柳は快濶にして氣性は陽氣なれども、岡田は氣性稍々陰氣にして沈黙寡言の方なり。澤柳は公人としては多大に輿望を擔ふ人なれども、私人としては麗はしく且つ敬重すべき所少し。岡田は公人としては往々にして意外の不評を招く事ありと雖も、私人としては、幾んど一點の非難すべき所なき迄謹直にして、溫情慈愛に富み、家庭の主人公としても申

分なき人物なりと傳へらる。澤柳は比較的金錢に淡泊(?)にして貯蓄の念に乏しく、収入の全部は悉く之を支出に充當して又他日を顧みず。岡田は諸事凡て質素にして貯蓄心に富み、努めて贅費を節す。澤柳が五六の著書を出せることは、彼が常に讀書に勉め、相當に論議すべき思想を有するが爲めにもよるべしと雖も、然かも亦彼が平素貯蓄を心掛けざるが故に、一旦官職を離れたる時に當りては、著書なりとも出して、月々の生活費を補はざる可らざる事情を有するが爲めにもよらずんばならず。彼の著、『教育者の精神』、『普通心理學』、『格氏特殊教育學』、『政治道德學』等は即ち彼れが修身教科書秘密漏洩事件に連座して、文部省書記官を辭職し、一時野に下れる時に公表せる者にして、『教師及校長論』、『學修法』、『實際的教育學』、『退耕錄』等を刊行したるは、即ち彼が文部次官を辭して再び野の人となりたる時にてありき。而して其以外の時にありては嘗て一冊の著書だも出したることあらざるなり。若し彼をしていはしむれば、官職にある時は時間の餘裕あらざるが故に、著書を出すこと能はざる迄にて、敢て他意あるにあらざといふやも知れざれども、我輩は敢て之を信ぜざるなり。然れども我輩は決して彼を貶せんが爲めに斯かる言をなすものにあらず。

唯彼が金錢に淡泊にして、貯蓄を有せず、一旦職を離るれば、著書を出して迄も、其生活費の一部を補はざるべからざる境遇なることを一言して、以て岡田の貨財裕かなるに比較したるのみ。

澤柳は凡てに於て積極的態度を取る傾きあれども、岡田は積極消極兩端の性格を合せ有する人物なり。蓋し岡田は或種の場合には勇往敢爲、四圍の事情を顧みずして突進するまで意志強固にして、世人より『彼は蠻勇なり』と評せらるゝことなきにあらずと雖も、然かも亦或る種の場合には甚だ細心にして用意周密、寧ろ事物を悲觀する傾きなきにあらず。換言すれば、岡田は事をなさんとする場合に於ては、壁も破りて進み、火の中も敢て辭せざる程の積極的態度を取ること珍らしからざれども、然かも事物の利害を打算する等の場合に於ては、寧ろ石橋を鐵棒にて叩いて渡る程の用心あり。小心にして臆病なる時は婦女の如く、大膽にして突進する時は、其決心の堅きこと英雄の如し。大膽と臆病と進歩と保守とを連結混交したる性格を具有するは岡田の大特性なり。而して澤柳は稍々之に反して進歩の一方に傾き、常に積極的態度に出づ。尙之を他語を以ていへば、澤柳は老人の齡に達したる曉に於ても、尙は

青年の心事を解し得る性向の人たるべく、岡田は青年の時に於ても、尙且つ老人の趣味嗜好を解し得る性向の人物なりといふを得べし。

岡田は謹直端正なるが故に、天才肌の部下を有せざれども、澤柳は稍々之に反して、一癖ある人物を拔擢す。本莊太一郎、濱野虎吉、戸野周二郎等の如きは其適證たるにあらずや。本莊の歐洲留學費は後藤新平の出す所なり。而して本莊を後藤に紹介推薦したるものは實に澤柳にてありしなり。濱野は茗溪派出身の事務官にして、彼が東京府に榮轉し來りしは、又澤柳の推薦ありしに因る。戸野は横山榮次と同期の出身にして其クラスヘッドなり。澤柳の推薦を得て現在の職に就けり。三者孰れも才幹ある有要の材たれども、外貌頗る無愛嬌にして所謂附きの悪き人物たり。一層露骨に云へば、三人共に行政家的素質を相當に具へて、何處となく「喰へぬ男だ」と思はしむる素質を有す。而して斯の如きは澤柳政太郎の大に愛する所にして、各々今日を致さしめたる所以なり。

澤柳の思想は進歩的にして創業の才に長じ、岡田の思想は、稍々保守的の所ありて守成の才に長ずるが故に、將來若し兩者相前後して文部大臣たるに至ることありと

せば、澤柳は森有禮に近き大臣となり、其施設は稍々歐化に過ぐとの世評を受くることあるべく、岡田は井上毅に類似せる大臣となりて、其施設は必ずや守舊に過ぐとの批評を受くることあらん。(四十三年一月)

丙、上田萬年

(一) 學者的政治家か政治家的學者か

上田萬年、文學博士、文科大学新學長、好評嘖々として、彼の名今や朝野に高し。然れども彼の名聲は純乎たる學者として贏得せられたるものにはあらず。政治家として發揚せられたものにもあらず。一種えたいの知れざる源泉より湧出したるものなることを知らざる可らず。

我輩を以て彼を觀るに、彼は決して單純なる學者にあらず。然れども亦學者ならざるにもあらず。單純なる學者なりと謂はんか、餘りに常識に富み、事務の才に長け、何處かに政治家の資質あるを如何せんや。況んや彼れ自らも亦未來の文部大臣を以て任ずること久しきに於てをや。然らば彼を學者ならずと謂はんか、其身に學位

を帯び、其天賦に學者の資質を具へ、現に今學者の顯職に在ることを如何せんや。請ふ先づ彼の經歷より起見して、赤條々の裸體を點檢せしめよ。

彼は尾張の藩士、慶應三年正月、江戸の大久保に生る。幼より聰明、學を好み、終始東京に於て教育せられ、二十一年帝國大學文科大學科を卒業す。即ち澤柳政太郎と同期の出身なり。直ちに大學院に入り、學者の方途に進み、尋で文科大學の英語科授業を擔任す。二十三年九月言語學研究の爲、歐洲に留學を命ぜられ、獨逸に三箇年、佛國に六箇月在留し、滿期歸朝の後、文科大學教授となり、言語學を擔任す。二十八年本職の榜高等師範學校國語科講師となり、三十一年樺山文部大臣の下に専門學務局長に選任せられ、勅任參與官を兼ね、三十三年文學博士の學位を受け、三十四年菊池大麓の文部大臣となるに及んで、専門學務局長を辭し、大學教授本官となり、傍ら國語調査事業に盡瘁す。而して本年坪井九香三の後を襲いで、文科大學長となり、頓に名聲を揚ぐる。こと世の知る所の如し。

以上の經歷に徴して考ふるに、彼は初より學問界殊に官學界に出身し、行政官に轉ずる時と雖も、尙且つ隻足を學問界に置き、常に學者的立脚地を離れざりしものとい

ふべし。更に一步を進めて、彼の學問界に於ける事功を検すれば、彼の學者的資質と面目とは、一層明かに認むるを得ん。

彼が大學に關係する頃迄は、我文科大學の國文科は微々として振はざることを夥しかりき。初め古典科と稱するもの設けられ、小中村清矩、黒川眞頼、木村正辭、久米幹文、久米邦武、物集高見、小杉温邨等の諸元老主として教鞭を執り、落合直文、池邊義象、萩野由之等の如き俊髦を出したりと雖も、此等の諸元老は大學教育を受けたる學者にあらず。又新學を修めたる上の國學者にもあらず。謂はゞ御國言葉を昔風に解説したる學者に過ぎず。此中、久米邦武のみは、稍々新學の素養を有し、新思想を以て任ずる人なりと雖も、彼は寧ろ史學者にして國語國文の大家にあらず。出身者の落合、池邊も後年に大成したれども、當時學界に一時期を劃する程の力を具へざりき。萩野に至りては史學界の人にして、國語國文と何等の關係なきこといふ迄もなし。

和文學科時代に及んで、第一回(十九年)の卒業に戸田恆太郎あれども、杳として聞えず。二十年には卒業生一名もなく、二十一年に第二回卒業生として上田出づ。二十三年に三上參次、高津鐵三郎の二人出で、二十三年和文學科を國文學科と改稱し、博言

學科を言語學科と改稱す。これ實に我大學に於ける國學の一新紀元とも復興期ともいふべき年にして、上田萬年は、此年、此機運に乗じて西洋に行けり。而して彼が國學專攻者最初の留學生なること最も注意を要す。

國文學科第一回(二十三年)の卒業に和田萬吉あり。其翌々年に芳賀矢一あり。二十六年に菊池壽人出で、二十七年に藤岡作太郎、藤井乙男の二秀才出づ。而して此年上田歐米より歸り、新進少壯の教授として言語學を講ず。上田の歸朝前、國文學を擔任したる主たる教授は物集高見なり。其學必ずしも淺きにあらずと雖も、創見に乏しく新意を缺く、殊に言語學上の知識殆んど皆無なるを最も遺憾とす。

上田は和文學科より出身して言語學を專攻したるが故に、其學問には著しき特色あり。彼の言語學は普遍的のものにあらずして、日本的言語學なり。彼の和文學は古語や古文書を月并的に解釋したるにあらずして、博言學的、言語學的、解説をなすにあり。而して斯の如きは、彼の前代の學者の未だ説き得ざりし所にして、彼れ獨得の境地なり。日本言語學は上田によりて創めて組織せられ、體系ある學問として成立す。上田は日本言語學の創設者にして、我が國文學界は之が爲に一新生面を開けり。

彼は此一事によりても、優に明治の學術史、文明史に少からざる頁を占領すべき資格を有す。學者にあらずして焉んぞ此貢獻あるを得んや。

上田が大學教授となるや、國學に關する諸部門遽に生色を帯び、老衰の元老教授漸次に凋落し、有爲の後進續々として輩出し、勃然として文藝復興の一機運を生ぜり。即ち二十八年には國文學科に鹽井雨江を出し、言語學科に榊亮三郎を出す。二十九年には前者より林來太郎、杉敏介、武島羽衣、大町桂月、佐々醒雪等の秀才輩出し、後者より金澤庄三郎出身す。爾來、年毎に盛大に赴き、岡田正美、保科孝一、新保寅次、吉岡郷甫、坂本四方太、尾上柴舟、沼波瓊音、長谷川福平、岩城準太郎、藤岡勝二等續出し、國學界百花繚亂の姿態を呈するに至れり。而して此等の者悉く上田の教授を受け、彼の指導の下に大成す。上田の學者的感化インフリュエンスも亦偉大ならずといふを得ず。彼にして若し學者ならざれば、焉んぞよく此等の俊髦を輩出せしむることを得べけんや。

夫れ然り、彼は學者なり。併かも死語を骨董いぢりして喜ぶ腐儒にあらずして、活きたる學者なり。彼は明治年間國學界第一流の功勞者なり。然れども彼は、大學の威嚴を藉りて、擅に勢力を扶殖したる所謂官學者流の模型にあらず。彼は文博の學

位を有せずとも尙ほ能く學者として立ち得べき素質と素養とを有し、大學教授の官職に就かしめずとも尙ほ且つ何等かの貢獻を學界に寄與し、相當の勢力を民間に扶殖し得べき學才と手腕とを有す。彼の如きは疑もなく學界近時の珍品なりといふべし。

然りと雖も、是を以て直ちに彼を稀代の大學者なりとするは大なる謬りなり。彼は赤裸々たらしむるも尙ほ學者たるを失はずと雖も、然かも亦金冠紫衣を着けしむるも遂ひに學界の王者たること能はざる人物なり。彼は博覽強記に於て井上哲次郎に及ばず、調査力に於て三上參次に及ばず、學識の深刻に於て必らずしも坪井九馬三に優らず、國學の造詣に於て必らずしも芳賀矢一の上に出でず。此等の數者たる各々學問の方向を界にすと雖も、知識の總量に於ては、決して上田の下風に立たず。其他後進の學者に於ても、蘊蓄の量に於て上田に劣らざるもの決して少しとせず。我學界未だ甚だ幼稚たるを免れずと雖も、從來の功績を別問題として唯だ現在の學識のみを標準にするを得ば、上田程の學者は他に幾何もある事を認めざるを得ず。然らば上田が今日の大を致したる所以は、決して純乎たる學者としての結果にあ

らざることを明かなり。其原因は他にありて存す。他とは何ぞや。言ふ迄もなく、彼が政治家的資質を具へ、行政家的才幹を有することこれなり。彼が外山正一の推薦を得て、澤柳政太郎と共に文部省の局長となりしは、彼の行政的才幹が先輩外山によりて識認せられたるが爲也。而して彼が大學を去りて文部省へ入ることは、外山以外の先輩の多くが賛成せざりし所にして、菊池大麓の如きは彼の爲に辭退すべきを勧めたりと傳へらるゝにも拘らず、彼が決然として文部省に入りたるは、外山の厚意辭み難きものありしにも因るべしと雖も、亦一には彼が行政に對して天性相當の趣味と野心とを有するが爲にも因らざる非ず。加ふるに當時彼は三十二歳の壯年にして、大學教授としては漸く六等官たりしに過ぎず。然るに局長となれば一躍勅任官たることを得たるべきが故に、一身の榮達に關する功名心も大に躍動したるべく、従つて入省の決意を助けたることも少からざるべきを疑はず。

上田が文部省の局長となりしは、彼れの爲に利益なりしや否や、彼の一生涯より見て俄かに斷ずべからず。彼が早く官歴に高處を占め、一身上の貫録を速かに作り、三十代にして早く既に學界重鎮の域に進みたるが如く世をして思はしめたるは、彼が

文部者の局長となりしこと、與つて大に力ありしを疑ふべからず。少くとも世人の耳目を聳動し、社會をして早く上田萬年なるものを認識せしめたるだけの功ありしは争ふべからず。

『上田萬年は國學專攻者なりと雖も、其本領は決して單純なる學究徒たるにあらず、國家の政治に對しても一隻眼を有し、行政の實際に對しても一廉の才幹を有す』といふことを廣く世に認識せしめたるは、主として彼が専門學務局長となりし事の賜にして、終始大學教授のみの歴任によりて容易に爲し得る所にあらず。彼にして若し文政の將來に野心を有すること、今尙は依然たるものあらば、此『社會の認識』が、他日彼の野心を實現する上に少からざる援助を與ふること固より言を俟たざるなり。而して彼れ自らに於ても、親しく行政の實際に經驗を嘗め、天賦の才能を實地に修練し、文部省を中心として廣く政治圈内の空氣に接觸し、且つ其の呼吸を解し、宮中や宮内省や樞密院や貴族院等の事情に通曉し、且つ其等の處に居る人々の心理作用を會得する等の機會を得たるべきが故に、『文政の料理』なるものに就て相當の自信を養成し得たるに相違なし。果して然らば、彼が文部省に入りし事が、彼に與へたる利益

も尠少ならずといふ可し。

然れども、翻つて反面を觀察すれば、不利益の點も決して絶無にあらず。彼れにして若し文部省に入らず、終始大學にありて學問に専念したりとせば、彼は學者として今日以上に大成したるべく、學界に寄せたる貢獻も恐らく今日以上遙かに大なるべきを疑はざるなり。彼れ最近十年間高等師範の松井簡治と協同して一大著述に従事し居れりと傳聞す。未だ出版せられざるが故に、其書が幾何の學術的價值を有するものなるかを知るに由なしと雖も、唯だ『十年間以上精力を傾注せる事業』といふだけにて、其書が確かに學術的大産物なることを推知するに難からずとす。而して此大産物は、上田が若し中途大學を離れず、終始學問に没頭することを得たりせば、數年の昔、既に活字となりて世に現はれ、今日盛んに社會を裨益しつゝあることならんと想察せらる。然かも事未だ此に到らざるは、彼が中途行政官に轉じたること、之れが因由をなすことならんや。斯の如きは極めて些々たる一事例に過ぎずと雖も、偶々以て其一般を推すの材たらずとせざるなり。

凡そ人の事業に成功し、名を末代に遺し得るは、天品の優秀與つて然らしむるは言

を俟たずと雖も、亦一には生前に於て、精力を一事に集注し、初志に向つて終始一貫努力奮闘するが爲めに外ならず。

然るに今上田を観る、彼は初め學者たらんと志し、漸く目的の初階に達したる頃、遽かに方向を轉じて行政官となり、學事を中絶す。行政官となりて暫くするや、未だ成功の域に達せずして、早くも既に官吏生活に倦み、樺山が文相を辭して松田が之に代れる時頻りに辭意を漏らして大學に復歸せんことを願望す。松田荐りに留任を勸告したるが故に、彼も已むを得ず一時辭意を醸したりと雖も、松田文相を罷めて菊池之に代るや、彼れ再び辭表を提出して終に、大學に歸れり。菊池は上田が初めて文部省に行く時に、不賛成を唱へたるほどの行きが、りもあれば、直ちに上田が辭任願を聽許したるなり。大學に復歸したる後は、今度こそ此處を終生の立脚地として大に學事に専念すべき筈なるに、彼は尙ほ之をなすこと能はずして、常に文部省と不即不離の關係を繼續し、種々繁多なる俗事に關與するのみならず、今日に及んでは、將來一大飛躍を試みて一度は文部大臣たらんとするの野心あることを隱見せしむ。何ぞ其多情多方面にして、精力不集注の甚だしきや。

斯の如くして彼は、學問と行政とを兩股にかけて轉々す。其狀恰かも鰥足の翠丸の如きものありて存す。融通利いて孰れにも役立ち、一方に失脚するも他方に立身するの長處あるは言を俟たずと雖も、其代り一方に傑出して一世に大功を樹つるの力乏しき短所あるを免れず。

見よ、上田の今日を。彼は今學界の太立物となり、大學の一大勢力たるが如しと雖も、然かも彼の同輩の現地位と比較して果して異數の成功ありと稱し得べきか。彼の等輩としては文學士に岡田良平あり、澤柳政太郎あり。法學出身に平沼麒一郎、小松謙次郎、大島久滿次、一木喜徳郎、内田康哉、早川千吉郎、林權助、林田龍太郎、木内重四郎、松崎藏之助の數者あり。中に就て、岡田、澤柳の兩者最も上田と比較し易く且つ至當ならんと信ぜらる。蓋し三者皆同じ畑の人なるが故なり。

上田と澤柳とは同年の大學卒業生にして、同時に局長となる。岡田は一年前の卒業なれども局長となりしは、上田、澤柳の後なりき。従つて當時の名聲に於ては、上田最も高く、澤柳之に次ぎ、岡田最も劣りしといふを適評となす。然るに數年の後に至れば、初め最も不評にして昇進の最も遅かりし岡田は、他の二者を差し置いて先づ次

官となり、尋で貴族院に入り、更に轉じて京大總長となり、再び入つて次官となり、今野に在つて靜養す。教科書祕密漏洩事件を以つて一度び失脚したる澤柳も岡田に次で次官となり、曲りなりにも貴族院議員となり、今、東北大學に總長たり。上田獨り未だ次官とならず、貴族院にも入らず、總長ともならず、今漸く文科大學々長たり。文科大學長の地位決して低しといふにはあらざれども、然かも亦決して次官より高しといふを得ず。田舎の大學總長必らずしも羨むべき地位にはあらざるべしと雖も、然かも亦決して東京の分科大學長よりも下位なりといふを得ず。然らば現時の上田は、岡田、澤柳に比して、經歷上一日の遅れありといふも、強ち不當の評にはあらざらん。最初、最も名聲高く、最も早く昇進したる上田が、今日に於て最も下位に落ちたるは何故ぞ。他なし、彼が『鰐足の翠丸』的態度を取りたるが爲に外ならず。上田は創見に富み、新意を有し、學者として大貢獻をなし得べき資質を具ふるにも拘はらず。天賦の行政的趣味と野心とに妨げられて、終に學者として一生を貫くこと能はず、行政的才幹に富み、政治家的資質を有し、經國の實行家として立派に成功し得べき天賦を具ふるにも拘らず、生來の學者的才幹に妨げられて、終に行政家として押し通すこと

能はざりしなり。若し彼れの學問に對する才能と趣味とをして、今少し淺薄ならしめば、彼は局長に推舉せられたるを好機として學問を一切廢絶し、一意専心行政事務に勵精したるべきを疑はざるが故に、經歷に於ては確かに今日以上に發展して居るべく、恐らく澤柳よりも先に次官となり、貴族院議員ともなりたるに違ひなけん。思ひ切つて俗界の人となるには餘りに學才多く、思ひ切つて學界の純人となるには餘りに俗氣多きを上田の本體となす。故に彼は學界にあれども、所謂眞の學者にあらずして政治家的學者なり。終始行政部面に着目し、政治的識見の涵養に努むと雖も、所謂眞の政治家にあらずして、學者的政治家たるを免れざる也。此一事、不知不識の中に彼をして往々兩兔を追はしめ、一途の大成功を妨害す。

然りと雖も、物には必らず利害相伴す。上田が政治家的學者にして學者的政治家なる事は、上述の如き不利を與ふるに違ひなしと雖も、然かも亦彼をして大學に勢威を揮はしむる所以ならずとせざるなり。大學の勢力と利害とを外に代表し、適宜の時、適宜の場所に於て、適宜の發言をなし、其發言に十分の效力を現はしむるは、單純なる學者の甚だ難しとする所、而して政治家的學者の甚だ易しとする所なり。人を統

一九六
率し各部の調和を圖り巧みに衆智を總合しつゝ事務を刷新し事功を擧ぐるは故參
の肩書や學問的造詣の深遠のみを以て能くする所にあらず。必らず事務的才幹と
行政的手腕との力に倭たざる可らずとす。然るに此等の點に於て文科大學中一人
も上田の右に出づる者あらず。是れ上田が先輩數者を抜いて學長となり併かも大
に大學内部の歡迎を受け得る所以なり。

(二) 智術の人か度量の人か

凡そ人の顯要の地位に居りて士心を攪るは、知術の以て群豪を統御するに足るも
のあるか、然らずんば度量の以て人を服せしむるものあるが爲に外ならず。

上田は講義に要領を得せしむること案外巧みなりといふと雖も、教授としては恐
らく當代の一流者たらざるべく、學者としても稀觀の大才なりといふを得ざるべし。
蓋し彼は知識の人にあらずして寧ろ智見の人、事實の倉庫たるべき人にあらずして
寧ろ見識の源泉たるべき人なるを以てなり。

彼は教授たるよりも學長たるに適し、人の部下たるよりも人の長たるに適當す。
帷幄の裡に籌謀劃策し、陰に居りて大勢を動かすことに興味を感ずるよりも、表面の

舞臺に立ちて人を統率し、部下をして各々其能を盡くさしむる事に寧ろ大なる興味
を感じ、一層勝れる長技を有せん。然らばそは彼が智術に長けたる爲なるか、將た又
度量の宏濶なるが爲なるか。

我輩を以て觀るに、彼は智術の人にして度量の人に非ず。狹量の人にあらざるは
勿論なりと雖も、斷じて包容博大の人にあらざるなり。彼れ好んで當代を批評し、皮
肉の言辭を用ゐて人の短處を指摘し痛快に罵倒して眼中英雄を空しうすることあ
り。斯の如きは、畢竟彼の一種の戯れに過ぎざるべく、決して惡意を以て、故意に之を
示すものにあらざるべしと雖も、然かも終に度量宏濶ならざるの證左たるを免れず。
古今の大人物が人を鑑識したる跡を見るに、皆悉く人の長處美點のみを觀て、努め
て短處缺點を不問に附したるものゝ如し。所謂適材適處とは、人の長處のみを指す
語にして、短處と何等の關係なきことを知らずや。

包容濶大といひ、清濁併呑といふも、共に大人物が人の缺點短處を觀察せざることを
を表明する形容詞に外ならず。常人が觀て少々缺點ありとする人物も、大人物は毫
もそれに頓着せずして、唯だ其長處のみを識認し、一技一能あるものは、悉く之を幕下

に招致するが故に、之を稱して包容濶大といひ又は清濁併呑といふなり。故意を以て徒らに人の缺點短處を指摘して快哉を叫び、又は人物を毛嫌ひして愛憎を厚くするものは、其人必らず大人物の資質に乏し。筆舌の批評家としては尙ほ可なりと雖も、國家を擔當する器物には斷じてあらず。故星亨は缺點多き人物なりしと雖も、長處も亦多量に具へたる人なりき。彼を用ゐて遞信大臣となしたる伊藤博文は、彼を攻撃して慘禍に斃れしめたる島田三郎よりも人物の大なることいふ迄もなし。

上田が往々、皮肉に人の缺點を惡口するは唯だ面白半分になすものにして、格別惡意を以てなすものにあらざるが故に、田尻や犬養や島田等の惡口と同日を以て談ずべからざるものありと雖も、兎も角、彼の徳の幾分を損し、士心を得るの妨となること論を俟たざるなり。

上田にして度量宏濶ならば、戲談にも人の缺點を指摘することなかるべく、包容濶大ならば人の短處を觀んとすることもなかるべし。然るに彼は之を觀、且つ數次之を語る。器局の狹小を以て目すべからずとするも、博大ならざるは争ふべからず。彼は度量の人にあらざるのみならず、又徳の人にもあらざるが如し。彼は性情甚

だ親切、後進に同情し、之を誘掖指導することに努むるが如しと雖も、そは彼が一片の俠氣を有するが爲にして、決して天賦の徳性の發露したるが爲にあらざり。又決して倫理的理想の體現せられたるが爲にもあらざる也。彼は高人の氣韻を偲ばしむる點に於て到底濱尾新に及ばず、國士の典型を想見せしむる點に於て素より山川健次郎に及ばず、青年感化の偶像を想はしむる點に於て狩野亨吉に及ばざるなり。彼は才の人、手腕の人にして、重厚沈毅は彼の人格中の主要成分にあらざり。

彼の先輩中に彼の匹儔を求むれば、恐らくは外山正一と菊池大麓との二者ならん。上田を以て外山に比すれば、學問に於ては上田が優るも、霸氣に於ては乃ち及ばず、轉じて之を菊池に比すれば、才幹に於ては相伯仲するも、智略に於ては乃ち上田が優る。然れども此二者には上田と似たる資質少しとせず。就中外山に於て最も然りとす。外山は官學萬能の鼓吹者にして、局量稍々狹小、所謂清教徒的氣質を有したりき。これ彼が生粹の江戸ッ兒なりしが爲ならん。上田は尾張の藩士なりと雖も、江戸に生れて東京に育ちしが故に、准江戸ッ子を以て目すべく、田舎人を以て目す可らず。故に彼も江戸ッ子に免かれ難き清教徒的氣質を有す。清教徒的氣質を有するもの

は、任侠に富めども包容濶大なること能はず、所謂豪傑たること能はず、不得要領なること能はざるなり。而して外山も上田も恐らく此範疇の外に出でざらん。

當世の學者、動もすれば矜傲尊大、悻々自ら喜ばんとする通弊を有す。然るに外山は何人に對しても、城壁を設けず、差等を立てずして、直ちに胸襟を吐露し、議論を上下するを好みたりき。而して上田も實に此美質を有す。上田は他より敬屈辭儀せらるゝも、時として何等の答禮をなさることあるが故に、人によりては彼を認めて尊大自ら高うすといふ者なきにあらざると雖も、其心底は甚だ平民的にして且つ親切なり。

我輩、現時、上田と同町十歩の間に住し、數次、閑談の爲に彼を訪ふ。彼れ未だ一度も留守を使ひたることなく、居れば必ず面接す。某日偶々彼の將に他出せんとする時に訪問す。而かも彼れ尙ほ面會を謝絶せずして、快く寢衣の儘で出で、引見し、談數刻にして、『今日は生憎大學の講義のある日で、何時から行かねばならぬが、まだ時間があるからモ少し話し給へ』と斷りつゝ、快活に談笑す。

澤柳政太郎もよく客を引見し、平民的に語るを以て有名なり。其偶々他出せんと

する時に客あるも、之を謝絶せずして引見するを常となすは上田に異ならず。然れ共澤柳は決して上田の如く寢衣の儘にて面接せず、先づ客をして座敷に通らしめ、己れは洋服を着け、悉皆他出の準備をして而して後に客間に來りて接し、開口一番、『生憎、他出せんとする所なれども、まだ時間があるから暫く話して行き給へ』といふ。辭令、應對、上田のそれに髣髴たるものありと雖も、客をして寛濶せしめざる點に於ては、上田に優るといふを憚らず。如何に辭令を巧みにして、『マゝ寛つくりし給へ』といふとも、主人既に洋服を着けて他出の用意あるを告ぐれば、客、周圍の急迫せる空氣に壓せられて、早々辭去せざるを得ず。之に反し、主人寢衣姿で面接すれば、他出の用意あるを聞くと、周圍の空氣に餘裕あるが故に、何となく寛つくりして用談を濟ますを得。孰れも客に長座せしめざる點に於て相等しと雖も、客の氣分に與ふる影響に緩急の差あり。一は所謂セツパ詰つた氣分を起さしめ、他は乃ち餘裕ある氣分を保たしむ。而して是れ上田と澤柳との性格の異なる所にして、上田の一層平民的にして親切なる證左なり。

外山は衣貌を修めず、儀容を飾らず、常に武骨なる長靴を穿ち、粗末なるフロックコ

トを着くるを以て有名なりき。而して上田も此等の諸點に於て寸毫も外山に異ならず。殊に粗末なるフロックコートに十年一日の如く着用する一事最も酷く似たりといふべし。外山は又蓄財に長ずるの評判ありき。上田も其部類の人ならん。上田は相當の住宅を有し、貸家の五六軒をも所有す。金の人より觀れば物の數にも入らぬ微財なりと雖も、學者の身としては蓄財に長ぜずんば能はざる所なり。

上田の外山に似ること概ね斯の如し。されど其差違點を求むる亦決して難きにあらず。外山は意氣の人、氣概の人、霸氣の人にして、口を開けば必ず議論あり、光焰甚だ揚りしと雖も、其胸中は光風齊月、心裡に一點の雲翳をも止めざりき。上田も意見に富み、議論に長ずると雖も、外山の如く秋霜烈日の霸氣を有せず、警々諤々、天下を吞吐する氣概を有せざる也。上田の胸中には策略あり、其心裡には多少の掛引あり、外山の如く正直ならず、摯直ならず。其心術は寧ろ甚だ複雑にして、人格の半面は常に之を人に見せざらんとする横着者の資質を有す。外山には熱心あり、主張あり、信條あり、而して之を現はすには必らず大膽露骨なる言辭行動を以てし、敢て時處を顧みざるの風ありき。これ彼が江戸ッ子氣性と正直とを兼ね具へたるが爲なり。上田は

然らず。彼は主張を唱ふるに露骨ならず、信條を吐露するに時處を顧みざることなし。如何なる場合に於ても、如何なる事物に對しても、外山の如く突進的態度を取ること斷じてあらず。

上田は官學臭を帯び、大學偏重の私情を有し、學閥擁護の潛望を抱く點に於て決して外山に劣らず。然れども彼は之を容易に表に現はさず、多數者をして公平無私の人の如く想はしめつゝあり。未だ曾て一度も、外山の如く『赤門天狗』の綽名を取りしことあらざるなり。これ彼が天性横着にして心底圖々しく、言動を苟且にせざるの致す所なり。要するに外山は武人の器、上田は政治の材といふべきか。一以て豊臣秀吉の意氣に例ふれば、他は以て徳川家康の術に例へざるべからず。其華々しくして壯快、懦夫をして起たしむる颯爽たる英姿に至りては、秀吉の壇場にして家康の及ぶ所にあらず。然れども深謀遠慮、着實堅硬、智術を盡くして時處に順應し、計畫的打算的に永久の事功を擧ぐる點に至りては、家康の壇場にして秀吉の及ぶ所にあらざるなり。

上田曾て三上參次と提携發企して、某史蹟の調査顯彰に従ひ、天下有志贊同の士を

募る。三上主として東奔西走し、事務の殆んど全部を擔當す。嘗に其勞力を惜しまざりしのみならず、其間に要せし費用をも自辨して幹旋勞苦甚だ努めたれども、上田は初めより何事もなさず、一文の費用も支出せず不熱心といはんより寧ろ無責任の極致をきはめたり。然るに事漸く緒に就き、贊同者の集會を開くに及んで、上田突如として金三百圓を事業の爲に寄附す。會衆上田の熱心と義俠とを感賞し、且つ各自も奮つて若干金宛を醸出す。最も面喰ひしものは三上なり。三上は従前上田の助力を藉らず、殆んど獨力にて事を運びしが故に、若し發企人に功ありとすれば三上獨り其感謝を受くべく、上田の之に與らざるを至當とす。加ふるに三上は必要の都度金員を支出し來りたるが故に、其額は積り積つて優に三百圓に達したるべく、假りに發企人より醸金の必要ありとするも、三上は更めて之を爲すの責務なかりしを當然となす。然れども贊同者の多數は、斯の如き内部の事情を詳知せざるが故に、唯だ上田の義舉を偉なりとして其熱心を賞し、功を上田一人に歸せしめんとす。三上たる者多少の感慨なくして已み得んや。乃ち敢て上田と功を争はんとするにあらずと雖も、等しく發企人中に名を列ぬる身にして餘りに不熱心の如く想はるゝも心外な

りしが故に、一には自己の體面を維持する爲と、二には従前の勞苦を全然椽の下の力持ちに終らしめざるとの爲に、餘計の義務とは思ひつゝ、強ひて自勵して三百金を寄附せり。乃ち三上は勞力の外に前後通計して上田の約倍額を醸出したる也。然れども贊同者の多數は、此に至るも尙ほ三上を賞せず、上田の美舉を見て不精無精に醸金したる澁り屋とせり。三上は上田の如く蓄財を有せず。故に必要に應じて少し宛醸出するは苦痛にあらずと雖も、三百金を纏めて一時に支出するは當時苦痛としたる所なり。是を以て彼は、上田が三百圓寄附を申出でたる時、即座之に倣ふこと能はずして、歸宅後二三日熟慮して初めて上田と同額の寄附を申出でたり。これ多數者をして一層不熱心者の澁り屋と想はしめたる所以なり。

上田は斯の如き人物なり。機略に富み、術數に長ずること、素より普通學者の模型にあらず。其行り型は殆んど政治家的なりといふを憚らざるなり。平素齷齪として小事に勞苦せず、當事細故は人をして執行せしめ、唯だ要處に楔を打つことのみを努む。而して事成るに及んでは、乃ち功を己れに收め、名を世間に嘖々せしむ。上田は事に當りて急らず、熱注せず。徐ろに方策を廻らして巧みに自己の意見を

行はんことを期す。彼れ頃日、文科大學長となり、教授會に議長として臨む。然れども議に先つて自己の意見を述べたることなく、我意を通さんとしたること一度もなし。彼は唯だ衆議を徴し、之に採決するのみを以て任務とす。坪井九馬三の如く我意を述べず、又專斷せず、常に協和的態度を以て事を執るが故に、徳を以て人を服し、至誠を以て人を動かすこと能はざるべしと雖も、然かも尙ほ稀有の良學長なりと好評せられつゝあり。これ一に彼に智術の以て人に優るものあるが爲めに外ならず。

(三) 未來の文部大臣か將來の總長か

讀賣新聞の一萬二千號記念誌に於て、上田、本邦國語の將來を論じ、改變の已むべからざるを説き、『政治も解り文學も解る人文部大臣となりて一大英斷を下す時を俟つ。の外なし』と曰へり。『政治も解り文學も解る人』とは誰ぞや。惟ふに夫子自身を指せるものに外ならず。然らば彼が未來の文部大臣を以て自ら任ずること今猶ほ昔日の如きものあるを知るべし。若し『志のある所必らず方法あり』との格言をして眞ならしめば、彼れ或は未來の文相たるを得るならん。然れども文部大臣は、學界、教育界の官職にあらずして、政治界の要職なり。従つて此に任ぜらるゝものは、原則とし

て政界に地盤と系統とを有する有力の材たるを要すとす。上田は人物識見に於て歴代文相を通じて二流を下らず。故に此點より見て彼を未來の文相に擬するも些の不當あることなし。唯だ彼に憂ふべきは、彼が政治的地盤と系統とを有せず、政界の大立物と何等の連絡を有せざることの二點なり。斯の如くして能く文部大臣たらんとす。不可能にあらずとするも大なる困難あるを免れず。

想ふに彼は學長より總長に進み、總長より文相に轉ぜんとする野心を有するに違ひなし。斯は外山、濱尾、菊池等の履みたる徑路にして何人も想到する順序なり。上田が之を踏襲せんとするは決して不可ならず。然りと雖も、文部大臣は教育家たるを可とすといふ思想の既に陳套に屬するは、恰かも陸海軍大臣が軍人たるを要すといふ官制の不當なるが如し。外山、濱尾、菊池、久保田の數者が過去に於て教育界より出で、文相たりしといふ事實を以て、直ちに今後に於ても、後進の進行し得べき徑路なりと想は、多少の誤りなきを保し難し。

首相若し教育界の元老又は有力者を誘致して入閣せしめ、之によりて教育界の人氣を博し、操縦の便に供へんと欲する權宜に出づれば格別なれども、然らざる限りに

於ては、純然たる學者又は教育家を唯だ元老なりとの理由の爲に文相に任ずることは將來恐らくあらざらん。上田は半政治家にして純乎たる學者教育者にあらざるが故に、彼れにして若し總長となり、教育界の元老たるに至らば、他の者に比して或は大なるポツシビリチを有するに違ひなし。然れども未だ機會到來確實なりといふを得ず。

然らば上田の確實なる將來は如何。言ふ迄もなく、東京帝國大學の總長たる事にあり。彼の總長たるべきことは唯だ時期の問題にして能否の問題にあらず。

濱尾總長を辭任せば醫科の青山胤通恐らく其後任たらん。法科の兩穂積は自ら固辭して受けざるべく、富井政章も辭退するを必然とせん。理科の箕作、櫻井と工科の渡邊渡とは適任の材器に非ざるべく、農科の古在由直と文科の上田とは、人物才幹に於て、共に不足なき總長たらんと雖も、醫科の青山に比すれば、稍々後進にして先を争ふの地位たらざるが故に、濱尾の後任には青山を擬するを至當とす。青山は、器宇狭小ならず、名望高くして勢力大學の内外に振ふ。伯大隈は彼を評して、大臣の器なりと迄推賞したる程なるが故に、總長として不足なきは恐らく定評ならん。上田が

總長たるは、青山の次か、將た又其次か。要は青山の勤績年限の長短により決せられんのみ。古在は學長として上田よりも先輩たれども、全體の經歷に於ては上田の方が先輩たるのみならず、總長は必らずしも學長を経ざるべからざるものにあらざるが故に、總長候補者としては上田の方が優位有望ならんと信ず。

東大總長は、教育界の最高顯職にして、其名譽光榮文部大臣に劣らず。上田にして將來總長たるを得ば、彼の野心は半ば達せられたりといふべく、愁ひに文相たらんとするよりも、ドツシリ腰を落ち着けて、大學及學界の向上進歩に貢獻するを可なりとすべし。(四十五年七月)

六、文部省の中樞人物 (上)

(一) 三局長の人物

文部省の現任局長中行政官として大に出色あるものを福原●專●門●學●務●局●長●となす。福原は三重縣の人、明治二十五年の帝國大學法科卒業の法學士にして、内務省の水野練太郎、前外務省政務局長の山座圓次郎、法學博士高根義人、美術學校長正木直彦、臺灣

總督府民政長官祝辰己等と同期の出身なり。彼は大學時代の秀才にして、其卒業の席次は七十人中の第四位を占めたりき。教育行政官としての彼の手腕は、今尙ほ未知數の部分の有するが如しと雖も、而かも一代の具眼者を以て目さるゝ侯西園寺をして『福原は大成すべき人物なり』といはしめ、前文相牧野伸顯をして『未來ある行政官なり』と推賞せしめたる事實に徴せば、彼れ決して凡庸の材にあらざるなり。

普通學務局長松村茂助は二十七年の大學出身にして、法學博士岡松參太郎、倉知政務局長、法學博士志田鈿太郎、同高橋作衛、同田島錦治、同小林丑三郎等と同期の卒業なり。彼は静岡縣の人にして、始め地方事務官を歴任し、三十二年現文部次官岡田良平の推薦によりて、長崎縣參事官より文部省參事官に轉じたるなり。彼が福原に比して昇進上數年の後れある事は、一には彼が約二年の後輩たるに原因することも勿論なりと雖も、然かも極公平なる批評家の眼より觀て、現在の松村は福原に比して、稍々人物手腕の劣れるものあるに原因することを認めずんばあらざるなり。斯くいへばとて吾輩は決して福原を揚げ、松村を貶さんとする私情を有するものにあらざり。批評家の地位を離れ、唯一個私人としての藤原よりいへば、福原よりも寧ろ松村に厚

情を有する者、面會の度數も亦松村の方を多しとす。然れども斯くの如き事情は人物評を書くに當て、全然拂掃せざるべからざるなり。蓋し人を品騭するに當り、己の私情を挿んで之を上下するは、世を誤るの最も甚しきものなればなり。

然して又現在に於て、松村が福原に劣れりてふことは、必ずしも將來に於ける兩者優劣の斷定を意味する者にあらざるなり。福原は圓熟して老成の面影あり。松村は蠻骨にして尙書生肌を脱せず。前者は諸事に如才なく、言行に多少の懸引ありて、稍々政治家の素質を具へ、松村は外觀頗る圭角に富みて恰かも處士の如し。福原に採る所は、主として公人としての手腕にあり。松村の長所は寧ろ私人として堅實なるにあり。福原の人物は必ずしも世評の如く大ならず。然れども大きくらしく見せしむる長處を有す。彼は衷心頗る激する時に於ても容易に之を色に現はさず。他人に對する應酬甚だ圓轉滑脱にして、辭令に巧みなること、普通事務官の才にあらず。而かも其態度言容何所となく自然にしてわざとらしき所なし。約言すれば福原は既に能くレフ・ハインされたる人物なりといふべし。

然れども松村は全く之に反す。彼は事務上のことについて往々血氣的蠻勇を振

ふことあるのみならず、日常の言行に於ても往々にして生硬の所作をなす。某新聞記者嘗て彼を文部省の局長室に訪ふ。彼れ記者に斷りて曰く『今行りかけの仕事あるが故に暫時其所にて待てよ』と。記者則ち之に従ひて彼の机前の椅子に腰を掛くること良久。彼れ間もなく仕事を了りて手提鞆を整ふ。而かも彼は眼前に面談を待てる記者のあることを知らざるものゝ如く、飄然扉を排して退省せんとす。記者則ち驚いて後より聲を懸け、『用談の故を以て面會を乞ひ、貴下の命によりて今迄待ち居たりしにあらざるや』と彼にいへば、彼れトボケ顔して之に答へ、『あゝ然りしか、悉皆忘却し居たり。併し本日は尙ほ他に用事あるが故に、氣の毒ながら用談は明日に延し呉れよ』といひ捨て、何の遠慮もなくスタ／＼と出で行けりといふ。然かも斯くの如き事例は、決して珍らしき事にあらざるなり。彼の性行を熟知する者は、彼が假令加何なる言動をなすとも、之が爲に決して不快の念を起さず。然れども人によりては、彼に對して反感の念を起すことなきを保せざるなり。

彼又嘗て會計課長たるの時、金錢出納に關して上司と争へること屢々なりき。儘か澤柳政太郎が普通學務局長たりし時のことなりと覺ゆ。澤柳或施設に對して若

干の費金支出を當時の會計課長松村に求む。松村其請求書を検して、之に附箋を貼り、豫算の性質に違へる支出なりと認むるが故に、請求に應じ難しと記して、局長の許に返戻す。澤柳之を見て、生意氣なりといはぬばかりに松村を呼び、諄々として請求の適法なるを説き、杓子定規を弄せずして直ちに支出すべきを勸む。然れども松村頑として之を聽かず。先輩の澤柳を相手として飽く迄之と抗争せんとする態度を示す。澤柳聊か之を持て餘して、先づ次官に諮り、次いで大臣に迄持ち出して其裁決を乞ひ、然るべく松村を諭されたしと申請す。文相即ち松村を喚び、『足下のいふ所にも一理あるならんと雖も、局長の計畫せる所は、寔に有益なりと認むるを以て費用の支出を拒むべからず』と命令す。茲に於て松村如何ともすること能はず、再び送致し來れる局長の請求書に對し、半紙大の大附箋を造り、稍々太き水筆を以て、『本官は此支出を不當と認むれども、大臣の命あるにより止むを得ず承諾し置くものなり』と大書して捺印し、以て漸く其請求に應じたりて、ふ一奇談あり。全半紙一枚の附箋も奇抜なれば、其附箋に記入したる文句も頗る奇抜なり。東都役人多しと雖も、斯くの如きことをなすもの、松村を措いて他に一人もあらざるべし。此等の事たる、眞と

に一小些事に過ぎずと雖も、亦以て松村の性格の躍如たるを認めずんば、あらざるなり。

松村は蠻勇なるが故に、人をして往々其遣り口の壯快なるを感嘆せしむることなしとせず。仕事をなす技倆に於ても、亦決して通常以下に降る人物にあらず。向後の修養如何によつては、未來ある行政官たること疑ふべくもあらざるなり。

然れども現在に於ける松村は、未だ決して圓熟せる行政官にあらざるなり。彼の他に對する應酬が、啻に生硬なるのみならず、行政上の事に關しても、往々天賦の奇抜癖を現すことあり。奇抜を好む性情は、人の青壯時に於ては、萬人を通じて有する所なれども、年齢の長ずるに従つて、漸次此傾向の減退するを常理となす。換言すれば、人の奇抜癖は、人に稚氣ある時に最も盛なるものにして、稚氣の失せるに従つて、奇抜癖も亦沮喪するものたらずんば、あらざる。故に之を逆にいへば、奇抜癖を有するものは、未だ稚氣を脱せざるものにして、精練されたる人物と稱することを得ざるなり。而して松村は諸事尚ほ書生肌にして奇抜癖を有す。遣り方に多少の稚氣あるは、奇しむに足らざるなり。福原は全く之に反す。彼は年齢に比して、稍々精練され過ぎ

たる嫌ありといひ得べしとするも、決して尙稚氣を脱せずといひ得べき所一もあらざるなり。彼は書生肌の所毫もなく、奇抜の施設を試みて時人を驚かさんとするが如き若氣微塵程もなし。難關に處して蠻勇を振ひ、四圍の事情に眼を假さずして、是が非でも己の所思を斷行せんとするワイルド性に於ては、福原到底松村に及ばず。されど、敢て事功を急がず、柔を以て剛を制し、内に外に樽俎折衝して、交讓の中に自己の意見を實行し、其施設をして常に穩健中正ならしむることを期する點に於ては、松村到底福原に及ばざるなり。

福原に惜しむべき點は、精練され過ぎて老獯視さるゝ恐れあるにあり。松村に惜しむ點は生硬にして圭角に富めるにあり。然れども人に稚氣あるとは、尙ほ其人に將來あることを示すものにして、言動の生硬なるは、尙ほ精練の餘地あるを現はすものに外ならず。此意味よりいへば、松村は青年の如く、福原は成年の如し。其未來ある點に於ては、兩者全く相等しといへども、人物全體としての總價値を判斷し得べき時期は、福原に於て早く來り、松村に於て遅し。

然らば實業局長眞野文二は如何。彼は明治十四年の工部大學卒業生にして、文部

省高等官中の最年長者なり。彼は工學博士にして現に帝國大學教授たり。彼の機械工學に於ける造詣は必ずや敬重すべきものあらん。然れども行政に對する彼の修養は必ずしも深しとせず。彼は數年文部に職を奉ずるが故に、教育行政に對して少からざる經驗を積めるは、固より言を俟たずと雖ども、然かも行政學及行政法に對する學問的修養は、恐くは他の二局長に比して劣れること疑ひなけん。彼は要するに常識的行政官にして専門的行政官にあらざり。彼の本領は學者たるにありて、行政官たるにあらざり。而して彼の志も亦行政官其ものにあらざるべし。

頃日高等商業學校騷擾事件起りて、彼一時校長事務取扱となる。事件鎮りて後都下の新聞記者五六、一日次官岡田に面會を求めて、專任校長如何を以て問ひ、其未だ何人とも確定せずとの答あるに及んでや、記者の一人自ら候補者を物色して曰く、『眞野局長を專任校長となすやの風説あり。其眞僞如何』と。次官微笑して之に答へず。吾輩則ち横槍を入れて『信ずべからざる風説なり。文部省も之を薦めざるべく、假りに薦めたりとするも、眞野局長は斷じて行かざるべし』といふ。記者の一人我輩の斷言、餘りに確然たるに喫驚して『何故然るか』と反問す。我輩即ち其理由を説い

て曰く、『眞野局長の本領は學者たるにありて、工科大學に於ける席次も甚だ高し。かるが故に現在に於ける地位と名譽とは、此一事のみを以ていふも高等商業學校長以上なり。従つて今大臣の薦めによりて一橋高商の長たらんか、假りに良校長の名を博したりとするも、彼にとりて決して榮譽とするに足らず。而して若し萬一にも失敗することあらんには、大なり小なり彼の名譽を傷くるに至る。然かも斯くの如き一身上の利害を全く顧みずとするも、局長の志は校長若しくは行政官の方面にあらざるが故に、嘗に高等商業學校長とならざるのみならず。次官の地位を以て彼に薦むるも、彼必ずや容易に之を應ぜざるべし』と。吾輩當時贊否の言を聞かざりしと雖も、此言が大體に於て、眞野の人物を穿てることは、今に於ても信じて疑はざるなり。夫れ然り眞野は學者なり、行政官にあらざるなり。少くも行政方面に大なる野心を有する人にあらざるなり。是を以て彼を他の二局長と對比して、行政官としての鼎の輕重を問ふは、嘗に彼に對して氣の毒なるのみならず、條理に於て甚だ其當を得ざるを認めずんばならず。然れども彼は決して行政官として無能の人物たるにはあらず。爲すこと凡て彼の常識より割り出したるものに外ならずと雖も、其成績は

決して良好ならざるにはあらず。是れ頗る奇異のことに似たりと雖も、然かも彼の人物を知れる者に於ては、之を以て少しも不思議の如く思はざるなり。

眞野は學者たる丈けありて、其人格は何處となく高雅の趣きあり。性格圓滿にして謙讓の徳に富み、溫良醇粹にして士君子の面影あり。其風丰の溫容なる、以て親しむべく、又敬すべし。惡口に長ぜる新聞記者と雖も、彼に對して惡罵を試みんとするもの恐くはなし。彼の施設に對して反對の意見を有するものと雖も、一度び彼に面接して語を交へば、何時の間にか心和らぎて當初の攻撃心を失ふ。是れ彼の人物の溫良高潔にして、人を徳化する力あるによらずんばあらず。

眞野は腕を以て仕事をなす人にあらず。徳望を以て之をなすなり。政治家的手腕を用ひて如才なく立働く點に於ては福原に及ばず。されど、徳を以て人を服し、反對すべきものをして恣に追及せしめざる人格の力に於ては、眞野は確かに福原松村の上にあり、是れ彼が行政的専門の知識を有せざるにも拘はらず、兎も角も實業學務局長として、相當の成績を收め得る所以なり。

行政官としての眞野は、今日を以て其頂上に達したるものといふべく、之を論評す

るに、立論の基礎を現在の事實にとるも、恐らくは過ること多からざらん。然れども福原と松村は眞野に比すれば、年齢未だ若く、其性格と手腕は尙未知數なり。従つて今日を標準として彼等の人物全體を論ずること、頗る其當を得ざるなり。殊に松村に於て其感深きを思はずんばあらず。福原は稍々早成の傾きあり。松村は晩成の人なり。若し『大器晩成』なる熟語を眞理とせば、松村の未來は必ずや矚目に値ひすべきものあらん。我輩必ずしも彼の未來を豫斷せず。然れども彼が尙ほ大に發達すべき素質あることを信じて疑はざるなり。

(二) 適材適處の標本

文部省高等官中最も古きものを書記官兼參事官渡邊董之介となす。彼は岐阜縣の人、明治二十二年哲學科出身の文學士にして、大西祝、大瀬甚太郎等と同期の出身なり。岡田良平に後るゝこと二年、澤柳政太郎に後るゝこと一年にして、他の書記官參事官等に比すれば、五六年乃至約十年の先輩なり。彼は必ずしも手腕ある行政官にはあらず。されど堅實にして誠心誠意の事務官なり。殊に勉勵精勤の徳を有する點に於ては、文部省高等官中の第一位者なり。果斷壯快、快刀亂麻を斷つが如き手腕

は、彼に於て遂に之を求むべからず。されど、温良寡言、誠實に己の任務を盡して、是れ過らざらんと努むる點に於ては、他の何人にも超越す。彼を一口に評せば、彼は眞個忠良なる事務官なりとの一語を以て悉くすることを得。又必要の材といふべし。

參事官中の上席にして、一種の才氣を帶べる利き者を田所美治となす。彼は土佐の人、二十八年英法律科を卒業せる法學士にして、外務省の萩原通商局長、神山群馬縣知事、法學博士小野塚喜平次、同高野岩三郎等と同期の出身なり。松村普通學務局長に後るゝこと一年、美濃部法學博士、水野紐育總領事等に先つこと二年なり。彼は人物として必ずしも宏濶なるにあらざると雖も、理解敏き點に於て福原に劣らず。技倆ある點に於て亦松村に劣らず。而して才氣に富み如才なき點に於ては、省中第一等なり。

田所は松村と一年違ひに大學を出で、より以來、互に相雁行して今日に至れるもの、表面に於ては、兩者互に親睦なるが如しと雖も、其裏面に於ては多少の暗闘なきを保せざるなり。松村が長野縣參事官より文部省に轉じ來れるは三十二年にして、田所が東京府より文部省に轉じ來れるも亦三十二年、松村に後るゝ事約二ヶ月にてあ

りき。是を以て當時の席次は松村上にありて田所は其下なりき。然れども三十四年第一次桂内閣の時、菊池大麓入つて文相となるや、田所は文相の信任を得て秘書官となり、其寵遇によりて一躍松村の上に出づ。松村衷心聊か不平なれども、當時之を如何ともすること能はず、暫く陰忍して時の至るを待つ。然かも田所は其後久しからずして海外に遊び歐米教育制度の調査に従ふ。松村則ち此留守中にありて官を進め、以て再び田所の上に出づ。斯くする中に内閣更りて、文部の首腦に變動を生じ、次いで白仁武が普通學務局長より關東都督府民政長官に榮轉するや、其後任局長として、松村、田所の二人其候補に擬せらる。嘗に外部に於て斯く物色せられたるのみならず、兩者各自に於ても、亦陰かに多少の運動を試みたる所、桂冠の何れに落つべきやは、當時容易に判斷し得られざりし所なり。然れども田所は遂に敗れて、局長の地位は松村に獲られたり。或ものは之が理由を説明して、『田所は松村よりも一二ヶ月後れて文部省に入りしのみならず、大學に於ても一年の後れあるが故に、當然の順序として斯くなれる也』といふ。されど我輩を以て之を見れば、この評必ずしも眞を穿たざるに似たり。蓋し學校の卒業期に僅々一年の差あることや、文部入省の一

二ヶ月の遅速あることは、局長に拔擢する上に就て、左迄關係を有すべき道理のものにあらざるが故なり。敵は本能寺にあり。田所敗北の主たる理由は他面にあり。松村如何に武骨の如く見ゆと雖も、彼れ固とより愚者にあらず。己の地位を進むることに就て、有力の後援者あることを看過すべきにあらざるなり。有力の後援者とは何人ぞや、樺山資紀即ち是れなり。蓋し樺山は牧野伸顯と同郷にして且つ其先輩なり。樺山は牧野が大久保の遺子なる故を以て之を愛し、牧野は樺山が同郷の先輩なる故を以て之を敬す。而して松村は長崎縣參事官たりし時、樺山に其名を知られ、樺山が文相たりし時分に於て殊の外其知遇を受く。是れ恐くは、松村が蠻骨稜々として、宛かも薩人の如き性格を帯び、樺山の趣味に相合するものありしがためならずんばあらず。而かも松村が田所と局長の競争を開始したるときは、幸ひにも牧野が文相の位にあるの時なり。松村にとりては、此一事誠に天運ともいふべく、彼は何の猶豫も措かず、直ちに樺山の膝下に趨りて其推薦を乞へり。樺山即ち之を諒として、牧野に其意を傳ふ。牧野、樺山の薦めを用ひて、遂に松村を會計課長より抜きて局長となす。是れ即ち田所の敗れたる所以にして、彼が人物、技術が松村に劣れるが爲め

にもあらず。又田所が後進なりしが爲めにもあざるなり。

田所は其後援者としては、菊池大麓を控ゆと雖も、菊池が牧野に對する關係は、樺山が牧野に對する如く有力のものにあらざること、何人と雖も之を推察するに難しとせざるべし。加ふるに田所の性格と遣り方とは、『凡て是れ才』の一語を以て説明し得べきやの如く見ゆるが故に、彼の人物を深く知らざるものは、彼が『何事にも役に立つ人物なり』といふことを思ふよりも、寧ろ之に先立つて『彼は輕薄の人物にあらずや』との杞憂を起すことなきを保せず。従つて牧野の地位としては、松村を局長となす方先つ安全なりと思惟したるやも知れざるなり。

斯くの如き事情を以て、牧野は松村を局長となせり。然れども田所に對して、衷心陰かに氣の毒の感を催うせり。是を以て牧野は間もなく、田所の官等を進めて勅任參事官となし、萬事同省の樞機に參與せしむることゝなせり。田所、局長たるを得ざりしと雖も、又聊か自ら慰むるに足る。

田所を勅任參事官となさば、彼よりも遙かに先輩たる渡邊董之介を其儘に置くことを得ず。茲に於てか書記官の渡邊に參事官を兼任せしめて、之を勅任二等となし、

以て田所との權衡を得せしむ。渡邊にとりては勿怪の仕合せたらずんばならず。渡邊は岡田次官に續いての先輩なれども、彼は現在の地位に甘んじて敢て昇進を焦せらず。現在以上の立身を望まず。従つて昇級に關して、煩悶懊惱する人にあらざるなり。彼の後進たる福原が局長となりし時に於ても、彼は何等不快の念をも起さざりき。福原よりも尙ほ後進たる松村が局長たりし時に於ても、彼は依然として何等の煩悶をもなさざりき。而して松村よりも後進なる田所が專任の勅任參事官となりて、彼の上位に進みたる時に於ても、彼は尙ほ平然として職務をとり、些の不快を感ずるが如き態度を現はさざりき。彼は嘗に之を以て不快不平の種となさざるのみならず、此等後進の昇級を見る毎に、却つて之を喜び、衷心より之に祝意を表するもの、如き態度を以て、之を迎へたりき。彼は脱俗せる事務官なり。榮達を願はず、名利を求めず。屹々諄々として、唯己の任務を盡すを以て自ら足れりとなす。彼は眞個悟了せる人物なりといふべきか。

渡邊は誘惑多き圖書課長の職にあること數年然かも未だ嘗て一度も醜聞を流したることあらざるなり。彼は資性謹嚴にして、誠實無二、假令幾萬の苞苴を贈るも、之

が爲めに心を動かさるゝ人にあらざるなり。彼は之を取らざるにあらずして、取り得ざるなり。再度ならず教科書問題は世の物議を醸したりと雖も、未だ一度も渡邊が筆禍に罹れる事實を知らず。亦以て彼の人物の堅實なるを推知するの資となすに足らんか。

金錢の事に關して、往々無辜の筆禍に罹るものを福原局長となす。福原が屢々斯の如き嫌疑を受くるは、彼が家に多少の財を貯へ、且つ一種の政治家手腕を有するが爲めならずんばならず。然れども彼の從來を知り、彼の現在、未來を考ふるに於ては、彼れ決して世評の如き惡事をなすべき人にあらざるなり。彼が家に多少の蓄財をなせることは事實なり。是を以て、我輩の如きも一時彼を疑ひたる一人なりき。然れども、其後大に事實を精査するに従つて、彼は全く純潔の人たることを發見し得て、今や自ら一時彼を疑ひしことの不明なりしを悔恨せずんばあらざるなり。彼は性來勤儉の人にして貯蓄心に富み、質素を旨とし、能ふ限りの節約をなす。彼は自用車を置かずして電車に乗り、煙草の如きは敷島を用ひずして大和を喫へり。加ふるに、彼は文部省専門學務局長たるの外、岡田良平の跡を襲いで、宮内省御用掛を兼任し、年

千八百圓の手當を受く。蓄財の餘地あるは當然のことにして、之が爲めに彼の節操を疑ふべきにあらざるなり。

由來文部省官吏は小膽にして、且つ餘りに愚直なり。故に彼等は嘗に自ら賄賂を取り得ざるのみならず、他に贈賄することもなし得ざるなり。世の所謂買収なるものは、文部省官吏の到底なし得ざる所にして、政治的辣腕を有するものは、文部省開關以來一人もこれなしといふも過言にあらざる。是れ同省歴代の高官が多くは教育界より出で、若しくは終始教育界に接觸し居れる人々なるが故に、不知不識の中に消極的、退嬰的氣風に馴致せられて、活政界の消息を解せざるが爲めならずんばならず。福原獨り此間にありて稍々出色を帯び、多少の政治家的素質を有せざるにあらざると雖も、彼も尙ほ教育圈内の人たるに違はず。彼れ何ぞ賄賂の贈收をなし得る膽略あらんや。

(三) 好一對の新進

白面紅顔にして、一見青二才の如き風丰を具ふるも、其實決して若輩ならず、其頭腦は成熟し、手腕亦悔るべからざる新進有爲の一人材あり。彼の容貌は優雅にして、風

采何所となく貴公子然たる所あり。然れども、彼は決して世の所謂貴公子の如く迂濶者にあらず。社會の實際に通じ、變通の才を有し、人物の規模亦小ならずして、轉た其將來を想望するに堪へざらしむる新人材なり。彼は明治三十年英法律科を卒業したる法學士にして、法學博士寛克彦、同加藤正治、前農商務省山林局長にして現法制局參事官たる中川友次郎、内務省書記官江木翼、法學博士美濃部達吉、水野紘育總領事等と同期の出身なり。大學時代の成績は常に優等にして、卒業後先づ内務省に入り、次いで文部省に來り、又海外をも巡察して、今や奏任一等年俸貳千五百圓の高給を受く。彼は、田所若し局長に昇進することあらば、必ずや其後任者たるべしと豫期せられたつゝある人物なり。彼とは誰ぞや。秘書官兼參事官たる赤司鷹一郎即ち是れなり。赤司は頭腦明晰にして理解に敏く、性質利巧にして融通能く利けり。應酬に如才なき點に於ては田所に似、比較的役人氣質を有せずして、稍々官吏型の外に逸せる傾きある點に於ては福原に似たり。

然れども金遣ひ荒くして蓄貯の念を有せざるに於て、全く福原に反す。是れ彼が家に資産を有するが故に、彼れ自ら子孫の計をなすべき必要を認めざるにもよるべ

けれど、亦もつて彼が尙ほ大に春秋に富み、且つ比較的金錢に淡泊なる天性を有するが爲めならずばならず。彼は折花攀柳の粹を解する點に於て、全く田所に反す。田所は才子肌にして、一見花柳界にも出入する人の如く見ゆべしと雖も、其實彼は決して之をなさざるなり。さればとて彼は福原の如く貯蓄をなせるにもあらず、収入の全部は幾んど舉げて之を日常の生活費に充當す。かるが故に家庭に於ける彼の生活程度は、寧ろ贅澤に傾ける嫌ありとするも、決してけちのものにあらざるなり。教員の口吻を以て之を評せば、彼は品行方正にして、私生活の全部を其家庭に於て營める人物なり。赤司は稍々之に反す。彼の令閨は評判の美人なりと雖も、彼は決して後生大事に之を守る者にあらず。おつきわひとあらば何時にても、亦何人とも之をなすを辭する者に非ざるなり。是れ蓋し彼が金に困らざるにも因るべけれど、亦一には彼が美貌にして、到る所やんやと持て囃さるゝが爲めならずばあざる也。彼れ既に粹界の趣味を解す。彼の服裝所持品が通人の所謂『濫いもの』其多きを占むるは、蓋し之が爲めに外ならず。彼は凡てに於て無類のハイカラなれども、其のハイカラたるや、極めて濫きハイカラにして、歐化的、野暮的、氣障的なるハイカラにあ

らざるなり。彼れ金を有す。然れども其自用车は護謨輪にあらずして鐵輪なり。彼は齒質悪しくして二三の入齒を有す。然れども、金齒にあらずして上等の磁器製なり。彼は時計を持てり。されど、金側にあらずして、こつた銀側時計なり。我輩今夏の某日、彼と料亭に晚餐を共にしたることあり。其の時の彼の扮装を見るに、白地の單衣に濫色の縮緬兵兒帶をしめたるのみにして、羽織を着せず。榎木の上等薩摩下駄を穿きて足袋を着けず。宛然として是れ粹界黒人の姿なり。然かも顧みて我輩の扮装を見るに、絹羽織を着し、表着きの下駄を穿ち、更に白足袋を着く。極粹と極野暮、好箇の奇對照たらずんばあらず。

赤司は斯くの如く粹界の通人なり。然れども、彼は決して之に溺るゝものにあらず。彼が宴會に出で、長座鯨飲することを見るも、未だ嘗て一度も彼の亂醉態を見たることなき一事は、亦以て彼が他の粹事に對しても耽溺する人にあらざることを説明するものといはざるべからず。彼は嘗に之に耽溺せざるのみならず、却つて之を利用して人事の何ものたるを解し、牽いて己の性格手腕を鍛鍊するの材となすものゝ如し。彼が變通の材に富み、一步を逸して敢て事務官型の中に簞らざるは、恐

くは彼が粹界より得られる經驗に起因するものあるに違はざらん。

文部省高等官中他の何人にも類似せず、幾んど其人物の輪廓を捕捉するに苦しましむる一人物あり。之を會計課長松浦鎮次郎となす。彼は學者肌にして理解に敏く、頭腦明晰にして數理的能力を有することは、我輩堅く信じて疑はざる所なりと雖も、其總體について人物を品評するは、彼に於て最も困難なるを感ぜざればならず。彼は三十一年の政治科卒業の法學士にして、農商務省參事官岡實と同期なり。高等學校時代には赤司と同級なりしも、病氣のため大學は一年後れて卒業せり。然れども、其卒業の席次は第二席にして岡實の上により。其頭腦の明晰なることは、此一事に見るも明かなりといふべし。我輩未だ彼に對して長き交識を有せず。従つて今に於て彼の人物を論斷すること能はざるなり。斷片零碎の逸事粹聞は二三聞知する所なきにわらずと雖も、未だ以て公正なる人物評の材となすに足らず。後日改めて論評を試みることにせん。

(四) 彼等の長處と短處

人には一長一短あり。文部の高等官何ぞこの理を免るゝことを得べけんや。彼

等各缺點長處を併せ有して、夫々の未來を有せり。眞野は古參にして德望を有し、圓滿の常識を具へて、雍々典雅の人格を有すれども、行政上に對する特殊の造詣を缺けり。福原は一種の政治家的手腕を有し、事務官としては稍々惜しむと思はるゝ程規模の大なる所あれども、私人としての性格に、美はしく且つ敬はしき所少し。松村は蠻骨にして如何なる難關も敢て辭せざる膽略を有すれども、未だ壯年の奇拔癖を脱せず。時として是が非でも私見を押し通さんとする缺點あり。深く熟考し精細に計畫して遺算なき事の判明せる成案を斷行する役者としては、松村最も適任にして、文部省中第一等の逸品なりと雖も、解らざることをも解れる如く装ひて、遮二無二決行し、往々常規を逸する恐れなしといふことを得ざる短所あり。田所は理解力に富み、應酬に如才なくして何事にも缺くべからざる迄文部有用の逸材なれども、餘りに機才に長ぜる嫌ありて重厚の德質を缺けり。渡邊は溫良醇乎、誠實精勤なれども、縦横の機略と一種の氣魄とを缺けり。赤司は變通流轉の機才に長じ、人物も亦小ならずと雖も、餘りに能く自己を知りて且つ之を屈し得る性能に富めり。自己を知り、其缺點と短處とを自覺して、己を以て己を支配し得る人は、個人としては、誠に立派な

ること言を俟たずと雖も、公人として世に立ち、將來複雑なる政治圈内に入らんとする者に取りては、一種の缺點たらずんばあらず。換言すれば、自己の長處を識認することは可なれども、自己の短處を餘りによく識認するは決して成功する所以に非るなり。何となれば、自己の短處を識認することは、慥て己をして怯懦ならしむる所以にして、盲目的一種の獸性を阻却し、人の奮闘力を削減すること少なからざればなり。然れども、現時の文部省は、大體に於て、適材を適處に置きたるものに近きが如し。渡邊は田所に比すれば、其技倆に於て稍々劣れる所あるが如しと雖も、然かも圖書課は此人ならでは、治まり難きに似たり。若し田所をして渡邊の地位に居らしめんか、必ずや今日の如く圓滿ならずして、忽ち幾多の動搖物議を醸すに至らん。何となれば、圖書課には多くの編修官、圖書審査官等の變物ありて、一筋繩を以て統御し難き理屈家簇集し居れるが故に、田所の如き性格の人をして、之を統御せしむる事頗る困難なればなり。況んや赤司、松浦を持ち行くに於てをや。而して渡邊を以て若し田所の地位に置かんか、是れ亦決して適配材にあらず。渡邊は上席參事官として、田所の擧げ得る丈けの成績を收め得ざるや明かにして、到底其器にあらざるなり。渡邊は

圖書課を統御し行く所に彼の貫目を示し、又彼の本領の存する所を知るに足る。田所は勅任參事官として、凡ての樞機に參與畫策する所に於て他の何人にも超越せり。福原は現内閣成立當時既に次官に擬せられたることあるが故に、將來次官の交迭することあらば、彼は必ず昇進して副大臣とならん。其時に至りて田所が福原の後任者として、局長の地位に昇るべきことは、一點の疑ひを容れざる所なりと雖も、現在に於ては、田所は勅任參事官の地位を以て最も適所なりとせざるべからず。赤司の秘書課長、松浦の會計課長も現在に於ては、夫れ々々、箴まり役とせざるべからず。然れども此兩者は他所に役立たざるが故に、現地位を適まり役と云ふにはあらず、他に此兩者に代るべき適材の未だ存せざるが故に、反面より推理して斯く判ぜるに外ならざるなり。(四十二年十月)

七、文部省の中樞人物 (下)

(一) 福原鏡二郎

我輩福原を評論すること既に兩三度。聊か彼の人物を紹介したると共に、内閣更

迭せば彼れ必らず次官の地位に昇るべきを豫言せり。幸にして我輩の豫言は的中し、彼れ今や座して次官の椅子にあり。我輩復た一言せざらんと欲するも能はざるなり。

福原は二十五年の法學士。同期出身者中の出世大將なりといふと雖も我輩を以て見れば、彼れに取つて決して早き出世といふべきにはあらず。彼は第二次の桂内閣成立當時に於て、當さに次官たるべくして終にならず、今次の政友會内閣に至つて漸く其志を遂ぐ。早きにあらずして寧ろ遅きなり。彼の衷心に於ては、恐らく榮譽を感ずる度も、較々薄すからん。

第二次桂内閣の時に彼が次官たるを得ざりしは、當時彼の人物に不足ありしが爲にあらずして、文相小松原が岡田良平以外の者を次官とするを好まざりしが爲に外ならず。

凡そ、門下に故吏多しとは、常に支那に於ける大臣が勢力を有する所以のみにはあらず。現代の日本に於ても、亦棄て難き格言の一たるを失はず。如何に有識有能の大臣と雖も、大臣一人にて何事をも爲し得るものにあらず。如何に内閣に勢力を有

し、身親しく行政の經驗を有すとすも、省内屬僚の心を得ずしては、手も足も出すこと能はざるなり。

小松原は政治家として相當の手腕を有し、内閣に於ては實働者の一人なりしと雖も、教育行政に關しては、全く無經驗なるが故に、省内屬僚の心を得ると否とは、文部大臣としての彼に取りて、頗る重大の關係を有す。若し彼にして久保田讓の如く省内に孤立せんか、其慘澹たる有様は、寧ろ久保田の上に出で、内外の嘲笑を一身に背負ひて無類の無能大臣に化しせん。小松原能く此間の消息を知る。故に彼が入閣の勸誘を受くるや、先づ第一に念頭に浮べたる一事は、『何人を以て次官とするや』にありしを疑はず。而して彼は京大總長に岡田良平あるを見たり。これ彼が易々として文相を承諾したる所以ならん。

若し當時一人の岡田なかりしと假定せよ、小松原は必らず多少の不安を感じたるに相違なく、假りに入閣を躊躇せざる迄も、十分の安心を得ざりしに相違なし。

岡田は政治的系統に於て、小松原と同一なるのみならず、個人的關係に於ても頗る親善なり。其思想、人格に於ても、行爲の型に於ても、亦酷似の體相を有す。若し人あ

り、平田、小松原に向ひて、『足下等の最も信認せる後進は何なりや』と問はゞ、彼等必らず『岡田、一木なり』と答ふべく、岡田一木に向ひて、『足下等の最も倚頼する先輩は何人なりや』と問はゞ、必らず『平田、小松原なり』と答ふべし。蓋し彼等は思想の根柢に於て共通の楔點を有するが爲なり。

單に技倆、才幹、經歷のみを標準として抽象的に次官を物色せば、岡田以外、他に數人の適任者あり。然れども、小松原の女房役としての次官を求めば、岡田が天下の第一者にして、他に匹儔するもの一人もあらじ。何となれば次官は政務官なるが故に、根本に於て大臣と政見を一にすることを要するのみならず、互に信ずることの厚き、殆んど異體同心の人たるを要するが故なり。次官若し大臣と所見を異にせば、事毎に大臣を牽制し、牽制せざる迄も進んで助くるの積極的態度を缺く。故に大臣は手も足も出す能はずして苦き經驗を嘗む。久保田對岡田の歴史は之を證して餘りあり。而して若し次官、大臣と親密ならず、情意投合の妙諦を缺かば、些細の出來事の爲に反感を惹起し、又は或種の動機に因りて反旗を翻へし、獅子身中の蟲となりて大臣を過らしめんと陰謀す。第一次西園寺内閣に於ける松田對水町の如きは其例證なり。

大臣自ら其部の行政に通曉し、併せて時流を卓越する識見、手腕を有せば、次官の陰謀必らずしも恐るゝに足らずと雖も、其他の場合に於ては次官の反旗は直ちに大臣の死活を制するに足る。

小松原は教育行政の通曉者にあらざるが故に、次官の陰謀又は牽制の恐るべきは固より言を俟たず。而して此危険を免るゝの道は、岡田を次官とするを以て最上となす。

第二次桂内閣の成立するや、岡田直ちに京都より東京に來る。新聞紙傳へて曰く、『京大の低氣壓仲々強し、岡田則ち大事に至らざる前に逃げ出さんとして文部次官の運動に來れるなり』と。我輩之を妄として否認の記事を發表せり。當時我輩岡田に對して一面識なく、未だ彼の人物をよく知らざりと雖も、事物の道理より考へて當さに斯の如く觀測するの至當なるを認めたるが爲なり。

蓋し、岡田は當時既に次官の經歷を有するが故に、再び次官となるとも、彼の貫目を増すにはあらず。彼の個人の利益を基準として言はゞ、寧ろ京大に留まるを以て最上策となす。京大に低氣壓ありしといふと雖も、逃げ出さるべからざる程強力の上策となす。

者にはあらず。ドツシリ腰を落ち着けて、飽く迄行る氣を見すれば、低氣壓は必らず鎮定したるに相違なし。而して若し幸に行り通す事を得たりとせば、彼に取りては非常なる手柄にして貫目を増すこと數等なり。故に獵官運動して迄も、次官に轉ずる必要なきは勿論、假令勸誘を受けたりとするも、屑く之を拒絶して京大に踏み留まりたるを得策となす。然るに實際の事實は全く反對に出で、易々として次官に轉じたる所以のものは、一に小松原の懇請ありしに因る。内閣成立後直ちに岡田の上京したるは、恐らく小松原の電召ありしに因るならん。岡田自身の獵官の爲めに解するは、頗る素人觀測の感あるを免れず。

若し新大臣が小松原にあらずして、岡部なりしと假定せよ、岡田は必らず辭退したるに違ひなし。桂若くは平田、小松原の口添へあらば知らぬこと、單に岡部のみの懇請ならば、岡田は屹度辭退して、福原を推薦し、『福原を御使ひ下さらば予自ら幕下に參ずるも同一なり』と答へたるに相違なし。福原は岡田が第一高等學校教授時代の生徒にして、山座圓次郎、水野鍊太郎と相對する當年の秀才なり。其後文部省に入りてよりも、絶えず岡田の庇護を受け、岡田が宮内省御用掛より京大總長に轉ずる際

には、特に其後任者に推薦せられたる程の緣故を有す。加ふるに福原の人物、手腕、經歷は、當時既に次官として何等の差支あるにわらざりしが故に、後進を引立つる意味よりいふも、福原を薦めて新次官となすことは、岡田の私かに本懐としたる所なり。

然るに彼れ此本懐を遂ぐるに能はず、否な推薦辭の一語をも發すること能はずして自ら再起したるは、一に新文相が小松原なりしに原因す。蓋し岡田は小松原の爲には自己の都合を顧みるの違なく、最上を盡くして小松原を助けざるべからざる關係を有するが爲なり。福原如何に英材なりとするも小松原に取りては未知の間柄なり。未知の人を擧げて次官とすることは、小松原の不安とする所なるのみならず、實際に於ても、岡田自ら當る方が遙かに安全なり。これ岡田が野暮をいはずして再起したる所以にして、同時に福原が次官たるを得ざりし所以なり。

福原が今次の内閣に次官となりしは、恐らく侯西園寺の推薦に基づかん。蓋し西園寺は福原を信認すること頗る厚く、曾て『彼は未來の利器なり』と迄推賞したることありしが故なり。長谷場は從來福原を知らざるべく、福原も亦長谷場を知ること深からざりしに違はざらん。少くとも、長谷場自身の發意により、直接福原に交渉し

て次官に拔擢する程、相知の間柄には斷じてあらず。福原が未來の大器なりや否やは我輩の保證し得るにあらずと雖も、兎も角、彼が何處かに穎脱する所のものを有するは事實とす。

彼と同期に大學を出でし者約七十名。殆んど悉く今顯要の地位にあり。山座、水野の兩者を外にするも、法博の高根義人あり。平岡定太郎、祝辰己、熊谷喜一郎等の長官連あり。勅任校長の正木直彦あり。然れども一人の若槻禮次郎を除けば、未だ次官若しくは其同等官以上に昇りたるもの多からず。福原獨り、此中にありて、躍然次官に進み、副大臣として、オサ／＼省の内外に勢力を振ふ。先輩の庇護同情あり、機運の助くるものありしに因るは勿論なるべしと雖も、然かも彼の天品の優秀にして、何處かに穎脱するものあるを證示するものに外ならず。

彼の優秀天賦として指摘すべきもの三あり。一は頭腦の明晰にして、二は人物輪廓の大なる事、而して三は圓轉滑脱、融通の才に富むことは是れなり。然れども頭腦の明晰に於ては、彼れ恐らくは水野鍊太郎の上に出でざらん。是れ必らずしも大學卒業當時の席順に於て、水野の方が上なりしが爲にいふにはあらず。又必らずしも水

野が今日法學博士の學位を有するが爲にいふにはあらず。我輩は唯だ種々の事情より綜合し、學者的天分に於ては水野の方が上なりと信ずるが故に、斯くいふに過ぎずとす。

人物輪廓の大に於ては、水野の上にあらん。然れども山座に比すれば必らずしも大ならず。山座は、所謂『文明思想を有する陶淵明』の敷稱ある人物にして、東洋式豪傑の色彩あり。度胸据わりて泰然たるあたり、世の通常才子に及ぶ所にあらざるなり。

若し夫れ、圓轉滑脱、融通の才に於ては、福原は卓然として儕輩を抜き、山座、水野の如きをして五歩も十歩も後ろに墮若たらしむるものあるを認めずんばあらず。これ福原をして、早く今日の地位に昇らしめたる主要原因の、一に外ならざらん。

福原は頭腦明晰なる上に、通常人以上の才氣を有すと雖も、常に讀書を怠らざる美德をも有す。斯は彼の野心が大にして、絶えず其野心に勵まざる、爲めならんとは想へども、才人にして讀書に努むるとは、一大難事にして、又一大美事なるが故に、其因原の如何に拘らず、彼の人物を推賞する有力の資材とせずんばあらず。

我輩の英國にある時、女子高等師範の小林照郎、教育學及社會學研究の爲、文部省留學生として倫敦に來る。序次、彼れ我輩に語りて、福原の人物を賞揚し、『君の人物評に依て略ぼ見當は附け居たれど、未だ眞價を知るには至らざりしが、今次留學するに及びて、初めて彼に對談し、事理を解するの敏活なるに驚きしと共に、徹頭徹尾君の人物評に偽なきを確認したり』といへり。蓋し彼の辭令交附に關して、學科の指定上、俗議紛々たるものありしを、福原が立談數刻にして、適法便宜に解決したるが爲ならん。

我輩は此の言辭に多大の信用を置かんとするものにはあらざれども、福原は當さに斯の如くあるべき人物なり。然れども、彼の事理に明るきを以て、直ちに彼が萬般の事物に一廉の識見を有する者と想ふは大なる誤也。彼は讀書に努むと雖も、文章を解せず、文章によりて人物を鑑識するが如きは、殊んど彼の不可能とする所なり。少くとも、此點に於て、彼は澤柳政太郎に及ばざること遙かに遠し。

文章は或意味に於ては、單純なる技巧とも見られ、又或意味に於ては、趣味の表象に過ぎずとも見らるゝものなりと雖も、其實は今少し深遠の意義を含むものにして、本

然の性質は寧ろ『人の識見の表象』に外ならずとす。古今東西の大人物が、一篇の文章によつて、遺賢を拔擢せること多きは之が爲にして、西洋の政治家が著書論文を有せずして、破格の昇進をなし能はざるも之が爲なり。

之を我國の明治年代に見るも、學識に富み、識見豊かなる先進が、文章によりて人物を鑑識したる例は乏しからずとす。故伊藤博文、西園寺公望の如きは其例なり。殊に伊藤を以て最となす。

伊藤、山縣、井上は長州の三尊と稱せられ、威望勢力一時一代に冠絶す。其原因主として三者の器局の偉大に歸するを疑はずと雖も、亦一には後進の尤物を鑑識して之を配下に羅致したるに因る。然れども其尤物を鑑識する方法に於ては、三者各々異り、各々獨特の妙趣を有す。

伊藤は主として文章に依りて鑑定す。故に才幹の人よりも、識見の人を取り、現實界の政治家よりも理想界の政治家を重んずる傾きありと雖も、兎も角、大體に於て有爲の人材を採用す。森有禮、井上毅、伊東巳代治、末松謙澄、金子堅太郎、竹添進一郎等の如きは其例なり。井上を儒生に抜き、伊東を通辯に抜き、末松を新聞記者に抜きたる

事等は、最も能く世人の熟知する所にして、伊藤の人物鑑定眼の非凡なるを示すものなり。彼は如何なる場合に於ても、人の閱歴を詮索せず、又人の履歷書を吟味せず、一篇の文章、一回の面語に依りて、直ちに人物の眞價を判定し、良材と信ぜば、即時に之を採用するも些の疑悞を抱かざるなり。

山縣の採用法は全く之に反す。彼は文章に依りて人を鑑別すること殆んどなし。ありやも知れずと雖も、世に聞えたる程のものは斷じて一もなし。彼の人材を鑑定するや、先づ下級の小役に使つて見て、而して後に之を爲す。こは必らずしも彼の不明の致す所にあらず。彼の天分謹慎にして、伊藤の如き所謂英雄的採用法を好まざるにも因るべしと雖も、亦一には伊藤程の鋭き鑑定眼を有せざるが爲なり。山縣は人の閱歴を詮索し、又其履歷書を吟味す。彼は良材なりと信じたる時と雖も、伊藤の如く破格の拔擢をなすこと斷じてなく、其人從來の閱歴に照して、一歩一歩昇進せしむ。否な或場合に於ては、閱歴以下の卑役に當らしむることすらなきにあらず。然れども斯は彼が後進を愛せざるが爲に然るにあらず。人一倍に愛するが爲に然るなり。彼は、閱歴を顧みざる異數の拔擢を以て最負の引き倒しに均しとなし、後進を

して大成せしむる所以にあらずとなす。彼は學識と經驗とが互に練磨融和して人の手腕を高め、天賦の才能と閱歴とが相伴つて人の貫目を増すとなし、貫目を度外視せる拔擢は、徒に世の輕侮を挑發し、本人をして位負けせしむる所以となす。これ彼が破格の拔擢をなさざる理由なり。後進亦よく彼の意を解す。少々役不足なりと思ふ時と雖も、山縣の命なりとあらば快く之に服従す。山縣は異數の拔擢をなさずと雖も、一度び幕下に羅致したる以上は、極力之を庇護し、何處迄も將來の大成を見んとする態度を有す。伊藤は此點に於て全然反對なり。彼は新人材と見れば、殆んど飛び附く様にして採用し、思ひ切つた拔擢をなすと雖も、忽ちにして之を忘れ、繼續的庇護を怠慢す。茲に於てか、新人材は更に轉じて山縣に行くか、又は孤立して落魄の政治家となる。伊藤の浮氣は常に婦女子に對する時のみにはあらざるなり。

井上の人物採用法は、伊藤、山縣に比すれば、また異れり。文章に依りて人物を鑑別せざることは山縣と同一なりと雖も、山縣の如く廣き範圍に於て人物を求めず、又山縣の如く多種多型の人物を求めず、唯だ自己に接近する狭小の範圍に於て才幹の人のみを採用す。自己に接近せざるものは、人材と雖も之を取らず、自己に接近する者

と雖も、才幹の人にあらざれば之を取らざる傾向を有す。

自己に接近する人にして才幹の人ならば、喜んで之を採用し、思ひ切つた拔擢をなす。中上川彦次郎を三十歳ばかりにして、局長に任じたるが如き其例なり。

才幹に偏するが故に、識見の人、統領の器は、彼の門下より出でず。従つて彼が拔擢せる人材は、其數決して少からず、實業界は暫く措き、政治界のみに就ていふも、未だ大臣となりたる者一人もあらず。若しありとせば、そは初め井上に拔擢せられ、次で山縣系又は伊藤系に轉じたる者にして、終り迄井上系にありたる人には非らん。都築馨六、藤田四郎、故齋藤修一郎等の如きは、次官又は局長としては有數の切れ者なりしと雖も、未だ臺閣に座したることあらず。都築の將來果して如何。

新聞記者にして井上の鑑識を蒙り、善く青雲に乗じて國務大臣たるを得たるもの、現内閣に原敬あり、前内閣に小松原あり。然れども此兩者は孰れも終り迄井上の幕下にありしにあらず。原は陸奥を経て伊藤に轉じ、小松原は間もなく山縣系の人となりしなり。而して此兩者が揃ひも揃つて才幹に長じ、實行の手腕に富むことは、最もよく井上の人物採用の標準を窺知せしむ。

山縣、井上が文章によりて人物を鑑識せざるは、伊藤程の學識を有せざるが爲なり。之を好まざるが爲なりといふは適切ならずとす。

筆は稍々岐路に入れりと雖も、要は文章の本質が識見の表象にあることを示さざるが爲に外ならず。

福原を以て、長州の三尊に比較評論するは、不倫の甚だしきものなりと雖も、事物の道理に違ひあるべき筈はなし。今日の福原を觀て、直ちに伊藤丈の識見なしと難ずるは、頓馬の骨頂なりと雖も、然かも小さければ小さき丈の相當識見を具へ、將來發達すべき資質の幼芽を具へずんばあらず。我輩は彼に文章を解する能力乏しきを見て、彼の識見に多少の疑なきを得ざるなり。

福原は乙竹岩造の保護者なりと風評せらる。事實の眞偽は、我輩保證し難しと雖も、種々の事情より綜合すれば、當さに斯の如くあるべしと想像せられざるにもあらずとす。福原と乙竹とは共に三重縣人にして同郷の關係あり。此關係に於ける先輩後輩の意義に於て、福原が乙竹を保護するものならば、我輩深く之を追究せず。然れども福原が若し乙竹を稀觀の學材なりと確信し、將來の發展に囑望して之を保護

するものならば、我輩は福原の識見の幼稚なるを嗤はずんばならず。

乙竹は才物なりと雖も、其才たるや真個の俗才にして天才の素質に乏しきこと甚だし。文章に於ても、演説に於ても、文人の感情更になく、詩人の想像を偲はしむること毫もなし。少くとも佐々木吉三郎に比すれば此點大に劣る。福原が特に彼を庇護するは、彼の著書、文章を真正に鑑識する能力を缺ぐが爲にはあらざるか。

尙ほ茲に舉示すべき他の例あり。そは雑誌『帝國教育』に關する一事とす。

『帝國教育』は、表面帝國教育會の機關なりと雖も、事實に於ては文部省の御用雜誌なること、世の既に知る所の如し。

然るに我輩を以て之を見れば、『帝國教育』の發達は、豫期に副はざること頗る多く、樋口勘治郎を懐柔することに於て、手際よく成功したる一事の外、他は悉く失敗に終れりといふを憚らざる状態にあり。

『帝國教育』の斯くも發達せざる理由は種々ありて存すと雖も、其最も主要なるものは則ち二なり。一は前内閣及現内閣の文部省當事者が文章を解せず、従つて御用記者を使用することを知らざる事にして、二は樋口が御用記者の使命を了解せざる

ことは是れなり。

前内閣の當事者に就ては、我輩暫く之をいはず。現内閣の當事者中にありても、長谷場に就ては又暫く之をいはずらん。蓋し長谷場は就任後日尙ほ淺きを以て教育社會の實情に通ぜざるのみならず、教育に關する特別知識を有せざるが故に、御用雜誌の善惡を判知し得る道理なきを以てなり。然らば論評の筆は自ら福原一人に向つて注がれざるを得ざるなり。

福原にして若し文章を解せば、『帝國教育』をして今日の儘にあらしむること斷じてあらじ。必らずや樋口を督勵し、實質を以て他雜誌を壓倒せしむる方針を取るに違ひなし。今日の『帝國教育』は、『教育時論』よりも、『教育界』よりも、『内外教育評論』よりも、實質に於て遙かに劣り、形式に於ても、發行期日の遅延を謂ふ亦劣る。こは我輩の私言にあらずして世の定評なり。

教育社會を指導すべき社説なく、時事問題に接觸したる論説なし。教授訓練に關する特殊の研究なきは、雜誌の性質上深く咎むべきことにあらずとするも、公開演説の筆記や、文部省が提供する乾燥無味の地方報告等を以て、誌面の大部分を塞ぐは無

責任の極みなり。強ひて特徴を求むれば、海外教育事情の紹介にありと雖も、これとても常に他雑誌を凌ぐとは思はれず。殊に社内同人が最上を盡くして活動し居れる形跡の極めて少きは、何よりの遺憾と謂ふべし。編輯者先づ油が乗つて而して後初めて讀者の心を惹き着くるなり。如何に材料を精選するも、如何に金玉の文字を掲載するも、編輯者先づ興味を感ぜずして、讀者の感興を戟激すること斷じておらじ。況んや材料の精選、金玉の文字、共に何れも不十分なるに於てをや。

『教育界』、『教育學術界』、『内外教育評論』、『教育時論』は共に同人の活動誌面に溢る。其結果に於ては、未だ満足し難きものありとするも、兎も角、編輯者自ら油が乗り、手と足を働かして讀者を満足せしめんとする熱心を隠見せしむ。従つて發行期日を一週間も十日も遅れしむるが如き無責任を演じたること未だ殆んどなし。發行期日の遅延は、事些細に似たりと雖も、定期刊行物に於ては、決して然らず。寧ろ重大事件なり。一には編輯者の讀者に對する德義として、二には讀者を殖やす手段として、共に缺ぐべからざる條件なり。試みに早朝配達すべき新聞紙を午後に至りて配達したりと假定せよ、讀者は必らず不平を起して他の新聞紙に轉移せん。雑誌は新聞

紙とは稍々趣きの異なるものありと雖も、然かも講讀する讀者の心持にありては大差なきを疑はず。

福原は此等の點に就て、如何なる見解を有するや。今の儘で十分なりと思惟するや。他の同種の教育雑誌に劣ることを知らざるや。文部省の御用、帝國教育會の機關といふ丈にて、雑誌が發展し、發行當初の目的を貫徹し得ると思惟するや。我輩未だ之を聞かずと雖も、彼れ恐らく何等の定見を有すまじ。否、此等のことを念頭に浮べたることだにあらざらん。蓋し文章を解する人にあらざるが故なり。

福原は文章を解せざるのみならず、又御用記者を使ふことをも知らざると見ゆ。こは彼に似合はしからざることなりと雖も、事實は全く之を證明す。

凡そ政府が御用新聞又は雑誌を必要とするは、猶ほ政黨政派が機關新聞又は雑誌を必要とするが如きものにして、毫も奇しむに足らず。當局者自ら陣頭に立つて世論と闘は、徒らに世人の反感を挑發して融和を缺き、又は言質を捕へられて飛んでもなき間違ひを惹起する惧れあるが故に、此弊害を避け、成るべく穩和なる方法を以て、非公式的に施政の方針を闡明し、問題起るに及んでは、最も大膽雄健に反對論を攻

撃せしめ、然かも當局者は少しも責任を負はずといふが如き、巧妙なる仕掛に出でんが爲に、御用の新聞雑誌を設くるものなりと謂ふべし。従つて御用記者は、何時にても大臣、次官及局長等を訪問する特権を有し、大臣、次官及局長等は、所謂『新聞訓令』を與へて、絶えず其論說記事を指導すべきものなりとす。

此點に於て最もよく成功したる政治家は、ビスマルクを以て第一となす。ビスマルクは十一個の機關新聞を有し、博士ブツシを擧げて其主裁となし、殆んど手足の如くに之を使用せり。

福原に向つてビスマルクと同一の事を望むは、固より無理なる注文たるを疑はずと雖も、然かも既に御用雑誌を設けたる以上は、少くとも其態度に於てなりとも、眞似事をなす丈の用意と意氣込なくして可ならんや。然るに實際に於ては事全く之に反し、樋口に對して『新聞訓令』を與へたる形跡なく、論說記事を指導したる痕跡なし。

樋口も亦惡るし。彼は御用記者の使命を知らずして漫然其職に就けるの譏を免れず。彼は御用記者といはるゝことを痛く氣に掛くるが如き風ありと雖も、そは彼

れ自身の考察の足らざる結果にして、寧ろ嗤ふべきことどもとなす。

『御用記者』なるものは、それ自體に於て、少しも惡しき意義を含有せず、公然標榜して差支なき職業なりとす。政府を辯護することが、不名譽ならざることは、猶ほ政府を攻撃することが不名譽ならざるが如し。若し政府を辯護する記者を稱して御用記者と謂はゞ、政黨を辯護する記者も御用記者なり。其他、富豪の御用記者あり、三井吳服店の御用記者あり、白牡丹の御用記者あり、書肆の御用記者あり、講義録發行所の御用記者あり、俗衆の御用記者あり。計へ來らば天下の記者は殆んど悉く何物かの御用記者なり。といふも過言にあらず。何ぞ獨り政府の御用記者のみを輕侮する理あらんや。

何んでもかんでも政府を攻撃し、『我は弱者の味方なり、權勢も犯すこと能はず、富貴も淫すること能はず』といふが如き言辭を弄するものは、『我は下層國民の御用記者なり』といふことを標榜したるに均しく、淫猥なる三面記事を掲載し、盛んに俗衆に媚びるものは、最も大なる俗衆の御用記者なりと謂ふを得べし。富豪所有の新聞社に籍を置く記者は、富豪の御用記者なり。三井や白牡丹や天賞堂と密接に關係し、

月々の定報酬を受けざる迄も、何等かの形に於てチップを受け、時々提灯持ちをするものありと假定せば、其等の人は商人の御用記者にはあらざるか。

書肆の機關雜誌に記者たるものは、書肆の御用記者なり。積極的に絶えず本尊を辯護する必要なき點に於て、政府の御用記者と著しく其趣きを異にすと雖も、然かも本尊の利益に反する記事を掲載し能はざる點に於ては、兩者全く同一にして、記者の獨立意見は斷じて絶對のものにあらざるなり。

理想上より云へば、記者自身の經營になれる獨立機關を有するに越したるはなし。然れども此事覺束なしとせば、何物かの御用記者になるより外に批評家の立つべき道はなし。又なつて少しも差支なきなり。

俗衆の御用記者や、素商人(三井、白牡丹といふが如き)の御用記者は等外として唾棄すべし。然れども其他の御用記者は皆な一樣に尊敬すべし。甲を重んじて乙を輕んずる理由斷じてあらず。我國に政府の御用記者を輕侮する風あるは、自由民權時代の餘弊あるが爲なり。自由民權の全盛時代に於ては、政府を攻撃することが、文壇の最高意義にして、之に反對するものは總べて貶せられたり。中心に於ては、御用記

者を輕侮せざるものにて、自己の主張を貫徹する一種の政略として御用記者を嘲笑し、福地源一郎に對して主義もなく、節操もなく、獨立の思想を有せずして、唯だ文を政府に賣りて生存するものなりといふが如き侮辱を加へたり。其實斯る攻撃をなすもの、中に、却つて御用記者以上の無節操漢ありしは歴史の明示する所なりと雖も、兎も角、一般の人は所謂民權論者の政略に中てられて、政府の御用記者を擯斥し、政府を攻撃する記者を以て獨り偉らしとする風を醸したり。其後時代の推移と共に、此風漸く廢りたりと雖も、日露戦争媾和問題の起るに及んで、猛然として復活し『御用記者』なる一語に輕侮の意義を含まして、徳富猪一郎に傾注し、茲に全く國民の記憶を一新せしめたり。蓋し當時の言論家は、政府を憎むと共に、政府を辯護する『國民新聞』を憎惡し、如何にもして之に苦痛を與へんことを欲したるが故に、大人氣なくも徳富に人身攻撃を加へたるものに外ならず。

福地にせよ、徳富にせよ、共に時の文壇の第一流にして、木葉記者等の及ぶ所にあらず。個人としての人物は我輩深く之を知らずと雖も、何れにしても言論家の水平線を下る人とも思はれず。少くとも御用記者なるが故に、人格低しといふ議論は、我輩

の斷じて與みせざる所なり。世に『眼糞が鼻糞を嗤ふ』といふ諺あり。己れの地位身分をも知らずして、徒らに他のそれを嗤ふもの、愚なるを冷殺したるなり。己れが或者の御用記者たることを棚に上げて、獨り政府の御用記者のみを嗤ふものは、當さに眼糞が鼻糞を嗤ふ類ひに外ならず。

樋口が御用記者と云はるゝことを厭がる氣味あるは、彼が此理と歴史とを知らざるが爲なり。彼にして若し御用記者の性質を知り、其歴史ブツシ、福地、朝比奈等の傳記又は活動記に通曉せば、何ぞ區々たる世評に動かんや。宜しく筆を逆にして反對の御用記者を嘲笑すべき所なり。又、宜しく『新聞訓令』に基いて、花々しく敵軍と奮闘すべき所なり。

彼れ再度帝國教育會の總會に於て、前一年間の雜誌事務を報告し、序を以て己れを辯護して曰く、『世或は本雜誌を以て文部省の機關なりと難ずるものありと雖も、教育の事は明黨閥異すべきにゐらず、官民相提携して其進歩發達を圖るべきなり』と。何ぞ夫れ窮するの甚だしきや。

教育の事、果して官民提携を要するならば、何故に彼は以前盛んに文部省を攻撃せ

しや。『報知新聞』及び『新教育』時代と『帝國教育』時代とは、全く論理を一變せしめざるべからざる程、天下の形勢が變換せしや。我輩未だ之を知らざるなり。

惟ふに御用記者は、御用記者自體として少しも惡しきにあらず。御用記者になるまでの経過及びなつた動機に議すべきものある時、始めて人物を上下すべき事由發生す。樋口が辯解がましき言辭を弄するは、自ら求めて議すべきものありしを表白するものに異ならず。野暮の骨頂にして、藪蛇なりと謂ふも過言にあらざるなり。

既に、福原文章を解せず、又、御用記者の使用法を知らず、而して樋口も亦御用記者の使命を知らずとせば、『帝國教育』の振ふべき道理なし。故に御用雜誌を設けたる趣意は少しも貫徹されず、寧ろ失敗に終れりと我輩は謂ふ。唯だ樋口を懐柔する一事に於て最もよく成功したるのみ。何となれば、彼は蛭に鹽かけたるが如くに萎縮して、當年の爪牙を現はさるゝが故なり。

筆は再び岐路に入れりと雖も、要は福原に文章を解する能力乏しきを證明し、併せて彼の學問識見に多少の疑を挿むべき餘地あるをいはんが爲めに外ならず。以下、愈々本論に筆を進めて、彼が人物の眞骨髓を解剖せん。

福原は文部省に來りてより以後絶えず二人の先輩を頭に戴きて修養せり。一は岡田良平にして、他は澤柳政太郎なり。福原が今日の地位勢力を得たるは、主として彼の天品の優秀に歸因するを疑はずと雖も、然かも亦彼が修養に懸念して、常に兩先輩の長處を攝取體得することに努めたる結果に外ならず。

岡田も澤柳も、共に新進有要の人材たるを失はずと雖も、各々一長一短あるを免れず。我輩を以て觀れば、少くとも二三の重要な差違點あり。請ふ先づ其政治家的出處進退より之を論ぜん。

凡そ政治家に二種の模型あり。第一は公衆と俱に語り、公衆と俱に喜憂し、常に門戸を開放して公衆に接近し、以て自己の存在を社會に知らしめんことを平常の用意となす者は是れなり。英國流の政治家は概して此系統に屬す。我國の大隈伯の如きは當さに此模型の政治家にして、伊藤博文公も亦稍々之に近かし。第二は全く反對の模型にして、敢て漫りに公衆と親しまず、必ずしも社會に自己を領解せしめんことを望まず、唯信ずる所を行ひ、其爲さんとする所を爲し、名聲よりも實效を重んじ、人の是非よりも事の結果を考へ、且つ言行謹慎にして、持重の念頗る強し。獨逸式の政

治家は概して此系統に屬す。我國の山縣有朋公の如きは、當さに此模型の政治家なり。

前者は社會の感情中に生活し、後者は少數者の信任に身を託し、前者は公衆を對象として客觀し、後者は自己及自己の職分を本位として主觀す。前者は共和國に在つても尙ほ政治家たるを失はずと雖も、後者は獨り君側輔弼の權官として立つにあらざれば、政治家たること難しとす。

今、岡田と澤柳とを觀るに、二者共に未だ政治家としての閱歷に乏しく、態度言行、二つながら截然たる輪廓に富まずと雖も、之を既往の進退と固有の性格とに徴して考ふれば、澤柳は前者の模型に屬し、岡田は後者の系統に屬すといふを妨げず。

試みに澤柳の公私生涯を見よ。其の繁忙にして華かなる、固より通常教育家の模型にあらず。彼は陽氣を好み、多事を好み、活動を好み、變化を好む。彼は長く懷抱を封鎖すること能はず、談論を廢すること能はず、社會と離隔すること能はず、沈鬱なる天地に俯仰すること能はざるなり。彼は山を樂む仁者たるよりも、寧ろ水を樂しむ智者たるを喜べるが如く、安心立命を求むる達人たるよりも、寧ろ奮闘を繼續する戰

士たるを選べるもの、如し。是を以て彼は好んで公私の會合に出席し、或は常に來客に接して、自己と公衆との連絡を謀るに意を用ゆ。殊に其名譽心頗る旺盛にして、社會の風潮を指導せんとする抱負あるにも拘らず、動もすれば社會の風潮に乗ずる巧妙なる舟子となりて、公衆の喝采を博せんとする行動ある一事は、最も能く彼が獨自一己の理想を保持する政治家にふらざることを證示して餘りあり。

彼れ曾て次官を罷めて野に下るや、侃々諤々の論調を用ゐて、文部省を攻撃し、終に時の文相小松原英太郎をして餘儀なく彼を勅選議員に推薦せしむ。我輩此間の消息を語りて、澤柳の人物を具體的に彷彿せしめん。

澤柳には學識あり閱歷あり。辯舌、文章あり。彼をして批評を恣にせしむることは、小松原の大に苦痛としたる所に相違なく、出来るものならば味方に引き入れ、出来る迄も、多少の手加減を加へしめんことは、小松原の私かに希望したる所に相違なし。殊に假名遣改訂問題の撤回は、多少澤柳の感情を害したる嫌ひありしが故に、何等かの方法によりて、彼に好意を表し、以心傳心の妙機を以て、自然の融和接近を計らんとする希望一層切なりしを疑はず。

澤柳も亦騒いで居りさへすれば、何事かを申込んで來るに違ひなしと豫期したることあらん。是を以て彼は教育雜誌に於て、一時盛んに批評文を公表し、宛然として文部省の一敵國を擬態しぬ。

有體にいへば、澤柳は少許の蓄財を有せず、當時既に生活に窮し、自用车夫を解雇するやら借金をするやら、駄作中には良いものもあれどを續出するやらにて、漸く其日の生活を維持し居たるものなるが故に、文部省の一敵國を以て擬態するよりも、早く文部省に接近して何等か収入の道を講じたる方、遙かに得策の如く見えざりしにあらず。然れども彼れ斷じて之をなさず、飽迄瘦せ我慢を張りて、徐ろに其機の到來を待てり。此處が澤柳の偉らき所にして、普通人と著しく異なる所なり。

澤柳は岡田と大學時代よりの友人なり。彼にして若し求むる所あらば、岡田に一言語れば足る。訴ふる必要なく、懇願する必要斷じてなし。唯だ『君、何かないかな——』位にて濟むべき所也。然れども澤柳敢て之を言はず、月々借金の殖ふるを白眼にかけて知らぬ顔の半兵衛を極め込めり。我輩を以て此間の消息を想像せしむれば、澤柳の心中自ら數個の理由あるに似たり。第一は自ら我を折つて岡田に談合

せば、其辭の如何に拘らず、哀願と同一の結果になる。従つて『澤柳もガミ／＼騒いで居たれど、終う々々持ち切れずして軍門に降れり』との觀念を與ふ。果して然らば自己が從來公表したる批評文も、忽ち權威を失却し、収入にあり附く爲に道具に使ひたるもの、如く思惟せらるゝのみならず、將來に向つても、徳義上、言論を拘束せらるゝ原因となる。これ彼の忍び能はざりし所なり。第二は自ら求めて得たる職業は、地位収入とも多寡の知れたものにして、直轄學校長位が關の山なり。直轄學校長敢て卑下するにあらずと雖も、彼の希望に副はざること甚だし。彼の野心は貴族院議員たるにありて他にあらず。然るに貴族院議員は、自ら求めては得られざること明かなるが故に、如何に苦しくとも隱忍するの外なしと斷めたり。第三は自ら進んで求めずとも、近き將來に於て必らず先方より何物かを齎らすに違ひなきが故に、自己の取るべき方法としては、知らぬ顔で盛んに騒ぎ、成るべく其機會を促進するに若かずと信じたり。

小松原の方に於ても亦之に類したる掛引あり。試みに之を想像すれば凡そ二個あり。澤柳を勝手に騒がし置くことの不得策なるは萬々承知せり。又、澤柳が盛ん

に騒ぐことの裏面の理由もよく承知せり。其處は流石に人間學を卒業したる苦勞人なり。澤柳の野心、澤柳の心事を讀破せざること斷じてあらず。然れども恰適の時機を選ばずして、無雜作に澤柳を勅選に推薦せば、如何にも澤柳の批評を恐れたるかの如く見らるゝ懼れあり。澤柳自身に斯く見られても心外なり。世の一般に斯く見られても心外にして、且つ小松原自身にも、澤柳本人にも不利益なり。これ彼が何も彼も能く承知して居て、尙ほ且つ容易に澤柳の謎を解かざりし第一原因なり。第二は澤柳をして今少し生活上の困窮を感ぜしむる必要ありと信じたること是れなり。均しく人の希望を容れ、又は人に恩恵を施す場合に於ても、早く無雜作に斷行するを得策とする時と、勿體振つて仲々行らず、本人をデラシ抜いた場合に漸く斷行するを得策とする時との二あり。辻に男爵を授けたる一件は前の場合に相當し、澤柳の勅選一件は後の場合に相當す。何うせ、勅選となすに決心したるにもせよ、成るべく遅延に遅延を重ね、ウント生活に困らしたる後に初めて推薦するは、澤柳をして一層難有味を感ぜしむるに都合よしと信じたるに違ひなし。雙方に斯の如き掛引ありて暫くニラみ合へり。然れども衷心に於ては、何れも接

近したき希望を有してのことなるが故に、高商の學校長後任問題起るに及んで、兩者は殆んど、『待つて居ました』と言はぬばかりに融和接近し、澤柳先づ小松原の懇望に應じて高商の校長となり、次で小松原は桂に談合して間もなく勅選議員の任命を發表せり。

東京高商は教育界の難物にして歴代の校長一人として満足の終りを告げたるものならず。文部省より差向くる候補者は學校で要らずと言ひ、學校で欲し、と言ふ人物は、候補者の方で謝絶するといふが從來の例なり。最近騷擾後の校長後任問題に於ても、最先に候補者に擬せられたるものは、一高の新渡戸稻造なりしと雖も、高商側は一高に要らざるほどの校長は、我校にも要らずと稱して之を拒絶しき。新渡戸の校長説は多くの新聞當時之を否定したりと雖も、そは實際の事情を知らざるが爲なり。候補者に擬せられたるは事實とす。

新渡戸を拒絶したる高商の人氣は、期せずして澤柳に向ひ、澤柳ならば全校一致して歓迎すべしとのことなりき。茲に於てか小松原は心中密かに『締めた』と叫び、一舉兩得の快手を振ふは此時なりとして澤柳を説き、辭と禮とを厚うして終に之を

物にせり。

小松原が澤柳を羅致するに就て、禮を厚うしたりと見るべきは、本任命とせずして事務取扱としたる一事にあり。表面の事由に依れば、澤柳の前官より一等を下ぐる事が、本人に對して氣の毒なるが爲なりといふにありと雖も、斯の如きは子供囁しの極にして固より信ずるに足らず。何となれば苟も澤柳ともあらうものが、官等の一等や二等を氣にして進退を異にすとは、何うしても受取ること能はざるが爲なり。

然らば眞の原因は何なりや。言ふ迄もなく、金錢の一事にあり。若し澤柳を本任命とせんか、千圓餘の恩給は、一時支給を中斷せらるゝが故に、校長俸給三千圓を受くるとも、事實に於ては、正味二千圓の校長たるに異ならず。然るに若し之を事務取扱とせんか、恩給は其儘支給せらるゝが故に、合計四千圓の収入となる。二千圓と四千圓とは大邊の違ひなり、進退を異にするも可笑しきことは少しもあらず。小松原が『官等上の關係なり』と強辯したるは、啻に世を欺きしのみにはあらず、又澤柳の人物を小さくしたること至大なり。若し彼れ思ひ切つて眞實を語り、『二千圓で天下の名士を招聘し得るものではない』と一言いは、何人も『成る程』と首肯すべかりし所

なり。

其後勅選の任命あり、官吏増俸の實行あり。四千圓の上に二千七百圓を増して、一時、六千七百圓の巨額を受けたり。

彼れ昨年雜司谷に地所を借り、家屋を新築す。澤柳一生中の大當りにして何よりの祝事と謂ふべし。

澤柳が借地せる附近には、齋田功太郎あり、瀧澤菊太郎あり、御園生金太郎あり。澤柳を加へて教育界の四太郎を一所に集む。奇觀と謂ふべし。其他中將の福島安正あり、舊松本藩主の戸田子爵あり。澤柳が借りたる地所は、恐らく戸田の所有にかゝるものならん。目白停車場より程遠からぬ高燥閑靜の地、讀書子には眺向きの所なり。遠からず新宅拜見と出掛くべきものならん。

一、二年前迄は、借金によりて生活せる者、今は一轉して第宅の所有者となる。其急變の甚だしき眞に驚くべきものあり。而してこれ多くは澤柳自身の技倆の致す所なりと雖も、亦一には小松原の好意が與つて力ありしことを認めずんばならず。

小松原は前きに澤柳を困らしめんと企てたり。然れどもそは澤柳を惡むが爲に

あらずして、一種の政策より出でたる結果なるが故に、一度び情意投合を成就するや、二重にも三重にも収入の道を與へて、瞬く間に曩日の埋め合はせを完うせり。政治家の脚色は、斯る些細のことにも、尙ほ政治的色彩を帶ぶるが故に面白し。

澤柳も亦喰へざる人物なり。彼は小松原の心事を百も二百も承知せり。衷心に於ては私かに小松原の好意を十分に感謝せり。然れども表面に於ては、飽迄知らぬ顔を極め込んで、勅選任命當時は一層猛烈に文部省を攻撃せり。蓋し斯くせざれば、小松原の爲にも、自己の爲にも、不利益なりと信じたるが爲ならん。

彼が貴族院議員となるや、新聞紙の或物傳へて曰く、『澤柳を懐柔せんが爲めなり』と。澤柳が依然盛んに文部省を攻撃したるは、則ち此風説を否定せんが爲に外ならず。

澤柳は今日既に絶頂に達したる人物にあらず。彼の野心は大にして志は當さに臺閣にあり。勅選議員に任命せられたることを無上の光榮として萬事を抛擲するほど、小志の人物には斷じてあらず。然るに世之を思はずして敢て彼を懐柔せんが爲めなりと謂ふ。彼の自尊心を傷くるもまた甚だし。故に此一事よりいふも、彼が

敢然繼續して文部省を攻撃するは必然なり。況んや斯の如き風説は、小松原の爲にも取る所にあらざるに於てをや。

然れども何時迄も攻撃を繼續すれば、小松原の迷惑となる。假令内心に於ては理由の善良なるものありとするも、其結果に於ては、頗る害悪の影響を醸生し、全く仇敵の對峙と同一に歸す。斯の如きは小松原の好意を無にする所以にして、又澤柳の斷じて取らざる所なり。

茲に於てか、彼れヅリに筆の方向を轉換し、素人眼に映ぜざる程巧妙なる仕掛によりて、全く論題を一變せり。

試みに彼が四十三年春頃以來に論じたる所の題目を點檢せよ。其主要なるものは悉く青年問題にして其他にあらじ。會々また大人向きの事を論ぜざりしにあらざると雖も、そは大抵道德問題又は思潮問題にして、教育行政の時事問題にはあらず。我輩、當時異國にあり。彼の言論の全部を點檢すること能はざりしと雖も、大勢より見て斯の如く觀察するの誤らざるを確信す。

然れども、我輩は彼を貶謫するが爲に斯の如き言をなすものにはあらず。我輩は

寧ろ之を以て彼の人物の非凡なるを證明し、政治家的手腕態度の具有を示す資材となす。

彼にして若し辻新次の如く將來に野心なき人物たらしめば、勅選議員の任命によりて、直ちに猫の如く軟化したるに違ひなく、又樋口勘治郎の如く無策の人物たらしめば、小松原との融和接近によりて、直ちに露骨なる態度の豹變をなしたるに違ひなし。然かも彼れ事茲に出でず、極めて巧妙なる旋回術を用ゐて、徐々に方向を轉換し、盛んに論評し居るもの、如く見せかけて、其實小松原には何等の苦痛をも與へざる手段を取れり。故に情意投合後と當年とを比較せば、彼の態度に著しき相違ありと雖も、此相違は普通の人には鳥渡解らず、相變らず當年の意氣を以て文部省に衝きのるもの、如く想はしめたり。

何は兎もあれ、小松原と澤柳との掛引及び接近は、近時の教育界に於ける最も面白き脚色の一にして、批評家に取りては、何よりの御馳走なり。兩者孰れも立派に行動し、立派に面目を立て、而して立派に目的を達したりと謂ふも過賞にあらざるなり。然れども此成功を唯だ二人者の手柄のみに歸する者あらば、そは大なる誤りなり。

二人者の中間に介在し、雙方をうまく取りなしたる一人の第三者あることを忘れて此脚色を讀まば恐らくは真相を得ること難からん。而して其第三者は則ち岡田良平に外ならず。岡田は小松原に對しては腹心の後進なり。澤柳に對しては親密の友人なり。友人たる關係に於ては、澤柳の面目を損せざる程度に於て、一日も早く窮境より脱出せしむる方法を講ぜざるべからず。これ自然の人情なり。然れども腹心の後進たる關係に於ては、飽く迄小松原の面目を維持し、『教育界の事情を知らざるが爲めに小松原は失敗せり』と言はしめざるやうに取計らはざるべからず。これ公人としての義務なり。是を以て彼は義理と人情との岐點に立ち、永く煩悶して漸く其機を得たり。高商校長問題則ち是れなり。

澤柳を高商の校長となすに就ては、小松原自ら正式に交渉したるを疑はず。然れども内相談は岡田先づ之をなしたるに違ひなし。これは假名遣改訂案を撤回する前に、岡田が澤柳を訪うて豫め其意を通じたる事例に徴するも明かなる所なり。岡田は澤柳に向つては、『人が無くつて困るのだから是非引受けて呉れ玉へ』位に懇談し、小松原に向つては、『暗黙の條件として澤柳を勅選に推薦せられたし』位に懇談

したるものならん。殊に澤柳を事務取扱としたる一事は、最も善く岡田の介在を隠見せしむ。何となれば、斯る事務上のことは、到底小松原の想到し得る所にあらざるが故なり。

例證稍々冗長に失したりと雖も、要は澤柳の行り型の一般を闡明して、彼が第一種政治家の模型に部屬する事を斷定せんが爲に外ならず。彼にして若し自己の存在と價值とを社會に意識せしむることを念慮とせず、公衆の耳目聳動と世の毀譽褒貶とを氣に懸けざる人ならば、小松原との情意投合一件に於て、彼の如く婉曲旋回の術數を弄すること斷じてあらず。

岡田良平は全く之に反す。彼の私生涯は華麗の以て世に示すべきものなく、雄壯の以て人を驚かすに足るものなし。彼の地位財産よりいへば、寧ろ極めて單純簡朴にして、殆んど政治家らしき臭味を缺けり。其趣味の如きも、頗る狭く、詩を作らず、歌を詠ぜず、園藝を弄ばず、謠曲を唸らず、書畫骨董を玩賞せず、烟草を喫はず、酒も飲まず、而して婦女子を以て絶對の禁物となす。

我輩の將に西洋に遊ばんとするや、都下の新聞通信記者約三十名、天神の『魚十』に

於て、我輩の爲に送別會を開催す。我輩は主賓なるが故に、匆々に切り上げて歸宅したりと雖も、我輩の退席後に於て酒興益々長じ、高談放論、四邊を空しうせりと聞く。話次、偶々岡田良平の身上に及ぶや、人あり、突如口を挿んで、『人は見かけによらぬ者なり。岡田の如く謹嚴方正の人にして尙且つ嬖妾を有せんとは……』といふ。座に『電報通信』の松村忠雅あり。之を聞いて憤慨一方ならず、岡田の爲に百方辯護して『誤傳、誤聞、中傷、冤罪なり』と力論し、『岡田に限つて、そんなことはなし』と熱心論難す。然かも對手の尙ほ之に快從せざるを見るや、彼れ列座の面々を個別に訪うて意見を求め、大々多數の人が、彼の所見に同ざるを確むるに及んで、稍々安堵の色を示したりと雖も、然かも未だ十分に氷釋するに至らず、獨語、獨罵、獨恨して遂に大聲泣喚す。傍に樋口勘治郎あり。松村を慰めて『大多數の意見既に君の所見に合致したる上は、君の勝利なり。何ぞ涙を出して迄恨憾する必要あらんや』といふ。松村少しも之を聽かず、樋口に向ひて、『今より岡田の私宅を訪問し、精しく質問して事情を闡明すべきにより、君も同道して僕の證人たれ』と強要す。樋口も酩酊の上のことなれば、直ちに之を快諾し、眞に岡田を訪問すべき心算にて『魚十』を出で、兩人腕車

を驅りて小石川に向ふ。時、正さに夜の十二時にして、月照皎々たれども、積雪寸餘の上に出で、寒風膚を劈くばかりなり。

岡田の私宅は小石川の原町にあり。樋口の自宅は小石川の林町にあり。樋口の自宅に歸るには、岡田の私宅の前を通るを順路とす。樋口は始め岡田の私宅に松村を同道すべき考にて、『魚十』を出でたりと雖も、車上、寒風に吹かれたる爲、岡田の家の前に來りたる頃には、酩酊醒めて岡田の家を訪ふべき勇氣も出でず、其儘、林町の自家迄車を走らしむ。松村は極醉尙ほ醒めずと雖も、車上に安眠して鼾聲雷の如く、固より岡田の家の何處なるやを知り得る道理なし。茲に於てか、兩人とも岡田の家の前を素通りして樋口の家に行き、家人を叩き起して、書生と女中に松村の身體を室内に運搬せしむ。

當時、我輩樋口の近傍に住む。樋口、翌朝、洗湯の歸途を以て、我輩の寓居を訪ね、『昨夜、斯くくの事ありき』と具さに語り、松村の豪傑は未だ起床し得ずと告ぐ。我輩、乃ち答へて曰く、『岡田にして若し嬖妾を蓄ふる程の勇氣と粹味とを有せば、彼の政治家的手腕は今一段の進境あるべきを疑はざるに、惜しむらくは、彼れ之を有せず』

と。

岡田は當さに斯の如き人物也。方正、謹嚴、度に過ぎて融通と磊落との資質に乏し。紳士としての一大美點たるを失はずと雖も、政治家としては、一の缺點たるを疑はず。少くとも、此點に於て、彼は令弟の一木喜徳郎に及ばざること明けし。一木も一般人よりは謹嚴の方なりと雖も、然かも尙ほ酒を嗜み、書畫骨董を愛玩し、低級の文學を解し、美人をも亦解す。彼が法博の學位を有するにも拘はらず、近時、漸く垢脱して政治家らしき態度を具有するに至れるは、彼の修養に負ふ所多かるべきは勿論なりと雖も、亦彼が粹界の人間學より得たる所少からざるにも因らざるべし。

有體にいへば、岡田は決して公衆の好愛する政治家にあらず。彼は一般公衆に對しては、一の快感を與ふべき態度を示さず、自己の能事を盡くして必ずしも、其公衆に知られんことを願はざる也。彼は浮泛なる群情に殉ずるを爲さざる代りに、少數の共同者に信頼せらるるを以て満足せり。彼は細心にして、慎獨の工夫あり、謹嚴にして妄りに放言高論せざるが故に、彼の共同者は、彼と祕密を語り、大事を計りて危まざる也。彼は批評せずして計畫し、實行し、否らずんば沈黙するが故に、公衆の眼には頗

る陰氣にして、腹黒き政治家の如く見ゆると雖も、彼の親近者及共同者に對する行動は、眞摯なる考慮、動搖せざる決斷、負託に背かざる信義、責任に對する大なる信念を以て表現せらる。是れ彼が公衆に歓迎せられざるにも拘はらず、然かも尙ほ能く政治界の一方に鞏固なる地盤を有する所以なり。然らば、岡田は第二種政治家の模型に當て倣まるべき人物に近しと謂ふべし。

第一種の模型に屬する政治家は、近附いて見るよりも、遠所より眺むる時に於て、光輝を發し、第二種の模型に屬する政治家は、遠く離れて見るよりも、親近して見る時に於て、光輝を發す。而して、岡田と澤柳とは、實に各一方の代表的傾向を帶ぶ。

今、翻つて福原を見る、彼は遠く離れて何等の光輝を放たず、近づいて見て、非常に快感を與ふることあるが故に、此點より見れば、彼は澤柳、岡田に近きが如しと雖ども、然かも岡田よりは遙かに融通に長け、磊落に富むが故に、此點に於ては寧ろ澤柳に近かし。而して如才なく、人を外らさざる技倆に於ては、岡田も澤柳も及び得る所にあらず。福原は嶄然として卓出す。

想ふに福原は、岡田にも澤柳にも一長一短あるを知りて、何れにも偏倚せず、兩者の

長處を取る事に努めたるものならん。彼が著書も出さず、雑誌にも書かず、屹々として職務に勵精する以外、自己の存在を社會に記憶せしむべき何等の手段を講ぜざるは、恐らく岡田の態度を眞似たるものに違はざらん。斯は決して岡田の長處にあらず、又、澤柳の短處にあらずと雖も、福原は何となく、岡田の方を自分の趣味に合する態度と認めたるものに違ひなし。我輩は己れの趣味、理想に於ては、絶對に岡田式の態度に反對し、全然澤柳式の態度に賛成するのみならず、社會に自己を領解せしめ、國民に自己の存在を知らしむるとは、立憲政治家の一大條件なるが故に、政治學的原則の上より見るも、澤柳式の態度に十分の賛意を有するものなりと雖も、奈何せん、日本の政海は歐洲のそれと全然別趣の事情を有し、辯論、文章が政治家の一要素とならずして、却つて妨害となること數次なるが故に、此等の事情に鑑みて、將來に大望を有するもの、態度としては、澤柳よりも、寧ろ岡田を取るべきことの餘儀なきものあるを認めずんば、あらざるなり。我輩は、福原が岡田の態度に近爾するを見て、彼の賢明なるを賞せずんば、あらず。

福原が質素勤儉にして、貯蓄に忠實なることも、亦岡田を學ぶ一點となすを妨げず。

我輩曾て彼を評論したる時、彼の節儉に言及して、『彼は自用车に乗らずして、電車に常乗し、敷島を用ゐずして、大和を喫す』といふ。松浦鎮次郎、後日、我輩に語りて、『福原の常用賃は、大和にらずして、朝日なり、他日須らく訂正するを要す』といへり。『朝日』の如き烟草は、我輩最近四五ヶ年間、殆んど其顔を見ること稀有なるが故に、或は『大和』と間違へたるやも知れずと思ひ、其後注意して福原の賃を見たるに、成る程、松浦の言の如く、『大和』にあらずして、『朝日』なりき。

彼の質素勤儉は、此一事によつて、全般を推知するに難からず。彼の財産が現時幾何あるやは、我輩の未だ詳知せざる所なりと雖も、地所家屋よりの収入と恩給とを合はすれば、官を辭して民間に下るも、一生、食ふ丈のものは存すべし。

凡そ公人として最も大切な事に二あり。一は讀書に勉むることにして、二は相當の資産を有すること是れなり。蓋し讀書は經綸の識見を涵養すべき唯一の源泉にして、資産は萬一の場合に男子らしき進退をなさしめ、逆境に陥るも尙ほ且つ節操を維持せしむる唯一の源泉なればなり。福原が此點に於ける強き自覺の下に、勤儉をなすや否やは不明なりと雖も、兎も角、能く分度を守り、贅費を使はざる一事は、當さ

に賞揚すべき事實として認めざるを得ず。彼は讀書に勉むる點に於て、恐らく澤柳に及ばざらん。然れども勤儉貯蓄の點に於ては確かに澤柳の上であり。澤柳が今日迄相當の資産を有せざることは、理由の何たるに拘はらず、彼の一缺點たるを失はず。

岡田が野に下るも、病氣に罹るも、泰然不動、悠々として自適するは、一に彼が資産を有するが爲に外ならず。然れども彼は公人として俗衆に受け悪しく、私人として趣味狭き缺點を有す。少くとも澤柳に比すれば確かに劣れり。世に、『群雄を收攬統御するを以て政治家の一大資格とする』者あり。然れども我輩を以て觀れば、群雄を統御するよりも、衆愚を統御する方が政治家に取つて必要にして、又、困難の業たらずんばならず。蓋し群雄は理を以て統御するを得べしと雖も、衆愚は情と呼吸とを以て統御せざるべからざるが故なり。然るに福原は稍々此呼吸を解す。少くとも岡田に比すれば遙かに上手なり。私人としての趣味に於ても、岡田よりは稍廣し。彼は大江敬香に就て漢詩を學び、時々、新聞種を供給す。今漸く平仄と韻字を覺えたる位に過ぎずと雖も、兎も角、漢詩らしき者をひねくり廻はす丈の趣味あるは事實と

す。趣味の有無は、單純なる娛樂問題に過ぎざるが如しと雖も、其實必ずしも然らず。趣味なき人は、胸中に閑日月を有せざるが故に、大事に當りて噪急に陥り易く、萬事に理窟張つて野暮臭し。福原が漢詩をひねくり廻はすは、些事に似たりと雖も、事務に齷齪し來れる人としては、豫想外の美點を具ふるものと謂ふも過言にあらざ。彼れにして、今後若し絶えず、讀書に勉め、政治的識見の向上を謀ると共に、私的生涯に於ける趣味の擴大を計らば、其人物技倆は、將來渾然として大成する時あらん。然れども政治家的模型として、岡田式を取るか、澤柳式に倣ふかは、以上の二事以外に存在する實際上の緊要問題にして、彼が將來志をなす上に少からざる影響あるを疑はず。彼が從來岡田、澤柳の長處を採ることに努めたる事は、後進の用意として稱揚に値ひするものありと雖も、其長處たるや概して私行上の些事に止まり、未だ政治家としての本領長處に及ばざる憾みあるを免れず。今後は須らく眼を高處に着け、一段の高見地に立ちて人物を觀察することに努むべし。然らば數年の後、必らず造詣あらん。

(此項四十四年十二月稿)

(二) 田所美治と松村茂助

今の文部省中、福原を除いて他に花形役者を求むれば、何人も恐らく指を田所美治に屈すべし。田所は省中第一の才人にして、融通裕達、何事にも役に立ち、何人にも受け好き人物なり。彼、今、普通學務局長の職にあり。

彼の前任者は、今の休職普通學務局長松村茂助なり。松村は武骨稜々の快男兒、今後の修養如何によりては必らず將來あるを疑はざりしに、惜しむべし、昨年來病を以て休職靜養す。經過稍々良じと聞くと雖も、事實は果して如何。我輩甚だ憂慮に堪へざるなり。

我輩の英國にゐる時、彼れ我輩に書を寄せて『天才、自重大成を期せよ』といふ。此號令的の一句、實に彼の性格を表示して餘りあり。彼が贈れる繪葉書は、今、收まつて我輩のアルバムにあり。我輩時々、之を取り出して見る毎に、想を彼の身上に廻ぐらして其容體を憂ふ。

松村は、一見したる所、體格強健、叩き殺しても死せざるが如く思はるゝにも拘はらず、今、倒れて病床にあり。田所は瘦身瘦軀、吹けば飛ぶが如く想はるゝにも拘はらず、未だ曾て大患に罹らず、始終頑健にして、今、省内に勢威を振ふ。田所の如きは當さに

柳に風ともいふべきものならん。

松村と田所とは、大學卒業當時より、互に雁行競争し、上になり下になりて今日に至る。松村が一步先んじて局長となりし事に就ての消息は、我輩先きに、之れを述べたり。爾來、我輩、田所を語りて松村を想はざることなく、松村を語りて田所を想起せざることあらざるなり。然れども、我輩が此兩省を連結するは兩者の性格人物が、互に近似するが爲に、寧ろ兩者の性行が全く別種の模型に屬するが爲に、外ならず。

松村は豪傑肌にして其性格は萬人向きにあらず。好きな人には馬鹿に受けよしと雖も、好かれざる人には積極的に擯斥せらる。此所が田所と著しく異なる所なり。田所は先づ先方の人物、性格を觀察し、對手の人物趣味に適合するやうに自分を矯めて提供す。故に如何なる人にも向かざることあらず。松村は然らず。彼は相手の如何に拘らず、常に同一の態度を以て對向し、先方の人物如何を顧みずして、稜々たる武骨を振り翳さず。故に向き不向きとの區別を生ず。

以聞らく、高商騷擾事件の形勢不穩となるや、田所、小松原に獻策するに、『讓歩して

時局を收めん』ことを以てしたりといふ。小松原は頑として之を聞かざりしと雖も、兎も角、田所が大變憂慮して進言を試みたるは事實なり。

當時、人あり、松村の所感を叩く。松村曰く、『今の青年は腰が弱くつて駄目也。團體を組んで反抗するなどは、卑怯の極にして、同情の餘地更になし。若し不平のことあらば、宜しく一人で、行つて、相手を撲ぐり倒すべきなり。僕等の青年時代は正に斯の如くありしなり』と。客、呆然として答ふる所を知らず。

田所と松村の異なるは、此一事に依りて最も善く判明す。一方は自分のことの如く心配して種々に進言し、他方は外所事を見るが如き態度を以て壯語放言す。

又聞く、省内會議の時、小松原が最も屢々意見を徴したるは田所にして、又最も忠實に意見を吐露したものは田所なりしと。而して會ま松村の意見を徴する事あれば、松村言下に、『そゝんな鹿馬なことがあるもんか』といふ。小松原稍々立腹し、『馬鹿とは何だ、貴様が馬鹿ではないか』と譴責し、雙方喧嘩腰になつて争ふことすら稀れならざりしと傳へらる。

惟ふに松村の長處は、蠻氣にあり。其缺點は八方美人の足らざるにあり。八方美

人といへば、惡しき意味に取る人なきを保せずと雖も、そは取る人の誤りなり。八方美人といふ語は、八面玲瓏といふことを俗解したる言葉なり。如何なる境遇にも適應し、如何なる人に對しても、快感を與へつゝ、獻酬する才を稱して八方美人といふ。政治家の一要素にして、大人物の通有性に外ならず。

人間は感情の動物なるが故に、智慧や道理のみに動かすこと頗る難し。殊に政治界に於て最も然りとす。故に政治に志ある者は時として愚論にも傾聴し、又、時として生意氣者を煽てる位の辛抱を有せざるべからず。然らざれば人望を得る事難く、従つて群雄を駕御すること甚だ難し。まだ地位勢力を占めざる中は、少々出過ぎた振舞をなすも善し。十分圭角を現はすも差支なし。然れども既に相當の地位に達したる曉は、成るべく鋒鏑を藏くし、能ふ丈群心を收攬することに努むべし。これ讀書に勵むよりも、更に肝要なる政治家の用意なり。

而して群心を收攬する方法は、一が八方美人にして、二が不得要領なり。此二法に優る秘訣は他にあらじ。稀れに星亨の如き、收攬術を用ゆる政治家もなきにあらずと雖も、そは權道中の權道にして、一般の則とすべきにあらず。

伊藤博文が政治家として成功したるは、八方美人の資質之を助けたるに原因す。桂太郎の成功したるも亦之が爲に外らず。板垣退助が政黨首領として失敗したるは何故なりや。餘りに鋒鏘を露出して、不得要領の用意を缺如したるが爲に外ならず。才幹無雙にして、且つ伊藤よりも先輩なる井上馨が、終に一度も首相たること能はざりしも、亦主として此に原因す。

我輩は松村に向つて、二秘訣の中、何れを取れとは指定せず。然れども、其何れを採るとを問はず、一を選んで修得せば、病氣快癒して復官の後、必らず大なる進境あるを疑はず。

田所の長處は、八面玲瓏の才にあり。其缺點は蠻氣の足らざるにあり。蠻氣といふ語も、悪しき意味に取る人なきを保せずと雖も、そは誤りなり。蠻氣とは膽力の謂にして難關に當つて頓挫せざる勇氣を謂ふなり。高商問題の眞最中、彼が讓歩を獻策したりてふ事實にして眞ならば、彼は明かに蠻氣の足らざることを曝露したるものに外ならず。

想ふに才子の長處は事に當つて奇手百出、常に多策を以て機先を制するにあり。

故に通常の場合に於ては、容易に難關を惹き起さず、何とか變通の道を講じて平和の中に結末を着く。然れども若し過つて萬一難關を起さんか、終り迄所信を押し通すこと能はずして、必らず中途に挫折一敗す。これ才子の通有缺點なり。故に才子にして若し上にシツカリした人物を戴いて仕事をなさば、其働き振り必らず人目を聳動せしむべきものありと雖も、自ら長となつて責任の衝に當らば、味噌を附くること案外多し。蠻氣足らざるが爲なり。

田所は才に於ては拔群なり。八方美人や不得要領を學ぶべき必要毫もなし。彼に最も必要なるは、蠻氣の涵養にあり。彼にして若し膽力を養成せば、第二の澤柳政太郎たること必らずしも難きに外らず。澤柳は才人なりと雖も、決して一般才子の比にあらず。膽力据わり、ドツシリした重みを有す。これ今日ある所以なり。

田所は才に於て澤柳に劣らず。其識見に於て未だ及ばざるものありと雖も、其口吻に於ては頗る酷似するものあるを見る。

我輩曾て文部省祕書官に於て澤柳に會す。談、偶々中學修身書のことと及ぶ。澤柳荐りに在來の修身書を攻撃して大抵之を排斥す。獨り坪内雄造の著作を稱揚し

て、彼れ曰く、『流石は文學者なり。青年の思想感情を善く解し、會心の文字を以て著者の渾一せる思想を發表し、一讀直ちに青年の血肉たらしむる如く作り居れり』と。蓋し、相當に文學を解し、文章の妙味を味ひ得る人にあらざれば、爲し得ざる批評なり。田所も亦嘗て我輩に向ひて之に類したることを語れることあり。曰く、『文章といひ、辯論といふも、歸する所は頭なり。純文學はいざ知らず其他の一般文章にありては、技巧にあらずして思想と見識との二點にあり。今の人動もすれば、文章巧き人を指して、彼は言はして置けば巧いことを言ふ』と評することありと雖も、僕之を取らず、文章の巧きほどの人は、實際に當らしても、經驗次第で、必らず役に立つべし。何となれば頭善きが故なり』と。之を澤柳の言の意味深長なるに比すれば、未だ及ばざるものあるを免れずと雖も、其根柢に於て、思想の脈絡相通するものあるを疑はず。

我輩の曾て『文部省高等官總評』を書くや、澤柳之を評して曰く、『少し見當外れの所もあれど、何にせよ省外の人でアレ丈見ふれば殆ど天眼通なり』と。斯は傳聞なりと雖も、事實に偽りなきは我輩の保證する所也。田所も亦、我輩に向ひて之に類したることを言へり。曰く、『一二觀察の透徹せざる所あるやに見受けたり。然れども大

體に於ては極めて正皓を得たり。天眼通と稱して少しも過賞にあらず』と。何ぞ其口吻の相似たるや。

澤柳、又故木山熊次郎に我輩の經歷を問ふ。曰く、『藤原といふ男は學士なりや』と。木山之に答へて『全然獨學の人なり』といふ。澤柳曰く、『さうか、それで始めて判明せり。予は始め學士ならんと想ひ、彼の肩書を始終注意して見たれど未だ一度も『學士』と署したるものに出會はざりき。それ故に或は高等師範出ならんかとも思ひたれど、高等師範出にして新聞記者たることは少々受取れず。さればとて、私立大學出にしては、教育のことに精通し過ぎるやうに思はれて信じられず。見當を附くるに惑ひたり』と。田所も亦之に似て非なることを數次言へり。彼は我輩を他に紹介するに、必らず『早稻田の卒業、藤原君』を以てす。我輩其都度閉口す。然れども敢て之を打ち消さず、彼の言ふが儘に放任す。蓋し人物評の材料を得ん爲には、成るべく多く、不用意に語らしむる必要あるが故なり。我輩は初め彼が故意に斯の言をなすならんと疑へり。然れども後に至りて、漸く其の然らざるを覺りたると共に、澤柳に比すれば尙ほ未だ及ばざるものあるを感知せり。

我輩固より學士といはれて喜ぶにあらず、早稻田の卒業生といはれて嫌ふにあらず。然れども澤柳の言には條理一貫せる推定あり。我輩を買被れる一事は、大に笑ふべしと雖も、論理の形式に於て寸毫の矛盾なきは感服の至りなり。之に反して田所の言は、全然臆斷なり。彼は、『新聞記者なるが故に早稻田の卒業生なり』との論理を用ゐる居れども、此論理は論理にならず、頗る危険の臆斷なり。

我輩は尋常小學校四年級迄、行きたることは事實なれども卒業して居らずと聞く。然らば我輩は尋常小學校三年の修業生なり。而して之が學歴の全部なり。高等小學校も、中學校も、師範學校も、此等のものは一切我輩と没交渉なり。況んや早稻田をや、帝國大學をや。

事例、自己に關するものを挙げたるは、我輩の私かに恐縮する所なり。然れども、これ決して他意あるにあらず。我輩は唯だ澤柳と田所との間に、思想の脈絡相通ずるものあるを言へば足る。田所にして若し澤柳の修養の跡を研究し、主として智見と膽識の涵養に努めば、數年の後、必らず進境あらん。

膽識涵養法としては、凡そ三種あり。一は大人物に私淑して之に倣ふにあり。二

は禪學を研究して虚心坦懐を學ぶにあり。而して三は武術(擊劍柔術の類)を學んで其精神を鍛鍊するにあり。

學ぶべき大人物としては、近代の故人に大西郷あり、大久保あり。生存者に山縣有朋あり、大山巖あり。何れに私淑するも得る所必ず大ならん。

若し才幹よりいへば大西郷よりも、大村益次郎を取らざるべからず。然れども『人物の偉大』といふ點に於ては、大村到底西郷の敵にあらず。

維新の當時、西郷を評するものあり。『西郷ほどの大軍人は古今東西其類極めて稀れなり。然れども西郷ほど兵を知らざるものも亦其例乏し』と、蓋し真相を得たるに近からん。大村は善謀善斷、加ふるに行政の才を以てす。兵を知り、治術を解する點に於ては、維新軍人中の第一者なり。然れども大村は畢竟才の人なり。膽識、器局に至つては、到底西郷に及ばず。一は大參謀の器、他は大將軍の器物なり。

若し政治家的識見より云へば、木戸孝允は大久保の上にあり。然れども木戸は畢竟才に勝ち、大久保は膽識を以て優れる人にはあらずしか。才子の私淑すべき人としては、我輩大久保を取る。

山縣と伊藤、大山と兒玉等も、以上の理を以て推すを得。若し夫れ、西園寺、桂に至つては、純然たる才の人なり。後藤新平に至つては、殆んど才の權化なり。此等の三者が、今日迄至れるに就ては、人一倍の修養あり。固より凡々者流と同一視すべきにあらざると雖も、然かも其天分に於ては、終に才の人たるを免れず。膽識の人としては、我輩寧ろ寺内正毅を取る。

斯く論じ來らば、『才子なり』といふことは、少しも悲觀すべき理由とならず。寧ろ修養如何によりては、大なる未來あることを暗示するものに外ならず。

澤柳が禪學を研究するは、彼の自覺的修養法なり。膽識涵養の手段なり。彼が大人物の私淑と、併はせ行ひ居るや否やは、我輩未だ之を知らずと雖も、兎も角、禪學研究の一事にても、慥かに後進才子の味ふべき價あり。

我輩は、田所に向つて徹頭徹尾澤柳を模倣せよとは言はず然れども澤柳の修養法を研究して見る必要あることを勧めずんばならず。

田所は讀書をなすや否や。なすとせば如何なる種類の書を讀みつゝありや。我輩之を調ふべくして遂に調べ得ず、評論の範圍を限局せられたるを遺憾とす。

澤柳は才人なりと雖も、常に讀書を劣らず。新知識の收得と智見の啓發とに是れ努む。田所が第二の澤柳たらんと欲せば、銳意して、人物規模の擴大と、膽力の涵養とに努むることを要するのみならず、又、刻苦、大に讀書に努むることを要すべし。

澤柳を以て通常一片の單純なる才子と思はゞ、迷妄これより甚だしきはなし。人の知らざる裏面に於て、人一倍の工夫修養ありしことを看過して澤柳を付度せば、迷妄更にこれより甚だしきはなし。

田所は才氣に於て稀觀の人物なり。彼にして若し將來大成すること能はずとせば、そは彼の才の足らざる爲にあらざして、寧ろ才氣有り餘つて、彼が其才に負けたるが爲なり。彼れ若し才子の通有缺點に想到し、讀書に勵み、蠻勇を養成して、人物の幅と、重みと強みとを作るに努めば、將來の或期に於て、福原の後を襲ひて、次官となり、次で貴族院に入るを得ん。

(三) 眞野文二と渡邊董之助

眞野は工科大学の首席教授にして、古き一等官なり。岡田よりも、澤柳よりも先輩にして、局長としても省中の古參者なり。

我輩英國にゐる時、彼れ公務を帯びて英國に來る。時、恰かも田所美治英國を去らんとす。我輩之を送らんとして、ジキクトラア停車場に到れば、シルクハット姿の眞野文二乃ち其處にあり。

數日の後、彼に招かれて日本料理店、生稻に到り、彼と晚餐を共にして、種々文政を論じたと共に、聊か彼の人物を觀察する機をも得たり。

想ふに彼は、學者の器にして、行政官は、其長處とする所にあらざらん。然れども彼の趣味よりいへば、行政官を好んで、學者を第二とする者に近きが如し。

眞野は實業學務局長たること數年、未だ赫々の功名をなすに至らずと雖も、曾て一度も大過をなさず、兎も角、相當の功績を擧げつゝある一事に徴せば、行政官として、相當の手腕識見を有することを疑はずと雖も、さればとて、直に彼を次官に擬せば、抑も如何。強ち不適任を以て目すべきにわらずと雖も、然かも遂に最良の適任者なりといふを得ざるべし。彼れ自身に於ても恐らく斯かる野心を有すまじ。彼の進むべき部面を露骨にいはず、彼は新設大學に總長たるを以て最も適當とすべし。舊設大學は歴史と情實とを有するが故に眞野にては治まらざる所なきを保せず。

渡邊董之助は、大瀬甚太郎と同期の文學士にして、次官福原よりも古參なり。

彼は溫厚柔和、順良の好人物にして、刀筆の良器なり。滿々たる霸氣も、縦横の機略も、政治的識見も、彼に於て遂に之を求むべからず。然れども忠實精勤の美德は之を有す。霸氣を有せざるが故に、他と衝突すること少く、機略を有せざるが故に、政争の渦中に雄飛すること能ふまじ。然りと雖も資性忠忱なるが故に、誘惑せられ易き圖書局長の地位にあるにも拘らず、未だ一度も醜聞を流したることなく、精勤精勵なるが故に、事務は駁々として進捗す。

渡邊を以て眞野に比すれば、似たる所あり、似ざる所あり。兩者とも省中の古參なれども、行政官としては、今日を以て殆んど頂點に達したるものと見るべき點に於てよく似たり。態度溫容にして、圭角乏しく、積極的に計畫する創業の才よりも、寧ろ圓滿の常識に訴へて、時務を處理する才能に富める點に於ても亦よく似たり。

然れども差異點に至つては、枚擧すべき點更に多し。眞野は快活にして、性、陽氣なれども、渡邊は稍々陰氣にして、快活に談笑すること極めて少く、氣焰を吐くこと殆んどなし。眞野は年齢に比して氣頗る若く、野心も亦相當に有すると雖も、渡邊は年齢

よりも氣稍々老い、前途の野心も恐らくあらじ。實業學務局長より大學總長に轉じて親任官待遇となり、更に貴族院議員となりて後生涯を飾らんことは、蓋し眞野の唯一最大野心に外ならざらん。然れども渡邊に至つては、全然斯の如き野心を抱くべき餘地もなし。彼は教授にあらざ、學者にあらざ、總長の器にあらざ。彼の資質よりいへば行政官たるよりも教育家たるに適すと雖も、直轄學校の地位は、現在の彼の地位よりも却つて下なるが故に、今後、其方面に轉ずることは、彼に取つて少しも名譽にあらざ、又利益にあらざ。然らば、彼の將來取るべき進路は、現在の地位に厭く迄落ち附いて、圖書行政に貢獻し、五年を経過したる後、新官制によりて一等官となり、更に數年の後、圓滿辭職を遂ぐる時、先輩の推薦を得て貴族院に入ることを狙ふの外ならず。眞野、新春電車に轢かれて重傷を負ひ、大學病院に入りて療養中なりといふ。其後の経過や如何。

文部省の高官連、近時、頻々として不幸の災厄に遭ふ。我輩の西洋に遊びてより以來、漸く二年を経過したるに過ぎずと雖も、其間に赤司の嚴父の逝去あり、福原及眞野の令聞の長逝あり、岡田及松村の病魔に犯さるゝあり。而して今、又眞野の遭災を聞

く。我輩切に其快復の速かならんことを祈りて已まず。(此二項四十五年一月稿)

(四) 赤司鷹一郎と松浦鎮次郎

一見青二才の如き容貌を具へ、三四代の大任に歴任して秘書官の職を勤め、今、三八歳の若年を以て、勅任局長の高位に坐する者あり。之を赤司鷹一郎となす。

赤司は才氣もあり、度胸もあり、省務の經驗もあり。加ふるに頭腦非常に明晰にして、手腕も思想も年齢よりは遙かに老熟し、轉た十年後の發展を想望せしむる人物なりと雖も、現在に於ては容貌の極端に若く見ゆる缺點あり。

斯は主として彼の天賦の美貌に基くものなりと雖も、然かも彼の服裝の若作りなることも、亦與つて大に力あることを認めずんばならず。彼は背廣服を着くれば、縞物を用ひ、フロックコートを着くれば、必らず變りチョッキを用ひ。而して彼の毛髮は短き角刈りにして、彼の帽子は黒にあらざして色變りなり。

我輩の將に西洋に遊ばんとする時、所要ありて彼に會す。傍に故木山熊次郎、曾根金僊の二者あり。我輩直ちに赤司の意氣な和服姿に眼を着けて、其旨を金僊に耳語す。金僊微笑せり。

赤司當日の衣服は、大島の重ねにして、羽織も同一物なりしと記憶し居れり。大島は通人の着る衣服にして、濫いこと云はん方なく、其價は普通の絹物よりも二三倍高し。然れども一見木綿の如く見ゆるが故に、素人には其難有味少しも解らず。田舎者にも見すれば、『何だか黄ろいやうなゴックンした木綿物を着て居たよ』位な話に過ぎず。而して教育界の人は、此等のことにかけては田舎者よりも、まだ非道し。故に着者が如何に衣服に凝つて居るやを看ること能はずして、唯だ其外見の若々しきことのみを印象す。

赤司を稱して、『まだ若し』といひ、『ハイカラなり』といふものあるは、畢竟真相を観察し得ざるが爲にして、赤司に取つては非常の冤罪なり。赤司は服装に凝ると雖も、種類を澤山持つて時々着換へるを樂しむ人にはあらず。彼は一度作れば、それを大切に保存して何時迄も着る性質の人なり。彼が日々着用して登省するインパネスは、彼が伯林の日蔭町で、十五マークを投じて購へる出來合物なり。最早や八九年も経つことなれば、大抵の人ならば着壞はして居るべく、着壞はさる迄も、新柄、新形の流行物の欲しきが爲に、疾くの昔に廢棄して居るべき所なり。然るに赤司は之

を爲さず、上手に着て、上手に保存し、今日に至るも尙ほ破れしめず、一見新調物を着用し居る如く、見せかけ居れり。和服の如きも概ね此類なり。彼は二種か三種以上に和服を持たず、同じ物を巧みに着廻はして、幾種もある如く見せかくるなり。殊に最も可笑しきは、彼が入浴嫌ひの一事なり。彼は早くも一ヶ月、普通ならば二ヶ月、長くば三ヶ月も入浴せず、時々身體を洗拭して垢除するを常となす。是を以て彼は、一見奇麗なるが如しと雖も、善く注意して見れば、首の廻りに垢を蓄ふること珍しからず。人をして其案外なるに驚かしむ。林田龜太郎の説によれば、『金を使つて遊ぶ者は粹人ならず、金を使はずして遊ぶ者が眞の粹人なり』と。此意味を以てすれば、赤司の如く、金を使はずして衣服を着、殊更に修飾せずして綺麗に見ゆる者が、眞のハイカラなるやも知るべからず。然れども普通の所謂ハイカラとは、根本的別種の模型にして、寧ろ大なる蠻カラなり。

然りと雖も、世の中のこととは、理にあらずして勢なり。假令、如何に間違つた觀察にもせよ、多數が之に與みせば、天下の公評となる。而して一度び公評とならば、少數が如何に辯ずるも効果なく、延いては本人の迷惑となる。赤司が『まだ若し』といは

れ、『ハイカラなり』といはるゝは、彼に取つては大なる冤罪たるを疑はずと雖も、此見當違をして勢力を得せしむれば、彼の昇進の妨となる。彼にして若し我輩の言を諒とせば、今少し老ける工夫をなさざるべからず。茶褐色の帽子を棄て、黒高を用ゐ、角薙りを止して左右に分け、大島飛白の代りに、錦絲御召か若くは高貴織などを用ゆるは其一法ならん。

男は若く見えて利益を受くる時おれども、そは極めて稀有の場合にして、損をする方遙かに多し。我輩之を赤司に就て一例を示さん。

我輩の西洋に行く當時、赤司は小松原の秘書官なりき。小松原は赤司の容貌若きを見て、青二才なりと速断し、新參者を遇する態度を以て彼れに蒞みき。斯は小松原の不明の致す所なりとはいへ、又、赤司の容貌の招ける損耗ならずとせず。

青二才を以て遇せられたる赤司は、心中甚だ不平なりしものゝ如く、私かに逃げ出しの決意をなし、黒澤次久を薦めて秘書官に就かしめぬ。小松原は當時黒澤の人物を未だよく知らず、顔だけ見た所では、赤司と略ぼ同年輩の如くに思はれたれば、實際の技倆も亦伯仲するものならん位に思惟して無難作に承諾せり。然るに實際に使

用して見れば、其技倆著しく懸隔し、到底同日を以て語るべきものにあらざりしが故に、俄かに赤司が惜しくなり、我輩の出發當時迄は、尙ほ依然として赤司のみを偏用し、黒澤を用ゆることは、極めて稀なる場合に限られたりき。

黒澤は大學時代の秀才にして、將來極めて有望の人なり。牧野伸顯はよく彼を愛用したりと傳聞す。蓋し事實に近からん。我輩亦彼の要材なるを確信し、今後の修養如何によりては、必らず將來あるを確證す。然れども、當時に於ては、年齢未だ若く經驗大に乏しかりき。秘書官として赤司に及ばざりしは當然にして、毫も彼れの恥辱にあらざ。

凡そ秘書官の職は、三箇の意義を含有す。一は大臣の參謀たる地位にして、二は官房の秘書課長たる地位、而して三は大臣の執事らしき地位是れなり。一人にて此三個の地位を均分に有する者は稀にして、大抵の人は何れか一方の性質を多量に帶ぶ。一の性質を多量に帶ぶるものは、純然たる政務官にして、大臣と主義政策を同じうし、進退を共にするを以て原則となす。此の種の秘書官は省務の實際に通ずるよりも、寧ろ政治的識見あるを理想とし、大臣に獻策し、其施設を翼賛するを任務とす。故に

若し其秘書官にして才幹手腕に富まば其勢力オサ／＼省の内外に振ひ次官をして殆んど虚位を擁せしむ。伊東巳代治原敬加藤高明等の秘書官時代の如きは是れなり。此等の數者は事實に於て大臣の權力を代理執行し且つ又大臣學を最もよく研究して他日飛躍の基礎を作れり。二の性質を最も多量に帶ぶるものは純然たる事務官にして大臣と進退を共にせず大抵は參事官書記官の中より兼任す。此種の秘書官は政治的識見よりも寧ろ省内各課の事務に通曉し人の經歷性格系統等を諳誦し秘密を守り公平の念慮に富むを理想とす。蓋し省務の總べては悉く大臣の裁決を要するものなるが故に秘書課長にして各課の事務に通ぜざれば大臣は一々次官を呼んで其意を聞くか然らざれば旨判を捺すより外に仕方なく又秘書課長は人の任免事務を司るものなるが故に秘書官にして公平の念慮を缺かば忽ち怨恨の燒點となりて大臣に迷惑を及ぼすことは少からざるが故なり。三の性質を最も多量に帶ぶるものは所謂三太夫と稱するものにして秘書官中の最も下等なるものなり。此種の秘書官は善く氣の附く如才なき人を以て理想とし巧みに大臣の身の廻はりを世話する人たるを要するのみならず又大臣の令聞にも氣に入る人たるを要す。

當時の文部省は大臣と次官との間餘りに親密なりしが故に如何なる人物が入つて秘書官となるも一の性質を多量に帶ぶる秘書官たるは頗る難し岡田以上の人物が秘書官たらざりし限りに於ては否な絶對的に不可能なりしと謂ふも過言にあらざるなり。

赤司が秘書官を勤むるとも小松原の參謀たることの不可能なるはいふ迄もなきことにして赤司自身に於ても斯くあらんことを希望するものには斷じてあらざりしならん。然れども二の性質を多量に帶ぶる秘書官としては赤司は有數の適材にして省内に比肩するもの恐らくあらじ。強ひて求むれば松浦鎮次郎が唯一對手なりと雖も秘書課長としては赤司の方が上ならん。赤司自身に於ても亦私かに秘書課長の秘書官として小松原に盡くさんことを希望し居たるに違ひなし。然るに實際の事實は之に反し小松原は三の性質の秘書官として赤司を遇せんとしたる形跡ありしに似たり。

勿論小松原は平民主義の人にして簡易生活の實行者也。假令匹夫より身を起したりといふとも大臣になつて直ちに驕慢の色を表はすが如き一般成り上り者の類

に非ず。従つて赤司に向つて三太夫的秘書役を要求し、若し之に應ぜざれば、不快の念を起すが如き、殿様大臣には斷じてあらず。然れども彼の令閨は如何。我輩未だ其間の消息を詳にせずと雖も、種々の事實に依りて想像するは、業、必らずしも無用にあらず。

小松原は曾て地方官を歴任せり。地方事務官の知事に對するは、恰かも神様に對するが如く、知事の内室に對しても、町重に至らざるなく、殆んど三太夫に等しき奉仕をなす。小松原の令閨は恐らく斯種の経験を嘗めたることあらん。想像を廻らす餘地は此にあり。

非常に學問あり、創見に富む女性ならばいざ知らず。其他一般の女性にありては、必らず從來の経験のみによりて後來を推し、時と所との間に、如何程の差違あるやを顧みずして、全般を一律す。これ女性の通有性なり。

小松原の令閨が如何なる人なるやは、我輩固より知らず。従つて赤司を遇するに如何なる態度を以てしたるやを知り得る道理なし。然れども地方事務官に對すると略ぼ同一の態度を以て之に莅みたることなきやは、我輩の私かに疑を挿む所なり。

地方事務官と中央のそれとは、人物、境遇に於て格段の相違あり。之を同一に待遇せば、必らず失敗す。士心を得る所以にあらざるなり。

『秘書官に三種あり、赤司は其中の何れに屬するや』といふが如き問題は、堂々たる男子に於ても解らざる人極めて多し、況んや女性に於てをや。小松原の令閨が之を知らざればとて少しも恥にはあらず。我輩亦、彼女を非難せんが爲に、此言をなすものにはあらず。我輩は唯だ赤司の逃げ出し一件に關し、なるべく多くの理由を語らんとして、言遂に此に至れるものに外ならず。

小松原は依然として赤司を愛用し、容易に手放すべき氣配を見せざりしと雖ども、小松原の令閨は赤司よりも黒澤を愛好して之を偏用せり。此一事亦、我輩の想像資料たらずんばあらず。

黒澤は赤司に比すれば、著しく後進にして、經驗乏しく、二の性質の秘書官としては、當時未だ十分の手腕を發揮する域に達せざりき。従つて小松原の愛重を受くること尙ほ難かりしなり。然れども、秘書官として、未だ十分ならざることは、應がて三の性質の秘書官として赤司よりも適任たる所以なり。年齢若く、新參にして地位低か

りしが故に、衷心では少々厭やだと思ふことにも、それを態度に現はさず、御無理御道理で聽従する丈の忍耐を有す。これ小松原の令閨に受け善かりし所以なり。黒澤とても、爾來數年を経過したるが故に、今日に於ては、既に態度に多少の變化あるを認むるに難からず。

我輩は赤司が秘書官辭任を申し出でたる眞因を確知せず。然れども彼の年若く見ゆる一事が、小松原及其令閨に安く見らるゝ主因となり、延いて辭任申出での原因となりしことを想像せずんばあらざるなり。

元來若く見ゆる赤司をして一層若く見せしむる彼の服装は赤司自身の好みによりて作らるゝか、將た赤司の令閨の見計らひによりて作らるゝか、我輩頓んと之を知らず。然れども想ふに赤司は自ら服装を八ヶ間敷いふ方にはあらざるべく、大抵は令閨の宛てがひ扶持に甘んずる方の人ならん。然らば赤司を格外に若く見せしむることに就ては、令閨も半ば其責任を負はざるべからず。

彼の令閨を見るに、容貌美にして、肉着き善く、態度も言葉遣も兩つながら鷹揚にして、流石に高官の令室たるべき貫目を具ふと雖も、其姿に於ては、華族女學校といふが

如き無類の野暮學校の出身なるにも拘らず、何處やら下町式の粹味を有す。其服装は、年齢に比して甚だ地味過ぐるものを着用し居れりと雖も、着[○]な[○]し[○]巧みにして、衣服の落ち付き甚だ善し。彼女は疑もなく衣服の黒人なり。赤司の服装が恐らく令閨の好みによりて作らるべしと推測するは、必らずしも全くの見當違ひにはあらざらん。

我輩、曾て赤司の令閨と語る時、令閨良人を評して、『モ一、十四歳にもなる娘がおりますのに……』といふ。ありますのに……の次の句は何なりや、『若く見られて困ります』の意か、將た『呑氣で困ります』の意か、何れにも取り得らるゝ所に餘韻ありて趣味一しは深し。上の半句のみを語りて、下の半句を言はず、結末の意義を我輩の想像に託したる所、彼女は當さに一個無筆の文學者と謂つべし。

赤司、其後我輩に問うて曰く、『僕の妻は僕をドウ思つて居るだらうネ』と。何う思つて居るだらうネ……の上半句は何なりや、『僕が外で屢々酒を飲むのを……』の意か、或は『……のを……』の意か。彼は下半句のみを語りて、上半句を言はず、以心傳心を以て發問の意味を知らしめんとす。其答辯の困難なる、令閨の下半句を言

はざるの比にあらず。一方を文學的とせば、他方は禪宗の問答的なり。彼等二人が對座せば、謎の懸け合ひの如き話し振りにて、用を辨ずることも珍しとせざるべし。何は兎もあれ、赤司の若く見ゆるは、如何に考ふるも彼の爲に損なり。彼及彼の合間にして、今少し彼の老けることを工夫慮せば、今より四五年の後、世の凡眼者流を一驚せしむる程の大發展あるを疑はず。

松浦鎮次郎は大學時代秀才中の秀才にして、事務官としても、各省を通じての第一流なりと公評せらる。學識あり、落ち着きあり、相當に喰へざる所もあり。殊に頭腦の明晰と成功に急ならざる點とに於て、最も推賞すべき事由を有す。

彼の競争者としては、農商務省に岡實あり。大學同期の卒業にして松浦は二席、岡は三席なりき。然るに如何なる不運なりけん、卒業して官途に就くや、岡は終始先登に立ちて松浦を抜き、官等の上に於て、常に一等を先んじぬ。歲月にすれば、滿二年の駆け抜きなり。然れども松浦少しも急らず、『將來の爲に』といふ考を起して、決然海外に留學し、自ら進んで、昇進遅延の二重塗りをしぬ。成功に急なるもの、到底なし得る所にあらずるなり。

岡も西洋を歴訪したることありと雖も、そは出張にして留學にあらず。『御用有之西洋各國に差遣被仰付』の辭令の下に西洋を歴訪するは、在官の儘の出張なるが故に、官等昇進に何等の影響を及ぼさざるのみならず、多額の旅費、手當等の支給を受くるが故に、内地に居るよりも却つて面白し。少くとも骨休みするだけの效能あるを疑はず。然れども『何々研究の爲某々國に留學を命ず』の辭令の下に西洋を歴訪するは、其間本官を休職となし、官等昇進を中斷することを意味するが故に、官吏の職にある人にとつては頗る苦しきのみならず、在外中の費額は、嚴に千八百圓に限定せらるゝが故に、官命出張の支給額に比すれば、約六分の一の少額なり。従つて面白き生活をお営むことも、骨休みすることも出來ず、マゴ／＼すれば私費の補充さへも餘儀なくせらる。何れの點より見るも、不利益千萬と謂つべし。

然るに松浦は、此利益を氣にかけず、唯だ修養、蘊蓄のみを志して、西洋に留學し、約二年にして歸朝せり。歸朝して見れば、岡は既に三等官に昇りて、勅任候補の地位におり、松浦は尙ほ五等官にして、其上に松村、田所、赤司の三者嚴然として控へたるが故に、勅任候補たるには前途頗る遠かりき。然れども、松浦は尙ほ且つ急がず、唯だ讀書と

事務研究とに心身を委ねて平然たりき。

岡は夙に三等官に昇りたりと雖も、三等官の上の黒鐵一重は、容易に越せず、同じ所に三四年まごつき。此間に松浦歩度を延ばして、岡に追ひ着き、我輩の西洋出發當時に於ては、兩者同等の地位に坐われりき。蓋し大學卒業以來始めて見る現象ならん。

然るに、其後農商務省に官制改革あり。商工局別れて二箇となり、商務、工務獨立す。岡、則ち擧げられて商務局長となり、再び松浦に先鞭を着く。官等より云へば一等の違ひなりと雖も、此一等は勅任と奏任との別れ目にして大問題なりき。蓋し停年さへ來れば、追ひ着き得る性質のものにあらざるが故なり。

聽つて文部省の事情を見るに、圖書課は局となりて、渡邊其長となり、田所も松村の後を襲ひて普通學務局長となり、赤司は虎の門に行きて維新史料編纂會事務局長となれり。茲に於て、松浦の順番漸く來り、先頃勅參に進みて、再び岡に追ひ着けり。然りと雖も勅參は法律的意義に於てこそ、局長と同等なれ、政治的意義に於ては依然として局長の下にあるが故に、未だ以て十分の満足を表するに足らずとす。

然らば松浦が局長となり、法律的にも政治的にも、全然岡と同一なる時は何時ぞや。我等を以て見れば、此文公表の後、幾月も經たざる時にあり。即ち本期議會終りて、殘務片附く時、彼れ必らず進んで専門學務局長の地位に坐わるべし。人或は赤司還りて『専門』に入るべしといふものありと雖も、此觀測恐らくは當らじ。赤司は參事官時代に於ける修養の關係上、實業教育に就ては相當の趣味も抱負も有すと雖も、専門學務局の事務に就ては、何等の趣味も野心も有すまじ。専門學務局は大學や専門學校と直接に交渉する所なるが故に、動もすれば問題を惹き起し易く、極めて遣り悪くき所なるのみならず、仕事の行き榮えもなき所なれば、赤司が現在の地位を棄て、二ツ返事で『専門』に入るべしとは、我輩到底想像するを得ず。勿論、赤司は年齢に於てこそ松浦より若かけれ、官歴に於ては約一年半の先輩なるが故に、若し直系局の『専門』を傍系局の『維新史料』よりも右翼なりと斷定せば、赤司が復歸して『専門』に入り、松浦が出て『維新史料』に行くべきを至當の順序とすと雖も、赤司の聰慧なる恐らく此配置に従はざらん。彼は疑もなく腹に一物を有する男なり。

人或は又田所の如才なきを見て、彼を『専門』の適任者となし、必然彼を轉任せしめ

て、松浦を其後任に坐らすべしといふと雖も、此推測は赤司の復歸を云々するよりも一層愚劣にして、我輩絶對的に之を取らず。

要するに『専門』は松浦のものにして、十中の九分九厘迄外れずといふを適評とせん。特に任命を數ヶ月延ばすは、一に會計課長の後任問題あるが爲に外ならず。議會開期中若しくは閉會直後に彼を會計課長より抜けば、二進も三進も動かざること多言を要せずして明かなり。これ彼が今尙ほ勅參の地位に繫留せらるゝ所以也。

松浦は、我輩が最も興味を以て研究せんと欲する一人なりと雖も、不幸にして、今日迄交遊を得ず。熟らゝ、彼の人物を研究する機なかりしを憾む。澤柳政太郎は我輩の『文部省高等官總評』を見て、『藤原の松浦を知らざるは遺憾なり』と評したる由曾て曾根金僊より傳聞せり。岡田良平も松浦を賞揚し、我輩に向ひて、善く觀察すべきを勧めたり。田所も亦再三我輩に勸めて松浦を觀察研究すべしといひ、『彼を知らずして文部省總評をなすは失當なり』と迄言明せり。

斯の如く、多くの先輩が異口同音に推賞する一事に徴せば、松浦の人物手腕は、所謂『世の定評を有す』るものと謂ふべし。我輩後日必らず、大々的に彼を論評紹介する

時あらん。

以聞らく、松浦は實コウ主義の人なりと。實コウの字は、行なりや、將た效なりや。我輩未だ之を知らずと雖も何れにしても意味深長にして甚だ面白ろし。而して之が公的生涯の事にあらずして、隠私生活の事なりと聞くに及んで趣味愈々深し。彼は焚樂もせず放屁もせざる人の如く見ゆると雖も、其實仲々偶には置けぬ人物なりと知るべし。

松浦の實コウ主義なるに引き換へて、全く非實コウ主義なるは赤司なり。赤司と松浦とは常に公生涯に於ける恰好の取組みたるのみならず、又私生涯に於ても幾多の對照點を有するものに外ならず。

赤司は省中第一の通人にして、又粹界の黒人なり。彼は屢々飲み、屢々遊ぶ。然れども彼の遊ぶは、昔の旗本侍が趣味の爲に遊ぶが如く、綺麗サツパリとして邪念なし。松浦の遊びは恰かも大阪商人の遊びの如く、何等かの實益を收めずんば已まざるもの、如し。一は西園寺侯の遊びの如く、他は桂公の遊びの如し。一は女の爲に氣前を示し、他は己れの爲に女を招くなり。若し夫れ、一見よく遊ぶ人の如く想はれて、其

實少しも遊ばざる者を求むれば田所美治なり。彼は昵近者と對酌することにてもあらば、盛んに美人を談じて四邊を壓倒し、隨分露骨な言辭を弄して、際どい所迄肉迫し、これが通俗教育の親玉かと呆れはてしむる程の大口を利くと雖も、其實遊びなどは殆んど知らざる野暮人にして、謂はゞ品行方正の人物なり。耳學問の通人なり。然れども、田所の遊ばざるは、資性謹嚴なるが爲にはあらず、金錢に吝なるが爲にもあらず。彼は猛烈なるサイハロジストなるが爲ならん。

田所の令聞は、類ひ稀れなる美人なり。我輩未だ彼女の如き天然の美貌を見ず。殊に田所が赤司程の美男子ならざる丈、それ丈令聞の美貌は、一層目立ちて見ゆるなり。然れども其起ち居の型と衣服其他の嗜みとは、全然麴町式にして、下町風の趣味少しもなし。

筆、稍々岐路に入れりと雖も、斯は松浦の實、コウ主義より想ひ着いての餘興に過ぎず。松浦にして若し實、コウ主義を有ゆる方面に擴大し、讀書に事務に、着々として修養を積まば天賦の優秀と相俟つて、將來必らず大成せん。(此項四十五年二月稿)

(五) 黒澤次久と山崎達之輔

黒澤、山崎の兩者に對しては、我輩殆んど交識なし。従つて深く其人物を知らざるを告白す。我輩教育記者たること此に年ありと雖も、未だ曾て一度も新聞種を取らんが爲に、文部省を訪問したることなく、高官連に面會を求めたることも殆んどなし。我輩は唯だ時事の形勢を知り、大勢を觀測せんが爲に文部省を屢々訪問したるのみ。蓋し日々の出來事は通信記者に一任して可なるべく、新聞記者は今一段の高見地に立ちて、一定の見識の下に教育を評論し、當局に建議忠告し、或は教育社會を指導すべきものなりとの抱負を當初より懷有し居たるが爲に外ならず。

岡田、澤柳以下多くの教育行政家に面識を有すと雖も、此等は主として個人的關係に於て然るにして、新聞記者對文部當局者の關係に於て然るにあらざり。我輩が若し新聞種を取る爲に文部省を訪問する程の忍耐を有する男たりしならんには、新進少壯の高等官は勿論のこと、重なる屬官連にも大抵交識を有すべき筈なれども、事實全く然らざりしが故に、黒澤、山崎の兩者にも今日迄交識を有するに至らざるなり。従つて茲に論ずる事が、極めて大摺みな、粗略の觀察に過ぎることは、我輩自らに於ても之を認むるに吝ならず。他日、交識を得たる時、精到綿密の評論を物して、江湖に紹介

する機会を有すべし。

黒澤は周布公平の女婿にして、三十八年卒業の法學士なり内務屬より文部省參事官に轉任し、今、祕書課長兼文書課長の職にあり。彼は少壯事務官中の最古參者也。

山崎は京都大學の出身にして、岡田門下の秀才なり。黒澤と同年の卒業生なれども、黒澤は東大の出身にして四年課程を履み、且つ初めより東京に奉職したるに反し、山崎は三年課程時代の卒業にして、且つ初め臺灣總督府に奉職したるが故に、萬事につけて黒澤より一年後の卒業として取扱はれ居れり。斯は甚だ謂はれなきことなれども、其處が御役所なれば是非もなし。

然れども頭腦は非常に明晰にして、理解極めて鋭く、且つ職務に熱心なるが故に、上司の受け大に善し。上司若し彼に問題あるを告ぐれば、彼れ自宅に歸りて夜分研究し、翌日來つて上司に審議を請求す。蓋し己れに準備あるが故なり。彼は上司に督促せられて嫌や／＼ながら陪審するにあらずして、自ら上司を督促して宿題の審議を迫るだけの態度を有す。其熱心大に掬すべし。

彼にして若し今の儘に進まば、其年ならずして、大に發展せん。今日既に第二の松

本順吉たるの觀あるを認めしむ。然れども、彼の將來の爲よりいへば、第二の松本たるを以て耳んずるよりも、松浦鎮次郎を標的として進む方が利益なり。蓋し松本は參事官の切れ者なりしと、雖も、渾然として將來の器たる點に於ては、松浦の方が上手なるが故なり。

黒澤も頭腦明晰にして、今後の修養如何によりては、必らず將來あるべきこと前既に述べしが如し。然れども彼を好まざるものは、彼を評して『神經質なり』といひ、或は成功に急なりといふ。我輩其酷評たることを信ずと雖も、然かも斯の如き風評をして勢力を得せしむるは、決して彼の爲に利益にあらざるが故に、今日に於て、努めて此誤解を一掃することに修養せんことを勧めずんばならず。

職を官吏に奉じて、官等の昇進を願ふは當然のことにして、少しも笑ふべきにあらず。後進にして先輩の庇護同情を得て、大に發展を圖らんとするも、至當の心掛けにして、毫末も卑しきことにあらず。然れども官等の昇進を願ふといひ、先輩の引立てに頼るといふも、畢竟程度と方法との問題なるが故に、餘り極端に走らば、卑劣に陥りて識者の同情を失却す。苟も有望の身を以て官海に投じたる以上は、何處迄も大成

する考にて修養し、少くも勅任官出來得べくんば親任官迄昇らんとする次の野心と抱負とを有すべし。而して此野心と抱負とに現實を伴はしめと欲せば、須らく奏任官階級に於ける官等昇進の遅速の如きは、全く之を眼中に置かざること、恰かも松浦のそのの如きものあるを要すとす。

此點に於て、我輩は瀬戸虎記に隠れたる一美徳あることを想はずんばならず。瀬戸は視學官の首席にして、第一高等學校教授を兼ね。本官四等兼官三等なるが故に、兩者とも行き詰まりにして、轉職せざる限りは、今日以上に發展すること不可能なり。而して發展の途は直轄専門學校々長たるより外になし。確か四十一年の頃なりしと覺ゆ。長崎高等商業學校に騷擾起り、形勢頗る不穩となりし時、瀬戸乃ち選ばれて鎮撫役となり、文部省より派遣せられて長崎に行き、一刀兩斷の處置を以て、旬日の中に、手際よく之を鎮めたり。然れども鎮撫後の新校長任命は、最も慎重を要するのみならず、頗る難役たるを以て容易に人を得ること能はざりき。是を以て、文部の上司彼を擧げて校長となさんと欲し、岡田も、眞野も、福原も、田所も手紙と電報とを以て、彼に校長承諾を慫慂し、『君にして若し之を承諾せば、直ちに勅任官に昇級せしむべき

旨』をも傳へたり。然れども瀬戸斷じて之に従はず、折角の御厚意は忝なけれども、予不幸にして商業教育に何等の定見を有せず、定見なきに校長たるは、予の良心の容さざる所なりと述べて謝絶せり。當時彼は既に兼職の方に於て、三等官たりしが故に、校長となれば直に勅任たるを得たるべしと雖も、然らざれば依然として本職四等官兼職三等官に繁留せらるゝと、猶ほ現在に於けるその如きものありたりき。然るに彼れ唯だ定見なきの一事を以て、可惜、勅任の地位を棒に振り、自ら進んで行き詰りの奏任階級に留まれり。或は之を以て彼が『唯だ東京に留まり度が故に謝絶したる也』と惡評する者ありと雖も、我輩之を取らず。蓋し瀬戸は年既に不惑を越え、空疎なる都會熱に冒さるゝが如き血氣の青年にあらざるが故なり。彼にして若し成功に急ならば、先輩の勸誘あるを幸に、屑く現職を棄て、勅任校長となりたるべきを當然となす。然かも彼れ終に之に従はざりしは、成功に急ならず、徐ろに修養を積んで、將來の大成を期せんと欲したるが爲に外ならざるなり。彼若し今の儘に進まば、今後二三年を経過したる時、本職に於て三等官となり、五百圓の増俸を受け、三四年前に於ける野尻精一と同一の地位に昇りたる後、機を得て、第一高等學校長にでも轉ずる

ことあらば、彼が長崎に行きて早く勅任となりたると、何れが得策なるや成功なるやは、長き一生涯の歴史より觀て、自ら明かなるものあらん。而して之を實現すること必らずしも難きにあらざらん。我輩は彼が成功に急ならず、着眼の案外高きを想ひて、彼の人物を賞揚す。

黒澤を好まざる者が、彼を稱して成功に急なりといふは、如何なる理由に基くものなりや、我輩頓んと之を知らずと雖も、想ふに、恐らく彼が早く洋行せざりしことをいふならん。果して然らば一理なきにあらざると雖も、理由は極めて薄弱なるを認めずんばならず。

黒澤の西洋に行かざるは、文部省の都合上、彼に留學を命ずること能はざる爲なるか、黒澤自身が官等昇級の遅るゝを嫌ひて留學することを欲せざるが爲なるか、或は又彼が暫時妻君と別離することを苦痛とするが爲なるか、三者の中其一を出でず。然れども未だ昇級遅延を悞るゝが爲めなりとの證據存在せざるが故に、彼の洋行せざるを以て、直ちに彼が成功に急なるが爲なりといふことを得ず。我輩は彼の爲に一部人士の妄評を破す。

山崎には此種の妄評だもなし。彼は身體の丸々して頑骨らしき所なきが如く、容貌に髭なくして可愛らしき所あるが如く、心的状態にも圭角少くして、如何なる人にも、如何なる方面にも、其受け大に宜しきものゝ如し。強ひて彼の受け悪しき方面を求むれば、彼の部下にありと雖も、部下の彼を好評せざるは、彼が餘りに部下を督勵して懈けしめざるが爲なり。世の所謂上に『卑屈して下に威張る人』の資質あるが爲にはあらざるなり。

彼の文書課長たるや、常に部下の勤惰に注意して、事務の進捗を圖らしめ、寸分も懈けしめざることに意を用ゐたりといふ。例へば正規時間に出勤せざる者にて、もあらば、それを面前に呼び來りて叱責し、翌日より早く出勤すべき旨を嚴達するが如き是なり。

忠實精勤熱心は、彼の天性にして一大美德なり。督勵督促は、其天性より出づ。宿題ある時、上司に迫りて審議解決を促すも之が爲なり。下部の遅刻を叱責するも之が爲也。上司は此熱心を彼の長處として愛用し、部下は此熱心を以て彼を不評する種となす。故に彼の部下に受け宜しからざるは、彼を貶下する理由とならずして、寧

る彼を賞揚すべき理由となる。

部下をして好評せしめんと欲せば、彼等をして遊ばしめ、懈けしむるに若くはなし。天下何ぞ斯の如く容易なることあらんや。然れども山崎敢て之をなさしめず、自ら率先して正規の時間よりも早く出勤し、身を以て模範を示しつゝ、部下を鞅鞅して、事務の進捗を圖る。我輩は彼が少壯の身を以てして、尙ほ且つ部下の不評を眼中に置かざる勇氣と態度とを推賞す。

黒澤は風彩堂々、押し出し頗る揚る。顔の輪廓もよく、背も高く、好男子の部類に屬す。信州人中稀に見る體容なりといふも過言にあらざり。

信州出身にして、教育界に名を知られたるもの甚だ多し。然れども未だ風彩の優れるもの殆んどあらじ。

元老の辻新次も、伊澤修次も、中老の澤柳政太郎も、風彩は善き方にあらず。湯本武比古も、樋口勘治郎も、風彩に於て及第點を取ることに難し。而して代議士の小川平吉も其御連中たるを免れず。澤柳のみは、背の丈稍々高し雖とも、他の者は背迄も低し、黒澤は此等の數者何れに比するも、風彩の劣らざるを見る。

然れども信州人は、概して貯蓄の念に富み、財産を作るに妙技を有す。澤柳と樋口とは此中にありて例外をなす。就中樋口に於て、最も甚だしき例外たるを見る。彼は貯蓄の妙手にあらずして、借金の天才といふも過言にあらず。彼れ今や逐鹿場裡に出馬して、輸贏を一舉に決せんとなす。我輩友人たる關係に於て、彼の當選を希ふと雖も、四圍の情勢より打算するに勝算甚だ疑はし。蓋し彼が貯蓄の妙手にあらずるが故なり。彼にして若し運動費一萬を有せば、天下の形勢未だ俄かに判ずべからず。黒澤は、風彩に於て、信州人の例外をなすのみならず、金錢上の事に於ても、亦例外をなすものゝ如し。彼は遊蕩するにもあらず、交際を派手にするにもあらずと雖も、斷じて金錢を吝みて貯蓄に熱注する方にはあらず。彼は千圓の年俸を受くる時、早く既に家賃三十圓の家に住まひ、年俸二千二百圓の今日に於て、六十餘圓の堂々たる邸宅を借る。書畫骨董も相當に持ち、其生活仲々に贅澤なりと聞く。借金を有せざるべきは、我輩の疑を容れざる所なりと雖も、貯蓄は恐らく之を有すまじ。

山崎は風彩に於て黒澤に及ばず。殊に容貌の黒澤よりも二ツ三ツ若く見ゆるは、押し出し上、甚だ不利益なりといはざるべからず。彼、本年冬より政府委員として議

會に立つべき任務を有す。宜しく今に於て、外貌を老けて見せしむる工夫を凝らし
て可なり。

我輩未だ山崎の私生涯を熟知せずと雖も、其生活は甚だ質素なりと聞く。彼は公
私共に地味にして堅實なり。華麗雄壯の色彩に乏しと雖も、着實にして一點輕浮の
俦を有せざるなり。これ一に彼の天賦に基くこと言を俟たずと雖も、又一には彼の
師岡田良平を學ぶ所あるにはあらざるか。

彼は烟草を喫するのみにして、酒も餘り飲まず、美人も買はず、唯だ公務に精勵し、讀
書に努む。強ひて道樂を求めば、本郷座の雲右衛門を聞く位が關の山ならん。

我輩、今春戸野周二郎と携へて、本郷座の雲を聞く。偶々山崎の隣席にあるを知つ
て、彼は思ひ掛なき娛みあるを知れり。

戸野も見附きに似合はず、趣味を解するが如しと雖も、有體にいへば、彼は彼の妻君
の多趣多方なるに及ばず。時として「雲と、奈良丸」との比較評をなし、他の藝術を批評
することありと雖も、其口吻甚だ素人嗅く、到底妻君の敵にあらざることを想はしむ。
妻君は女高師出身にして、現に中村高等女學校の長たるが故に、名を開いた丈にては、

無類の野暮人の如く想はるゝと雖も、其實必らずしも然らず。彼女が謙遜らしき口
調もて藝術を評する時、片言隻語の中にも、自ら黒人の素養あるを想はしむ。戸野の
藝術を論ずるは、恐らく妻君の受け賣たるべく、若し然らずんば、其聞き囁りたるを免
れず。

戸野は有名なる「ハハロジ」にして其熱決して田所に劣らず。然れども田所の
「ハハロジ」は隱密なるが故に、大抵の人には、知れざる事多しと雖も、戸野の「ハハ
ロジ」は正々堂々と發露するを常とするが故に、一度び遭遇すれば、何人も感知せざ
るはなし。

我輩、今春彼と久淵を敍せんと欲し、一夕、某亭に來らんことを需む。彼れ之を固辭
して曰く、『西洋料理ならば何時にても喜んで行くべし。然れども待合とか日本料
理の粹な所とかいふものならば、僕、絶対に行くを得ず。僕は然る場所に於て飲食す
る事に寸毫の趣味愉快を感せず、寧ろ大なる苦痛を感ず』と。我輩乃ち讓歩して、西
洋料理に招かんことを彼に通ず。然るに彼れ再び之を斥けて、『僕、飲食することよ
りも、妻と共に本郷座に「雲」を聞かんことを好む。君之れにつき合へ』といふ。我輩

其言の可愛らしきと、彼の見掛によらぬ優しき性格とに感嘆し、直に筆を執つて、「我輩、後學の身先輩サハハロジハの實例を觀察して後日の参考に資せん」と返報す。今春、彼及彼の令聞と共に「雲」を聞きたるは之が爲なり。

山崎の「雲」を聞くは、唯だ耳休めの爲か、將た趣味の爲か判明ならず。然れども、妻君を携へず、友人を伴はず、唯だ一人來れる一事より推せば、彼れ恐らく相當の趣味を有すと見るを可なりとせん。果して然らば、彼は平民藝術の鑑賞家にして、黒澤の書畫骨董を愛する貴族的趣味に正反す。

黒澤と山崎とは地位年輩を均しうし、互に恰好の競争者たるべき關係にあり。文部省に來れる時期よりいへば、黒澤の方が一ケ年程古しと雖も、唯だ此一事のみによりて、黒澤は決して意を安んずること能はざるべし。何となれば、山崎は頭腦の明晰と、論理の正確と、理解の敏捷と、職務に熱心なるとの四點に於て群を抜き、上司の氣受け甚だ宜しきのみならず、今日既に文書課長の職を経て、會計課長の要職に座するを以てなり。

會計課は、以前、局たりし程の所にして、大臣官房の課中にありては、最も重要の一課

なり。今の次官福原は、曾て會計課長より専門學務局長に進み、松村茂助も曾て此課より普通學務局長に進みたり。而して最近の松村鎮次郎も亦此課より専門學務局長に進みたる世の知る所の如し。兎も角此課が省中のインテグラル、パートにして、常に局長の候補者を以て其課長に任ずるを從來の慣例としたる事争ふ可らず。

然るに山崎は今課長の椅子にあり。これ黒澤の最も注意を要する一事と謂ふべし。黒澤の課長たる文書課も重要な所たるは言を俟たず。彼の前任者は山崎にして、其前は赤司、又其前は田所なりき。而して田所と赤司とは此課より進みて局長となりしが故に、此の課の長にも亦局長の候補者を以て任ずといふを妨げず。

我輩常に聞く、參事官會議の時、先輩の最も傾聽する意見を數次吐くは、山崎なりと。是れ或は事實に近からん。然れども之を以て直ちに黒澤が山崎に劣れりと斷ずるは早計なり。蓋し意見を吐くと否とは、人の性質によること多く、意見の有無とは自ら別問題のこと多きを以てなり。

勿論、山崎は、松本、松浦と畧ぼ同型の人にして、頭腦極めて緻密なるが故に、參事官としては、或は黒澤の上なるやも知れず。然れども參事官は、役人社會の一小部にして

全部に非ず。参事官として劣ればとて、直に役人と稱する廣き意味に於て、全部劣れりとの結論を出すこと能はざるなり。参事官に適せずして書記官に適する者もあれば、参事官、書記官の兩者に適せずして局長となりて俄かに名聲を擧ぐる者もあり。参事官にも書記官にも適したれども、局長となりて大に味噌を附くる者もあり。人各々適處あるを免れず。

我輩は、黒澤が天賦に於て、山崎に劣れりとは思はず。若し假りに劣れる所あるとすれば、そは恐らく熱心と努力との足らざる一事にありといふの外あらじ。彼れにして若し山崎の勁敵なることを覺りて奮勵努力せば、將來の發展自ら其時あるを疑はず。

(六) 栗屋謙と武部欽一と大岡叢

此三者は新進中の新進にして、我輩の在外中又は歸朝後に於て文部省に入りたる人達なり。従つて黒澤、山崎に對するよりも交遊一層淺く、其人物を觀察する機殆んどこれなかりしを憾む。殊に三者共閱歴少く、評論の材料なきを最も遺憾とす。

栗屋は、四十年卒業の東大法學士にして優等生なり。一見したる所、態度容貌、稍々

ユーボー式の觀ありと雖も、頭腦は極めて明晰なりと聞く。彼、今、實業學務局附の参事官たり。武部は翌四十一年卒業の法學士にして、優等生にあらざりしと雖も、優等生の直ぐ次の席順を以て卒業したる者、百人中の十五人目位の所ありしが故に、成績は先づ上の部といふべし。彼、今、普通學務局附の参事官たり。

大岡叢、『シゲル』と訓ず。『クサムラ』と呼ぶ通人ありと雖も、人名に、『クサムラ』は少々可笑し。彼は武部と同期の卒業にして、今、『維新史料』の書記官たり。

栗屋と武部とは恰好の取組たり。學校の成績に於ては、栗屋の方が上にして、出身も亦一年古しと雖ども、此一事未だ將來を卜するに足らずとす。

武部は田所の下にあり。田所は人に使はるゝことも巧みなれども、亦人を使ふにも、妙技を有す。彼は例の如才なき態度を以て、盛んに部下をして意見を吐露せしめ、數次建議を試ましむ。而して若し取るべきものあらば、如何なる人の意見と雖も、直ちに取つて之を實現することに盡力し、取るべからざるものに對しては、自ら提議者と同等の地位に身を置いて、互に論難討究し以て、提議者自身をして提議の取るべからざる所以を覺らしむ。是を以て彼の部下は、提議の採用せらるゝと否とに拘ら

ず喜んで彼に獻策し、獲策する毎に相當の學問をなす。新進が修業するには殆んど理想的の所といふべし。武部が將來有望を以て目せらるゝは、主として彼が熱心勤勉にして、職務に勵精するが爲にも因るべしと雖も、亦一には彼が普通學務局にありて、田所の下にあるが爲にも因らざればならず。少くとも彼をして熱心勤勉ならしめたる事に就ては、田所の使ひ上手なること與つて大に力あることを認めずんばならず。

普通學務局は、文部省中、仕事の最も繁忙なる所にして、固有事務のみにては、他局よりは甚だ多し。然るに澤柳の局長時代、彼の敏腕なるに任せて、種々の附加的業務を少からず背負込み、一層繁多にしたるのみならず、田所の時代に及んで、通俗教育といふが如き厄介物を背負込んで又候繁多を加へたるが故に、今日に於ては、附加事務のみにても、殆んど固有事務に匹敵し、恰かも新一局を組織し得る程の分量に達せり。武部は、初めより此繁忙の局に配屬するが故に、唯だそれ丈にても相當教育行政に通曉し得る利便を有す。然るに彼は是に止まらず、田所の如き人使ひの上手なる局長の下にあつて其指導を受け、參事官としては松浦の如き稀觀の良行政家の下にあ

つて其指導を受く。鈍物にあらざる限りは、發達せざらんとするも能はざるなり。山崎が早く手腕を磨きて、良事務官となりしも、彼が初め普通學務局にありて松村の指導を受け、參事官として田所の指導を受けたる一事、與つて大に力あることを認めずんばならず。然るに武部は當時の山崎よりも一層好都合の境遇にあり。そは何ぞや、普通學務が當時よりも膨脹したることは其一なり。局長の田所が、當時の松村よりも人使ひの上手なるこのは其二なり。

武部は此等多くの利便の下に修練す。將來囑望せらるゝも故ありといふべし。粟屋は武部に比すれば、甚だ不利益の地位にあり。彼は實業學務局にありと雖も、實業學務局は、新進の練習所としては善良の所にならず。加ふるに局長の眞野文二は好んで、新進者の面倒を見る人にあらざるなり。

眞野は温厚篤實の君士人、老熟して圓滿なる紳士の典型を想望せしむるものありと雖も、一面學者の天分を有するが故に、俗務に没頭して新進と論議討究することを好まざるの傾向を有す。加ふるに彼は多年實業學務局にあるが故に、其所管事務に精通暗通し、殆んど他の助言を俟たずして獨決專行する力を有す。此一事、彼の人物

を賞揚する事由にもなり、且つ事務を進捗せしむる所以にもなるべしと雖も、然かも遂に新進の練習機會を少からしむることは争ふべからず。

虎の門の赤司は、今日に於てこそ、一廉の教育行政家となり、將來最も多望の一人として數へらるゝなれ、今より數年前にありては、名聲頓んと揚らず、彼の等輩松本順吉に及ばざること一等なりき。然れども是れ赤司の天賦の松本に及ばざりしが爲にはあらず。赤司は小學校時代よりの優等生にして、二十三歳の若年を以て大學を卒業したる程の秀才なれば、天賦の頭脳手腕に於て松本順吉に及ばざる道理なし。而かも終に彼が名聲に於て當時松本に及ばざるものありしは、一に彼の修養時代に於ける境遇の然からしめたる結果なりといはざるべからず。然らば其境遇とは何ぞや。松本は普通學務局に配屬して、仕事好きの柳澤の下に居り、赤司は實業學務局に配屬して、新進の提議獻策を餘り重寶がらざる眞野の下に居りしこと即ち是れなり。若し赤司をして初め、澤柳の下に在らしめしならば、松本との關係は、恰かも其反對に出づべかりしを疑はず。

赤司は歸朝後に於ても、常に祕書官のみを歴任し、教育行政などは餘り知らざる人

の如く世に誤解せられて昨今に至れり。少くとも松浦に比すれば、較々及ばざる者あるが如く世をして想はしめたり。是れ亦修養時代に於ける實業學務局が祟りしものに外ならず。次で黒澤對山崎の關係を見るも此理は同一なり。黒澤が參事官として山崎に及ばざるとの世評にして若し眞ならば、そは恐らく入省當時の配屬上大なる關係を有すべし。山崎が普通學務局に配屬したることは前述の如く、黒澤が實業學務局に配屬したることは世の熟知する所の如し。而して黒澤は、恰も赤司の跡を追はんとする者の如く、祕書官の專業となりて、既に二代の大臣に仕へたり。

我輩は今粟屋と武部とを觀察するに就て、既往に於ける赤司對松本、黒澤對山崎の關係を想起せざる事能はざる也。

武部は今の儘を以て進まば、將來必らず發展せん。粟屋は尙ほ未知數の所ありと評せらる。我輩未だ深く其人を知らずと雖も、年齢武部よりも若く、且つ頭腦の抜群に明晰なるを頼りとして、遮二無二突進せば、數年の俊、必らず大なる進境あるべきを疑はず。

世の惡口屋動もすれば、異數の立身者を罵りて、『彼れは先輩に取り入ることが巧

みなり』といひ、又は『彼は仲々才子なり』といふと雖ども、斯の如きは要するに取るに足らざる妄評のみ。官界にあると民間にあるとを問はず、苟も他に秀で、頭角を抜くものは、人の知らざる裏面に於て、人一倍の工夫修養を積みつゝあることを忘るべからず。如何なる先輩と雖も、實質なき後進を引き立つる道理なく、單純なる才子で大なる發展を遂げたる例しなし。修養努力せずして先輩に可愛がられ、單純なる才のみにて世を誤魔化さんとする程迷妄の大なるもの他にあらじ。

我輩は、粟屋に就て多くを知らず。従つて今述べたる數言は、決して粟屋を諷刺せんが爲に述べたるものにあらず。唯だ一般論として普通の道理を喝破したるに過ぎずとす。然れども、我輩は、彼れが武部と稱する有力の競争者あること、彼の現時配屬する所の實業學務局が、修養上甚だ不利益の所なることを自覺して、奮勵一番從來よりも一層努力研究し、以て除るに將來の大成を期せんことを勸めて已まず。

大岡は、我輩未だ其人を見ずと雖も、圭角少く圓滿の資質に富めりと聞く。然らば彼は、頭の人、手の人にあらずして交際の人ともいふべきか。『維新史料』は舅姑の多き所にして智慧や手腕のみにては、勤まり難き所なれば、調和の才に富み、社交的應酬

に長けたる彼の如きを以て適任とするやも知り難し。何れ赤司の眼鏡に適いて採用せられたるものならんと想ふが故に、其邊のことは、我輩之を心配するにも及ぶまじ。されど老婆心を以て之をいへば、男子三十歳にして須らく一生涯の方針を定むべく、其方針によつて宜しく態度を一定する必要ありとなす。

大岡は將來教育行政家を以て立つべき決心なりや、將た他の行政官に轉ずる決心なりや。若し他に轉ずる積りならば、宜しく六等官若しくは五等官の時に決行するを要すべく、四等官になれば既に遲きに過ぐることを認むべしとなす。教育行政官になる積りにて一ツ橋に割り込む心算ならば、少しは遅くとも差支なきやうのものなれども、これとても餘り遅くては甚だ面白からず。四等、三等の肩書を以て、試補のするやうな事より始むるも如何のものならん。

若し彼が永く『維新史料』に居りて赤司の後を襲ぐべき考にても持たば、それが一等順當にして安全なりと雖も、本人の心中は果して如何にや。赤司は今後三年、遅くとも五年を経過したる曉には、必らず現在の地位を去るならん。これ我輩の豫言して違はざる所なり。其時大岡は直ちに赤司の後を襲ぎ得るや否や、若し五年後な

らば、彼も四等官になり居るべきが故に赤司の推薦さへあれば、三等官の局長たるを得べしと雖も、若し三年後ならば如何ともすること能はず、第二代の局長に仕へざるべからざるとす。第二代の局長來らば、彼の運命は更に其局長の手中に置かるゝが故に、今より豫測するを得ず。

若し幸に赤司の後任たる得ば、祝福此上もなきが如しと雖も、更に其上の發展し難き憾みあり。赤司は局長昇任前、一ツ橋に居りて修業したるが故に、虎の門に出でたる後と雖も、何時にても一ツ橋に歸ることを得。然れども大岡は初より、『維新史料』に於て、成長すべが故に局長昇任後一ツ橋に歸るを得ず。是れ彼の爲に我輩の私かに憂ふる所なり。然れども彼に妙案あらば、我輩の杞憂は自ら無用に歸す。何れにしても徒らに悲觀するは大なる禁物なりと知るべし。御大將赤司の胸中自ら成算あるに違ひなし。

栗屋、武部の兩者には此種の心配毫もなし。天井飽く迄高きが故に、勉強と腕次第とにて何處迄も登るを得。

文部省は曾て五人の新進を揃へたる事あり。松村茂助、田所美治、松本順吉、赤司鷹

一郎、松浦鎮次郎即ち是れ也。赤司最先に西洋に留學し、次で松本行き、又次で田所行き、最後に松浦行きたりと記憶し居れり。松村はセントルキス博覽會の時、用命を帯びて米國に出張したるのみにて、歐洲に渡らず、又曾て留學したる事もなし。これ彼が官等停年に於て、約一年田所を抜き、それ丈早く局長になり得たる所以也。

今の文部省も、之に髣髴たる配置を有す。黒澤、山崎、栗屋、武部、大岡即ち是れ也。中に就て、何人が最も早く西洋に行くべきやは、官廳の都合によるが故に、強ち豫言するを得ずと雖も、我輩の推測にして誤らずんば、恐らく武部ならん。黒澤、山崎は當分本省を離る事能はざるべく、本人に於ても離るゝ事を不利益とせん。武部は、近々結婚すべしと聞くが故に、上司特別に粹を利かして一二年留學を延期せしむるやも知れず。若し然らば栗屋最先に行く事となるならん。

武部は背の丈稍々低けれども、丸々と肥えて體格立派なり。彼は氣焰を吐く時と雖も、尙ほ謙遜の態度を以て恥しさうに口を利く如く、其心情も穩和親切にして恰好の新郎たるを疑はず。殊に酒も飲まず、煙草も喫はず、品行極めて方正なるを最も得難しとなす。

人の品行を若し金に例ふれば、武部は純金と迄には行かずとも、純金に近き二十二金位の所なるべく、黒澤、山崎の兩者は恐らく二十金位の所ならん。此兩者敢て武部より不品行なりといふにはあらずれども、社會に出でたる時が二三年早きのみならず、既に妻帯の身なるが故に、二位だけカラットを下げて評價するも、決して無理にはあらずらん。粟屋は二十二金か二十金か判断つかず。蓋し交遊なきを以てなり。田所はサイ、ハ、ロ、ヂ、ナ、れ、ど、も、二、度、も、洋、行、し、た、る、が、故、に、十、四、金、位、に、相、當、す、べ、く、松、浦も亦た略ぼ同じからん。赤司は屢々料理屋に行けども、唯だ半玉の一人か二人かを呼んで、焼き芋を買つて喰はして無邪氣に遊んで歸るを常とする人なれば、潰々者流の風評するが如き遊冶郎にあらずと雖も、何にしる年月も長く、名代の通人なるが故に、先づ九金位に評價するを適當とせん。

(七) 結論

之を要するに今の文部省は相當に人材を集めたりといふべし。何れも新顔にして、何事をかなさんとする銳氣に充てり。

福原は圓轉滑腕、獻酬の才に長じ、時局を有耶無耶の中に葬り去るべき怪腕を有す。

此點に於て、彼は岡田よりも澤柳よりも遙かに勝れりといふも過言にあらず。故に彼が次官の職にある間は、物議や騷擾を醸すこと恐らくあらずらん。然れども進んで仕事をなす點に於ては如何のものならん。今日迄の彼の行り型を觀るに、大體上事勿れ主義を所持するもの、如く、世と闘つて迄も所信を斷行せんとする勇氣を有せざるもの、如し。斯は長谷場の方針なるやも知れざれども亦恐らくは福原自身の方針とする所たらずんばあらず。彼は官吏學校次官科の第一年生なるが故に、事功を擧ぐることは自ら之を將來に期し居るもの、如く、今は唯だ非難攻撃を受けず、落第せざることに主力を傾注し居るもの、如し。

彼は官僚派にもあらず、政友會系にもあらず。單純なる事務官の成功者にして、未だ政治的一方の色彩を有せざるが故に、内閣交迭するとも彼れ恐らく依然として次官を勤績せん。新大臣若し彼を好まずんば已むを得ず、知事となりて地方に出づべきならんも、十中の九部迄は次官勤績と見るを適當とせん。彼が未だ政治系統の色彩を有せざること、將來の發展上甚だ不利たるを免れずと雖も、然かも唯だ技術家的に次官を勤績するには頗る好都合たるを失はず。

田所は普通學務局長として、局長中の花形役者たるのみならず、福原の參謀として、隠然副次官の任務を執りつゝあり。出身の上よりいへば、眞野が第一古參にして、渡邊之に次々と雖も、然かも此兩者は唯だ自分の所管事務に勵精するのみにして、毫も高等の政略問題に參與する所あらざるが如し。是れ必らずしも福原が此兩者を信用せざるが爲にはならずと雖も、兎も角此兩者は福原よりも先輩なるが故に、福原が友人的に秘密を打ち明くること稍々不便なるのみならず、參謀長としては田所の方が遙かに適任なるが爲に外ならず。

福原と田所とは、如才なき者同志の取組にして、其間柄の親密なる、殆んど水をも漏さずといふべし。嘗に公人としてのみならず、私人としても友人としても極めて親密なるが故に、福原は如何なる秘密をも打ち明けて相談すべく、田所も亦參謀長として友人として弟分として、獻策もすべく、忠告もすべく、奔走もすべしと想察せらる。奏任校長問題といひ、嘉納、棚橋、三輪、田、宮川等の敍勳若しくは授章問題といひ、何れも田所の獻策の結果ならんと信じて疑はず。

田所は、參謀長として得難き適材なれば、福原が彼を協同者とするは、最も賢明なる

手段といふべし。然れども田所は味方に善く敵に悪しき性格を有するが故に、唯だ此一事福原に於て十分の注意を要す。味方に善く敵に悪しきことは、人間の通有性にして、又、人の勢力を得る所以なりと雖も、行政者としては、思ひ掛なき方面より思ひ掛なき攻撃を招致することあるが故に、豫め相當の注意を要す。

此點に於て最も相反する者は、恐らく赤司ならん。赤司は味方にも餘り厚からず、敵にも餘り薄からず、努めて公平ならんことを庶幾す。此一事個人として一大美德たるには相違なしと雖も、然かも遂に俗界に勢力を得る所以にわらず。

人間は感情と利益との動物なるが故に、衷心、其人物に敬服せざる時と雖も、特別の恩顧、引立を受け、特殊の利益を附與せらるれば、遂に其人の厚意に感じ、何處迄も其人の協同者となり、子分となりて一身を捧ぐる覺悟を定むるに至るなり。山縣が伊藤よりも政界に勢力を有し、桂が西園寺よりも優勢なるは、一に味方に厚く敵に薄くして培養したるものに外ならず。

桂は第一次の内閣を退きし時、機密費を全部カツサラひて持ち行けりといふ。蓋し子分に分配附與せんが爲に外ならず。第二次の内閣を退く時は、前の西園寺内閣

が機密費をソツクリ其儘残置して出で行きしが故に、流石の桂も良心に恥ぢしと見えて、機密費を全部カツサラふるには至らざりしと雖も、其代り實業家や新聞記者や官吏に爵位、勳等、位階を與へ、又は彼等を貴族院に入れて恩恵を施せり。

西園寺の行き型は、全く之に反す。内閣を退く時、機密費をソツクリ其儘残置したるが如きは、固より朝飯前の事なり。彼は大切な部下が窮境に陥りたる時と雖も、常に知らぬ顔の半兵衛をさめ込むを例となす。彼勳授爵をなす等のこと固よりあらず。故に彼には眞の協同者も子分もあることなし。

山縣と伊藤との關係も、桂と西園寺との關係を以て説くを得。個人として伊藤が山縣に劣り、西園寺が桂に劣るにあらず。唯だ味方に利益を與へず、子分を庇護せざる一事、勢力失却の原因なりと知るべし。

松浦は、幸に我輩の豫言通り、専門學務局長となれり。彼には福原の圓轉なく、田所の好調子なしと雖も、堅實にしてドツシリと落附き居れるが故に、年齢以上の重味あり。頭もよく學問もあれば、恐らく好局長の名聲を得ん。

田所、赤司、松浦の三者の將來最も注目すべし。次の内閣に福原次官を勤続せば、全

體の配置現在に異ならず。然れども萬一福原が新大臣との折合上、大府縣の知事にでも轉ずることあらば、其時の次官は果して何人ぞ。恐らく田所ならん。

田所が次官に昇進せば、普通學務局長は何人なりや。赤司か松浦か、見當をつくるに困しむと雖も、恐らく松浦ならん。赤司は當分現在の地位に落ち附いて、他日貴族院に入るの好機を握らんとするもの、如く、本省に歸らんとするが如き希望は、寸毫も之を有せざるもの、如し。彼にして將來文部次官たらんとする希望を有せば、歡んで普通學務局長たるを至當の順序とすと雖も、若し將來内閣書記官長又は法制局長官たらんとする希望を有せば、寧ろ現在の地位に留まりて、老人連の識拔を受くるを得策とせん。彼が當分現在の地位に留まらんとするは、將來文部省圈外に於いて發展を計らんとする野心を有するが爲めにはあらざるなきか。彼は文部次官となるも鐵中の鏘々たるを失はざるべしと雖も、内閣書記官長になれば、一層の適任者たるべきを疑はざるが故に、彼が本省復歸を望まざるは、流石に自識の明ありと謂ふを得ん。(此項四十五年五月稿)

八、文部省視學官室の人物

(一) 瀬戸虎記

視學官の首席を瀬戸虎記となす。彼は高知縣の人にして、二十九年物理科を卒業せる理學士なり。初め岩手縣の中學校教頭となり、次で東京高等師範學校教授兼文部省視學官となる。更に第六高等學校教頭兼文部省視學官に轉じ、四十一年再び文部省に入りて、本官を視學官に任じ、第一高等學校教授を兼任す。

彼れ少にして未來の政治家を以て自ら任じ、口角泡を飛ばして、書生一派の立憲政治を論じ、土佐流の民權論を振り翳さして、同輩の間に覇を唱へたりと謂ふ。此時代に於ける彼の眼中に映じたる幻像は、當時自由の化神として天下に喧傳せられたる板垣退助なり。藩籍奉還、民選議院の建白以來、隱然として政界の大立物となりしは後藤象次郎也。機略縱横と一種の膽氣を具へたる林有造なり。天賦人權論の著作以來、米國歸りの新知識として一躍自由黨の幹部に坐わりたる當時の少壯政治家馬場辰猪なり。文明的策士の風貌と一種茫漠たる棟梁的資質とを具へ、東方策の述作

以來大に政治家的名聲を揚たる大石正己なり。數へ來れば、尙ほ他に列擧すべきもの少からずと雖も、要するに以上の數者は、瀬戸が少青年時代に描きし崇拜の主なる偶像たりしに相違なし。

それ土佐の一國たる、明治の新日本に關係を有することの量と質とに於て、必ずしも薩長のそれに劣る者に非らず。明治維新の痛快なる大芝居に於て、主要なる役者の幾人を土佐より出し、國會開設に至る迄の國民的正劑に於て、其主働者の重なるものは、殆んど總べて土佐人なりしと謂ふも決して過言にあらざるなり。斯る時代に當りて、斯る國に生を享けたる青年が、己れの天賦如何を顧みる前に、先づ其功名心を挑發せられ、同郷出身の先輩を崇拜の偶像として、遮二無二之に倣はんと盲働するは情勢に於て又已むを得ざる所、瀬戸が小學校及中學校時代に於て、政治熱にかぶれたるも、決して故なきことにはあらざるなり。

彼れ、既に時代の政治熱に冒さる。此時に當りて、彼が最も辯論の練磨に熱注したるも固より其所なり。朝に佛蘭西革命の童謠を歌ひて、夕に自由民權の討論に従ふ。學校の正科に對する彼の態度と成績が當時如何なるものなしかは、我輩の未だ關り

聞かざる所なりと雖も、恐らくは學校の正科よりも寧ろ討論を好み、學校成績の良否よりも寧ろ書生論の勝敗に浮身をやつしたるものならん。

既にして、彼、東京に來り、大學の法科に入りて政治學を修めんとす。一日先輩を訪ひて抱負を語り、自己の信ずる將來の方針に關して所見を叩く。先輩醇々として其不可を諭し、時代の政治熱は數年ならずして冷却し、之に代りて物興するものは必ずや實業熱ならんと斷定し、彼に勸むるに、法科を棄て、理科若くは工科に行き、以て將來身を實業界に投すべきを以てす。而かも此時に當りてや、彼の政治熱は病既に膏肓に入りたる時なりしが故に、初の中は容易に之を聽くべくもあらざりしと雖も、其の忠告者たる先輩は、彼が大に畏敬し居たる人なりしが故に、彼も終に之に服するの心を起して理科に入り、少時の空想とは全く飛び放れたる方面の人となれり。

然れども雀は百迄踊を已めず、三ッ兒の魂は百まで續く。彼は先輩の言に服して理科大學に入りたりと雖も、然かも之が爲に彼の辯論癖は失せたるにはあらず、尙ほ依然として同輩間の論客たりき。嘗に大學學生時代に於て其癖の失せざりしのみならず。卒業後數年を経て、相當の地位に昇りたる時に於ても、尙且辯論を弄するを

以て有名なりき。彼れ今や四十を越ゆること二歳、東京に住する歲月も、決して短きにあらずと雖も、然かも彼の言語は、依然として土佐辯其儘なり。少くとも土佐辯的東京辯なり。彼と一度び言葉を交へたるものは、恐らくは何人と雖も、直ちに彼の出身の土佐なることを知り得るならん。言語習慣を變移することの遲速は、其人の天性と心掛の如何とに原因すること多しと雖も、亦其人の幼少時に於て使用したる言語の分量に大關係あることを認めずんばあらず。我輩は彼と面語して、彼の土佐調の言語を聞く母に、彼が少青年時代に於て、如何に熱心に討論に耽り、如何に多く土佐辯の習熟に慣れたるものなるかを推想せざる能はざるなり。

然れども言語の東京調なると地方辯なるとは、固より其人物の輕重と何等の關係あることなし。我輩何ぞ斯の如き意味を以て彼の土佐調を云爲するものならんや。然りと雖も、議論を弄すると否とは、其人の性格に重大なる關係を有す。我輩は彼の人物性格を評論せんとするに當りて、彼の議論好きなる一事を看過すること能はず、看過し能はざるが故に、遂に彼の土佐辯をも持ち出すに至れるものなり。

議論に長じ、討論に巧みなる者は、必ず頭腦明晰にして論理的判斷力に富む。然れ

ども斯の如き人は、動もすれば、議論其物の巧拙に浮身をやつすることを知りて、發言の效力如何を顧みざるの弊あり。發言の效力如何を顧みることなくして、徒らに議論を弄ぶは、行政官としては、最も戒むべきことにして、殆んど絶對の禁止事項なりといふも過言にあらず。言論を生命とする議政壇上の政治家や、新聞雜誌記者等にありては、行政官のそれとは、大に趣きを異にするものありと雖も、然かも尙ほ其賢明なるものにありては、議論の巧拙よりも、寧ろ發言の效力如何に重きを置くを常とするものなり。

行政官は言論を生命とするものにあらずして、實行を主とするものなり。實行を主とするものには、言論を弄するの必要極めて少し。否な却つて之が妨げとなる場合少しとせざるなり。沈黙し居たらんには、贊成を招き得たるべきに、徒らに言論を弄びたるが爲め、却つて他の反感を招き、事を不成立に至らしめたりといふが如きこと決して少しとせず。此點に於て瀬戸は行政官として明に一の缺點を有するものなり。彼にして若し將來一段の進境を見んと欲せば、宜しく言論術を棄て、發言學を學ぶ所あらざるべからず。發言學の主要なる研究事項は、其發言の時期と其發言

の效力及影響如何を知り、寡言の雄辯を以て、巧みに自己の主張を貫徹する術を講ずること是れなり。

此點に於て、大に會得し居れるものは、文部省高等官中にありては、福原専門學務局長を以て第一となす。福原は近時に於ける我教育界の掘り出り物なり。其天賦の優れて器局の大なるのみならず、其人物修練の行き届ける所、何れの點より見るも、彼は決して普通事務官の材にあらず。彼は近き將來に於て必ず次官の地位に就くとあらん。然れども、次官の地位は、未だ決して彼に取りて最大名譽とするに足らず。彼は今にして宜しく大臣學を研究すべきなり。我輩會て彼を月旦したることありと雖も、そは唯だ所懐の一端を述べたるに過ぎず。未だ十全に彼の人物を描きて社會に紹介し得たりとは、思惟し居らざるなり。而して、今は傍系の高等官たる視學官を總評せんとする時にして、直系の高等官たる局長、參事官、書記官を評論するの時にあらざるが故に、更に一步を進めて、福原を詳評すること能はざるはいふ迄もなし。唯だ茲に彼を引き合に出したる所以のものは、福原が瀬戸の親玉たる地位にある一事に基因せずんばあらざるなり。

瀬戸は視學官たりと雖も、地方部を擔任せず、常に専門學務局にありて、福原の輔佐役を勤む。近時彼が性格に多少の鍛鍊を加へ、手腕に一段の進境を示し來れる觀あるは、恐らく福原に就て大に學ぶ所ありしが爲ならずんばならず。天品の相違は努力の力を以て、全然同一ならしむること能はざるは勿論なりと雖も、然かも或程度迄到達し得ることは明にして、修養に心掛くると否とは、十年の後に於て、著しき逕庭を來すは論を俟たざるなり。瀬戸は幾多の長所を有すれども、之に伴へる短所も亦少からず。これ彼が今後大に修養を要する所以なり。

頭腦の精密なるは彼の長所なれども、思想の博大を缺けるは、彼の短所なり。一部門に對して精透の速きは彼の長所なれども、全部を括るゝの量に乏しきは彼の短所なり。議論術に巧みなるは長所なれども、發言學を知らざるは短所なり。意志強固にして、容易に外部の爲に動されざるは長所なれども、調和融通の才に乏しきは短所なり。自意識の發達し居れることは長所なれども、主我の念餘りに強くして交讓妥協の精神に乏しきは短所なり。己れの主張に忠實なるは長所なれども、臨機應變に事を處し、談笑の裡に樽俎折衝して、旋回的に終局の勝利を占むる術に乏しきは短所

なり。剛毅直截は長所なれども、如才なき言動と一種の愛嬌に乏しきは短所なり。要するに彼の人物は自然科學的彩色餘りに多くして人間學的紋理の餘りに少き型に屬すといふ一語を以て、其全體を説明し得る者といふべし。

(二) 小泉又一

視學官の第二席を幣原坦となす。然れども評論の便宜を思ひて、任意、第三席の小泉又一を先にせん。小泉は播州姫路の産にして、二十年の高等師範學校卒業生なり。初め地方の中學及師範學校々々長等を歴任して、三十二年東京高等師範教授となり、次で歐米に留學を命ぜられ、歸朝後本校の教授たる傍に、附屬中、小學校主事を兼任し、四十二年野尻精一の後を受けて文部省視學官となり以て現今に至る。

彼は教育學專攻なりと雖も、其造詣に至りては彼と同期の卒業生たる波多野貞之助に及ばず。彼の後輩たる横山榮次、乙竹岩造、森岡常藏、佐々木吉三郎等にも劣れり。然れども活社會學、活人間學の造詣に至りては、此等の數者全體の總量に比するも、彼れ決して一步を讓るものにあらざるべし。若し彼を教授の地位に當らしめんか、彼は決して茗溪派第一流の人材に非ず。然れども彼をして校長の任にあらしめんか、

彼は確かに茗溪派出身者中の第一流也。

然らば、彼が教育學の造詣に深からざるは何故なるや。彼の頭腦が不透明にして、學者たるに適せざるが爲なるや。否、決して然らざるなり。頭腦明晰にして相當の獨創力を具ふる點に於て、彼は決して茗溪派出身中の第二流に下るものにあらず。彼は少年時代に於て、郷閭の神重たりしのみならず、高等師範學校卒業の時に於ても、亦優等中の優なるものなりき。彼にして若し學問に忠實ならしめば、其造詣必ずや見るべき者あるを疑はず。少くとも研究の任に堪ゆるだけの天賦は十分に之を稟具し居れることを認めずんばならず。然るに今日に至るも、彼が終に學識として他より敬重せらるゝものなきは何故ぞや。これ一に彼が研究に熱心ならざるの致す所たらずんばならず。

而して彼が研究に熱心ならざるは何故ぞや。これ彼が才氣に充ち、常識に發達し、自己の長短所を餘りに明白に自覺し、己れの將來を餘りによく洞察するの明を具ふること原因せずんばならず。

彼は己に相當の學才あることを知らざるにあらず。然れども此學才を極度まで

發達せしめたりとするも、其達する所は、高が知れたものなりとは、彼の自ら悟了して疑はざる所ならん。彼れ少にして兵庫縣中學を卒へ、笈を負ひて東京に來り、私かに大學豫備門に入學するの準備をなす。此時代に於ける彼は大學の法科を出で、將來行政官たらんとするを唯一の希望としたるものゝ如く、固より高等師範を出で、教育家たらんとするが如き希望は夢にも懷想したることあざりしなり。然れども、彼の父、彼に高等師範入學を勸めて已まず、強ひて大學に入らば、學資支給の途を斷つと嚴達す。流石の彼も此の嚴達を如何ともすること能はず、遂に我を折りて高等師範に入る。高等師範は當時湯島に在り、昔の聖堂の跡なり。湯島の聖堂は、徳川時代に於ける學海の淵叢にして、當時天下の學者が學術の蘊奥を究めんが爲に諸國より集ひ來れる最高學府なり。かゝるが故に、小泉の父の眼に映じたる高等師範は、海内第一流の學校たりしに相違なく、之に我が子を入學せしむるは、固より大學に入學せしむる以上の名譽にして、我子の榮達を計る、天下恐らく之に過ぎたるものあらざるべしと信じたるに違はざらん。これ彼の父が、彼の大學入學を拒みて、聖堂(高等師範)入學を強制したる所以なり。

斯の如くして彼は高等師範學校に入る。彼れ自らに取りては、恐らくは不本意たりしに相違なし。

高等師範學校は、中等教員たるには、誠に都合よき學校なり。然れ共それ以上の發展をなすには、此學校位妨げをなす學校も亦他にあらざるなり。直轄學校教授たるには大に妨げとなり、行政官たるには、尙更ら妨げとなり、學者たるには更に大々の妨げとなる。こは必ずしも高等師範學校の程度低きが爲めにはあらで、學校其物の性質學風と、教育界に學閥の弊あるとに職由するものなりといはざるべからず。小泉が學問研究に熱心ならざるは、即ち此點に關して大に達觀する所あるが爲にはあらざるか。彼が専心一意研學に従事して、己の學才を極度迄發揮し得たりとするも、文學博士の學位を贏ち得ることは頗る困難にして、大學教授の地位に昇ることは殆んど絶對的に不可能なりといふも過言にあらず。文學博士や大學教授は、決して人生の最大名譽にあらず、此等の肩書を有すると否とは、其人物の輕重と必ずしも、大なる關係を有するものにあらず。然れども、斯の如きは畢竟一個の超脫的理想論に過ぎず。少く共全く無關係の地位より、此等のものを客觀しての批評家的推理の結果

に過ぎず。若し之を自己に關係ある問題として、主觀的に考察せば、何人と雖も、此等の肩書を名譽とせざるはあらざらん。假りに之を唯一無上の名譽なりと感ぜざる迄も、有は無に勝ると思惟して甘受するは勿論なりと謂ふべし。高等師範卒業生といふよりも、文學博士といふ方遙かに優り、高等師範學校教授といふよりも、帝國大學教授といふ方遙かに厳しくして、地位安定なるのみならず、社會の尊敬も大に深厚なるは、いはずして明かなり。かるが故に、學問を以て身を立て、眞の學者として世に立たんと欲する人に取りては、此等の肩書は、市井の批評家のいふが如き輕々のものにあらざるを認めずんばあらず。少くとも、之を贏ち得る望あると否とは、其人自らの努力の上に重大の關係あるものと謂ふべきなり。若し之を眼中に置かずして、衷心より學術研究に熱心なる人ありとせば、そは先天的の學問狂なるか、然らざれば、異常の達人にして、名利以外に超脫せる非凡の賢者なりと謂はざるべからず。而して小泉又一は、學問狂の天性を有せず、又名利以外に超脫し得る賢者にもあらずして、俗物の鏘々たるものなり。彼れ何ぞ、將來に光明なきを知りつゝ、學問研究に熱注するほどの仙人たり得んや。

凡そ人の努力するや、必ず何等かの標的あるを常となす。金と権力と美人と名譽とは、人間の努力を刺激する標的の主なるものにして、此四個の代表的標的を取り去らば、人間社會の向上進歩は、恐らく死睡の状態に陥らん。標的は主觀的に之をいへば、野心と功名心となり。野心と功名心との強きことは、往々にして其人の品性を害し、其人の前途を過まらしむることありと雖も、然かも亦人を最もよく努力せしめ、最もよく向上進歩せしむる一大原動力たることを否認すべきにあらず。而して學徒の標的として最先に立つものは、博士の學位と大學教授の地位とに外ならず。然るに高等師範出身の小泉に取りては、此標的は少しく遠隔に過ぐるは明にして、之に砲口を向くるは、恰も野砲の照準點を小銃で狙撃するの觀あるを認めずんばならず。既に博士も大學教授も、彼に取つて望みなきものとせば、彼が如何に熱心に學問を研究したりとするも、其到達する所は、多寡の知れたるものにして、『高等師範出としては割合によく研究してゐる』といふが如き、半ば輕侮の意を含める名譽を贏ち得るに過ぎず。斯の如きは才物の小泉が斷じて甘んじ能はざる所なり。茲に於てか、彼の標的は他の可能なる地點に於て之を求めざるべからず。何とな

れば、一の標的の外れたるが爲に、其儘朽ち終るには、彼の野心は餘りに強くして、彼の功名心は餘りに熱烈に過ぎたればなり。

彼は學究として突進するは、己の長所にあらざることを知るのみならず、己の長短の如何と前途の光明の有無を顧みずして盲進するには、彼は餘りに利巧の天分を享有し過ぎたり。彼は孜孜として讀書に沈溺し、之に依りて高師出身者中第一流の學者にならんよりも、寧ろ他の方面に己の長所を發達せしめ、之に依りて將來の運命を開拓する方、遙かに有望にして捷徑なることを看取せり。これ恐らくは彼が學問に忠實ならざる眞の理由たらん。

小泉の人物心情夫れ斯の如し。彼は他より敬重を受くべき學識を有せず。然れども、圓滿に發達せる常識を有する點に於ては、高師出身者中の白眉なり。教育學を講じ、教授法を説く講壇の人としては、彼は決して二流以上に出づる教授の材にあらず。然れども、國家教育の全般に亙りて其の大體を論じ、行政家的見地にありて、今後の教育は斯くあらざるべからずとの意見を立つる點に於ては、彼は生熟の教育學者の企及し能はざる長所を有す。彼は現代の教育家が通有する馬鹿正直の分子を毫

末だも有せず。然れども、相當の機略と懸引とに長じ、臨機に處する通才に至りては、彼れ則ち之を有す。従つて彼は往々辛辣に過ぐとの悪評を受くることあるべしとするも、兎も角人を統率し行く丈の手腕を有す。

彼は愚直の鈍物にあらざ。世の所謂好人物の分子は、彼に於て、遂に之を求むべからず。然れども人并外れて長き彼の面貌の中には、一種圖々しき喰へざる資質あるを示し居れり。顔面の稍々灣曲せるは、彼に旋回的術數あるを示し、中央面部の稍々凹み居るは、凹凸の手腕と性格の一徹ならざるを示すものなり。

彼は一見豪放の人物の如しと雖も、其實決して然るにあらず。剛毅と粗大とは全然彼の性格の關り知らざる所なり。彼に事務的才幹あるは、彼が細心の人物たるを示し、其根柢の常識の人たるを示すものなり。彼は才氣に充ち、霸氣に富むと雖も、然かも其才たるや天才にあらずして世才なり。此點に於て、彼は澤柳のそれと大に趣きの異なるを認めずんばならず。澤柳は才物たることに於て、一點の疑なき人物たりと雖も、然かも尙世才と修養との外に、一の天才的分子を有す。この故に、澤柳は偉人の博大を缺くと雖も、然かも尙ほ大人物の共有する剛毅と粗大とを有し、豪放なら

ずとするも、逸宕を有し、該博の知識を有せずとするも、創見を有し、智巧以外に識量を有し、群集心理に迎合すと雖も、尙之に拘束せられざるの手腕を有す。而して此等の諸點は、小泉又一に於て、遂に求むべからざる所なり。殊に彼が一種街氣的修飾の厭味を帶ぶる一事は、明に彼が俗中の大俗にして、大人物の資質を享有し居らざる適確の證左とせずんばならず。

彼れ常に乙竹や、森岡や、佐々木や、服部等の後進を呼ぶに「君」を附けずして、呼捨てにするを例となす。此等の數者たる、彼に比すれば著しく後進にして、恐らくは直接に彼の教育を受けたることもあるべし、或は又何かにつけて彼の提撕を受けたることもあるべし。かるが故に、彼に取つては、此等の數者は未だ乳臭を脱せざる所謂兒供の階級にあるもの、如く見ゆるものなるやも知れず。少くとも、彼等は己れの生徒なるが故に、未だ之を同等に取扱ふの必要更になく、呼び捨てにて結構なりと思惟し居れるものなるやも知れざるなり。然れども斯の如きは、其理由の孰れたるとを問はず、絶對に彼の謬見を示して餘りあるもの、彼の人格を傷くること少からずといふべきなり。

凡そ人を呼び附けにするは、極めて、親友の間か、然らざれば、親族縁者の間に限るを常とするはいふ迄もなし。後者の場合に於ては、他に對して謙遜の意を現はさん爲に故意に呼び棄てにするものなれば、殆んど問題にならず。本人の居らざる場合に於て、友人同志第三者の噂をなす時に敬稱を用ゐざるは賞めたることにあらずと雖も、普通の慣例として未だ深く咎むるに足らず。然れども友人にあらざる人に對して他人を語る時に於ては、其本人の居らざる時と雖も、敬稱を附するを當然となす。若し本人の居る場合に於ては、其本人と談話者と如何なる關係あると、又其本人が如何なる地位あるとを問はず、相當の敬稱を附けざるべからず。これ本人に對する禮のみにはあらず、談話者自らの品位を保つ上に必要な用意と謂ふべきなり。

然るに今小泉の態度を見るに、彼は本人の居る前面に於て、新聞記者等に以上の數者呼び棄てにするを憚らざるなり。惟ふに彼は愚直の鈍物にはあらず。己の後進が爾來大に發達し、一廉の人物となり、或點に於ては己れ以上に進歩し居れることを識認し能はざるほど、不明の人物にはあらず。他人の人物變遷を看取するの明を缺き、何時迄も己れ獨り偉らしと思惟

するほど小泉は不明の愚物にはあらず。故に彼は、心の底より以上の數者を輕侮して呼び棄てにし居るものとは受取ること能はざるなり。

然らば彼が呼び棄てをなす眞の原因は何なるや我輩を以て見れば、彼に一種の街氣的修飾癖あること、之が唯一の原因たらずんばあらず。彼は偉らぶつて見たき性癖を有し、豪放ぶつて見たき街氣を有し、先輩ぶつて見たき稚氣を有す。此のぶつて見たきの發作が、即ち呼び棄ての唯一原因たることを認めずんばあらず。彼は視學官として第七地方部を擔任す。我輩未だ彼が地方教育家に對して、如何なる態度を以て臨みつゝあるやを知らずと雖も、我輩の所謂街氣的修飾癖を現はすことなきや否やは、我輩の私かに憂とする所なり。視學官の地方教育家に對する態度は冷酷なる檢事の罪人に對する如き態度たるべからざるはいふ迄もなく、警察官の良民に對する時の如き態度も未だ決して完きものと謂ふべからず。常に溫情と懇切とを主本とし、同情ある忠告者の態度を以て之に莅むを要し、毫末たりとも尊大威壓の言行あることを許さざるなり。

小泉は愚物にあらず。視學官の職分に關して我輩より説法を聽く必要はもたざ

らん。我輩亦彼に説法せんが爲に此言をなすものにあらざるなり。我輩は唯だ彼に一種の性癖あるを知り、地方教育家に對して、之が發作することなきやを憂ふるの餘り、言遂に此に至れるに過ぎず。若し我輩の此憂、全然事實に反し、一片の杞憂に過ぎずとせば、教育界の爲め彼の爲に祝せずんばならず。

彼は有爲の才幹を具へ、茗溪派出身の鏘々たる人物なりとの名聞を有すると共に、又壓味ある人物なりとの不評を有す。而して此不評は彼の先輩側より出でずして、多くは彼の後進側より續出す。我輩は之を耳にする毎に、常に彼の銜氣的性癖を想起せざることをあらず。

十年前の小兒も今の大人なり。今の書記官、參事官も、十年の後には、次官たり、大臣たるを知らざるべからず。然るに之を遇すること舊の如くせば、後進争でか其先輩を喜ばんや。故伊藤博文が群雄を收攬する上に於て、故大久保利通、今の山縣有朋に及ばざるものありしは、則ち主として此點の用意に缺くるものあるが爲なり。大久保、山縣は聰明なる點に於て、伊藤に及ばず。識見の高邁、識量の濶大なる點に於ても伊藤に及ばず。政治的才幹に於ても、伊藤は大久保、山縣の上に出づると數等なり。

然れども、唯だ群雄を收攬する術に於ては、伊藤は徹頭徹尾前二者に劣る。山縣の人を遇するや、必ず國士の禮を以てなす。伊藤の之を遇するや、必ず小兒扱を以てなす。前者は如何なる後進に對しても、寸毫の尊大を示さず。後者は既に天下の偉材となりたる人に對しても、尙且つ青二才に對する態度を示す。公開の席に於て、總理大臣の印綬を帶べる桂太郎を呼ぶに、オイ桂の一語を以てし、何等の敬稱を附せざる如き其例なり。是を以て山縣に拾ひ出されたる者は、異數の拔擢を受けざる人に於ても、終生其厚誼を忘るゝこと能はず、如何にかして其知己に報いんことを誓ひ、伊藤に拾ひ出されたるものは、異數の拔擢を受けたるものと雖も、其恩を感ずるは、初の中に止まり、少しく羽翼を伸ばしたる後に於ては、嫌厭として伊藤を去る。これ個人としての才幹、力量、識見より云へば、山縣は伊藤に及ばざるものあるにも拘はらず、政海全體の勢力より云へば、山縣は遙かに伊藤の上に出づる所以なり。

凡そ人の事をなさんとするや、先輩の同情、引立を要するは勿論なりと雖も、他の一面に於ては、有力なる後進の援助を藉らざるべからざることも亦明か也。後進の後援を控えざる先輩は、一時的偶然の成功を博することは、これあるべしとするも、決し

て必然的根柢ある勢力と成功とを贏ち得るものにあらざるなり。

一思此に至れば、小泉の後進に受け悪しきは、彼に取つて猛省三番の價值ありと謂はざる可らず。先輩は先輩ふらずとも、先輩の地位を保つは難きにあらざる。然れども先輩ふる先輩は、先輩の實を擧ぐることを知らざるべからず。とは云ふものゝ、小泉は兎も角、若溪派出身の鏘々たる一人材也。圓滿の常識を具へ、世故人情に通じ、事務の才に長じ、統率の徳器を稟有す。才氣に富むが故に事をなすに遲鈍ならず。融通利くが故に、野暮ならず。恰惻なるが故に、一部の小是非の爲に、大局を誤るが如き愚をなさず。視學官としては兎も角、堂々たるもの、之を前任者野尻精一に比すれば、總べての點に於て遙かに上は手なりといふも過言にあらざる。野尻は堅實誠實の君子たりと雖も、手腕の人にあらざる。温厚の徳は之を有すと雖も、敏活の才幹を缺く。小泉は全然之に反して才氣縦横の切れ物なり。仕事師としての技倆に至りては兩者固より比較の限りにあらず。今にして小泉が自ら己の缺點短所を反省し、一面人物修養を努むると共に、他面發心して讀書に努力せば、今後數年の後、必ずや大なる進境あるを見ん。

(三) 幣原坦

視學官の第二席を幣原坦となす。内地より郵送の新聞紙が傳ふる所に依れば、彼は近々東京帝國大學の教授に轉任して朝鮮史の講座を擔任すべしといふ。而して彼が近時我輩に寄せたる書に依れば、其内ロンドンにて拜眉を得候かとも存居候とあり。果して然らば、彼が視學官の地位を去るは、遠からざる中なるべく、此一文が公表せらるゝ時は、彼の既に本省を去りたる後なるやも未だ知るべからず。是を以て彼を視學官の一人として、茲に論評するは、或は時機稍々後れ、聊か滑稽のものとなし、恐れなきを保せず。然れども、我輩は今地、遠隔の異國にあり。内地に於ける人の進退動靜を正確に知る方法を有せず。従つて彼を此評論より除外してよきと否やを知り能はざるなり。これ我輩が多少の危みを抱きつゝ、尙ほ遂に彼を茲に引き出し來れる所以なり。若し此文公表の時、彼の既に本省を去りたる後ならんには、彼に關する所は視學官幣原坦の月旦にあらざるして、曾て視學官たりし幣原坦の人物評と化すは固より覺悟の前なり。

彼は河内の産、京都の第三高等學校を経て東京帝大に入り、國史科を専修して二十

六年卒業す。初め造士館教授に任じ、次で山梨縣中學校長に轉ず。後、女子高等師範學校教授となり、更に韓國學務參與官に選任す。辭職歸朝後直ちに文部省視學官に任ぜられ、今や將に東大教授とならんとす。

彼は溫良醇粹、靜平の君子にして努力の人也。天才的破格の霜氣は彼に於て毛頭之を求むべからずと雖も、謹慎にして修養を重んじ、一言一行の過失もこれなからんと期する高人の態度は、彼則ち之を體得す。奇拔にして嶄新剛毅、警々諤々の論調を用ゐて、縱横無盡に時事を論ずるが如き識見と膽勇とは彼に於て、終生之を求むべからず。然れども、雍容溫雅、泰然自若、實踐躬行、宛然として一個高潔なる君子の面影を有する點に於ては、彼は實に當代稀に見るの逸材なり。

修養努力は彼の最初の信條にして、又恐らくは最後の信條ならん。彼が造士館に就職するの時、南洋沿革史を著はして學界に貢獻し、韓國に職を奉ずるの時、朝鮮史を研究して大論文を提出し、一舉にして文學博士の學位を贏ち得たるが加きは、彼が如何に修養努力に熱心なるかを示すに足るものなりと雖も、然も斯の如きことは、未だ以て彼の修養努力の全部を説明し盡くしたる者にはあらず。彼の修養努力は常に

學問、知識の方面に傾倒せらるゝのみならず、又性格鍛鍊の上に、言行の上に、常識涵養の上に向て、多大に傾倒せられつゝあり。かるが故に、彼は先輩上司の忠告助言を聽くに、從順銳敏なるのみならず、後進末輩の言と雖も、之を容るゝに吝ならず。聞くもの、見るもの、觸るゝもの、悉く取つて之を自己修養の資助となす。これ彼が今日の麗はしき人品態度を具有し得るに至れる所以なり。彼は己の非違を覺れば、強ち明日を俟たず、今即時に之を改過して、昨の非を良心に謝す。其美や實に言ふべからざるものあり。

世に、文字は其人の性格を現はすとの諺あり。之を總べての場合に適用して大過なきや否やは我輩之を知らず。然れ共、之を幣原の一身に就て觀察すれば、此俗諺は確かに無上の真理なることを認めずんばあらず。彼は書を能くし、其技正に専門家の目あり。其太字たると細字たるとを問はず、又楷行草の孰れたるとを問はず、筆路周匠にして、墨痕の精練なる、何人取つて之を檢するも、素人の筆なりと思ふもの恐らく一人もあらざらん。然れども、亦之と同時に、彼の筆跡を見て、達筆、亂筆の人なりと推定する人も恐らくは一人もあらざらん。我輩曾て彼の書信を受けたること兩三度。

而かも之を手にする毎に、未だ曾て彼の筆硯に對する態度を想起せざることならず。彼は能筆なりと雖も、然かも之が爲に連筆を苟もする人にあらず。其將に筆を執らんとするや、先づ硯を吟味し、墨を檢め筆を仔細に點檢し、而して後姿勢を正し、恰も中小學の生徒が採點の爲の淨書をなす時の如き心地を以て、徐ろに筆を紙の上に下ろし、一字一線、己れの全精神をこめて之を行き、若し氣に喰はざる字が假りに一字にても出來したりとせば、彼は容捨なく、其全體を抹消し、更に新らしき紙に向つて初めより書き直しするを常とせん。此の故に彼は達筆速筆の人にあらずして、寧ろ人并以上の遲筆ならん。急を要する時に於ても、起立の儘走り書をする如きは、彼の斷じて爲し能はざる所ならん。

斯の如きは我輩が彼の信書を見る毎に、常に念頭に浮ぶる一の想像なり。全部的中せずとするも、必ず幾部の眞實を看破して誤らざるべきは、固く自ら信じて疑はざる所なり。

果して然りとせんか、彼の筆跡と執筆の態度とは、寔によく彼の人物性格を描して餘りあるものと謂ふべきなり。彼が己の能筆を氣に負はずして、一字一線も苟且に

せざるは、彼が修養努力、謹慎の人たるを示し、一字の拙ある爲に全體を書き直すを厭はざるは、彼が改過向上に熱心なるを示すものなり。遲筆と努力とを掛念せず、一途に其文字の秀麗ならんことを期するは、彼が昇級にあせらず、事功に急ならず、徐ろに實力を養成して將來の大成を期せんとする用意を示すものなり。

夫れ然り。彼は徹頭徹尾修養努力の人なり。故に彼は天才の人にあらず。彼は朝鮮史に造詣頗る深しと雖も、其到達する所は、恐らく本邦史學界の一雄たるに止まり、爛々たる史眼を以て古今を網羅洞觀し、興亡盛衰の跡を尋ねて史的、一大理法を發見し、之に依りて現代文明の歸趣を斷定し、世界人類の運命に一豫告を與ふる創才に至りては、今後幾年努むるとも或は彼の關り知る所にあざらん。蓋し彼は修養の學者にして創思の學者にあざるが故なり。

然りと雖も、専門の學識以外に、發達せる常識を有し、學者として受くべき尊敬以外に、一個の紳士として尊敬せらるべき美しき性格を有す。此點は彼が創思の天才にあらずして、修養努力の人たることの唯一偉大の賜なり。

彼は天才の人にあざると共に、又世才の人にもあらず。融通裕達、奇略自在、時世

と共に變轉し、自他の間を巧妙に處理する手腕に至りては、彼は世の所謂才子に及ばざること遙かに遠し。然れども用心深き注意と謹慎なる態度とを以て事に當り、常に内心の平和を保ちて己の職分を忠實に遂行する點に於ては、彼れ則ち能く之を體得す。

彼れ韓國に在るの時、統監伊藤博文と衝突して、遂に辭職の止むなきに至る。世才ある者のなし能はざる所なり。伊藤は近代の偉傑にして、包容濶大なり。彼に衝突することの難きは、寧ろ彼に可愛がらるゝことの難きに勝ると云ふも過言にあらざる。換言すれば、伊藤に衝突せざるを得ざるほどの人物は、他の如何なる人物の下につきも、到底衝突を避くること能はざる無融通の人物なりといふも過言にあらざるなり。然るに幣原は遂に伊藤と衝突せり。我輩は彼の昇進の爲に之を惜まざ、彼の人物の爲に之を惜しんで己まざるなり。

然りと雖も、衝突當時の幣原と現時の幣原とは人物に數等の差あり。彼は天生の融通豁達を有せざるが故に、衝突の野暮を演じたりと雖も、此衝突に依りて、彼は飄然として人間學校の社會科は如何なるものなるかを悟り、此悟りに依りて直ちに己の

性格短所の矯正に全力を盡くし、昨非を今是にすることに向つて、修養努力したること殆んど他人の想像以上にあり。これ爾來彼が著しく人物を向上垢抜けせしめ得たる所以なり。彼今にして當時を回想せば、彼を野暮なりしとする批評を是認するに吝ならざるべきと共に、今だけの考あらば、當時決して衝突せざりしものをもと思ふに相違なし。

幣原を以て、今小泉に比す。多少の興趣なくんばならず。事務の才幹と融通の才とに於ては、幣原は小泉に及ばず。然れども、學識の深博と謹厚の美德とに於ては、小泉は到底幣原の敵にあらざるなり。一種圖々しき喰へざる老獮の手腕は小泉の壇場なりと雖も、和平眞摯、純美の君子たる高人の態度に至りては、幣原の壇場にして、小泉の關る所にあらず。小泉の胸中には多少の策略あり、其言行には多少の掛引あり、方便あり。故に仕事をなす技倆はあれども、人品に俗氣を帯びて多少の厭味を有し、崇高の威權を缺く。幣原の胸中には萬懷の和樂ありて、寸毫の咒詛なく、其言行は、風穩かに、潮平かに、常に一碧洋々として鏡水の如く、何等の權變術數を含まず。故に快刀亂麻を斷つが如き手腕は之を有せずとするも、至誠を以て人を動かし、溫厚と熱心

とに依りて人を服せしむるの美德を有す。小泉は教授たるよりも校長たるに適し、校長たるよりも教育行政官たるに一層適す。幣原は教育行政官たるよりも教育家たるに適し、教授たるも校長たるも適任たるを疑はず。

(四) 針塚長太郎

若し夫れ才氣の權化にして、天真爛漫、愛嬌全身に漲るものを求めば、針塚長太郎なり。彼は群馬の人、二十九年卒業の農學士なり。初め拓殖務省、蠶業講習所に職を奉じ、三十一年文部省に入り、高等師範學校教授を兼任す。三十五年視學官に任じ、次で獨逸に留學し、歷朝して原職に服し、以て現今に至る。

針塚は學者にあらず、天才にあらず、修養努力の人にあらず。又世故に長けたる老獯の人にあらず。彼は天眞爛漫、光風齊月の人なり。彼は頭の絶頂より、足の趾端に至る迄、才を以て充たされたる人なりと雖も、輕薄ならずして、寧ろ率直なり。

理解に敏にして融通よく利き、困難に遭遇するも窮地に陥らざるは、才子の通有長所なりと雖も、言動の何故かに多少の厭味を藏し、心術は寧ろ複雑にして、人格の半面は常に之を人に見せざらんとすることも、才子の通有性なり。然るに今針塚を見る。

彼は才子たることに於て一點の疑を容るべくもあらず。然れども彼の胸中には、一點の心翳を有せず、常に全人格を開放して、有りの儘の針塚を赤裸々に露出す。才子としては稍々稀觀の人物型と謂ふべきなり。

人若し彼の人物を知らんと欲せば、彼と語を交へて、其返答振りに注意せよ。彼の人の言を聞くや、必ず『フンッ』、『成る程ッ』の二語を幾度も繰り返して、如何にも傾聽し居るものゝ如き態をなし、少しく事の意表外に出づるか、又は少々都合悪しき場合に遭遇せば、『ソイッア——困つたナ——』といひて、兩手を頭部に擧げ、兩掌を顚髑骨の所に當て、如何にも困つたらしき態をなす。彼は『フンッ』、『成る程ッ』の二語を連發する時と雖も、必ずしも心から感服し居れるにわらず。『ソイッア——困つたナ——』といふ時と雖も、必ずしも心から困窮を感じたるにはあらず。さればとて、故意に巧智を弄して、殊更に僞詐を扮するにもあらず。巧智を弄し、修飾を掛念するものは、假りに心から困窮を感じたる時と雖も、兩掌を顚髑部に擧ぐるが如き、無邪氣の表情をなすものにあらず。況して心から困窮を感じざる時に於てをや。

彼は輕兆ならずと雖も、氣作なり。故に總べてのことが、輕便にして簡單なり。彼の返辭は『フーン』にあらざして『フンッ』なり。『ナールホド』にあらざして『成るほど』なり。宴會に在りて、何か一つ十八番をと所望すれば、宜しと言下に諾して、直ちに高聲漢詩を朗吟す。然れども、其技は決して上を以て賞すべからず。技の巧拙に頓着せずして、直ちに所望に應ずるは、彼が氣作なるが故なり。然かも其頗る高聲にして、上體を左右に傾倒するは、野暮といへば野暮なれども、彼の天真爛漫を現はすものとしては、殆んど遺憾なきを認めずんばならず。

粹人は多人數の宴會に於て、歌ふものにあらず。若し周圍の事情上、已むを得ずして、喉を現はす場合ありとせば、二上りか、都々逸を極く低聲に一齣吟りて他をいはざるを常例となす。如何なる場合と雖も、高聲を出すことなく、漢詩を朗吟すること斷じてなし。此點に於て、最も要領を得たるものは、文部省中赤司を以て第一となす。赤司は通人なれども、喉は善き方にあらず。調節も巧みなる方にはあらず。然れども彼は聞く耳を持ち、巧拙を批評し、講釋をするだけの能力を有す。而して場所を見ることと、態度の要領を得たることに於ては、正に入段の格あり。彼は多人數の宴會

には黙して何もいはず。少數にして低調、爪弾きの場所に於て、チラホラと二こと三こと語るを常とす。針塚には斯の如き江戸的の粹味は毫もなし。彼れに若し粹味ありとせば、そは地方的粹味にして必ず農業臭を帶ぶ。鞭聲蕭々は農業臭を帶ぶるものにあらずして何ぞ。彼にして農業専門の視學官たるは、嘗に知識技能の上より見て、適任なるのみならず、又趣味の上より見て適任たることを知らずんばならず。

農業臭あるものは、率直にして簡潔、修飾の銜氣を有せず。沈毅重厚の徳質は之を缺ぐべしとするも、天真發露して萬人に愛好せらる。而して針塚は正さに其好標本なり。

針塚は省内にありては、如何なる先輩上司にも愛顧せられん。部下に對しても恐らくは其受け大に宜しからん。文部省出入の新聞記者も、恐らく一人として彼に不評を立つるものはあらざらん。蓋し彼は體の何處を叩いても、憎げの音を微塵、ほども發する人にあらざるが故なり。加之、彼は意見に富み、常識に發達し、判斷力に長じ、熱心にして親切なるが故に、新聞記者に好評せらるゝには、誂へ向きの資格を有す。彼は決して語るべき材料多き點に於て、視學官中の第一流にあらず。然れども意見

に富むが故に自己所藏の材料の多寡に拘はらず、兎も角何等かの問題を記者等に提
供し、熱心にして親切なるが故に、話すべき恰適の問題なき時と雖も、所望するに際せ
ば、『ソイツァー困つたナ』といひつゝ、何事かを話さんと努む。これ恐らくは總
べての新聞記者の否認せざる所ならん。

然り、彼は何人にも愛好せらるゝ人物なり。然れども彼は決して他より敬重せら
るゝ人物にあらず。こは彼が年齢未だ若くして他位低きが爲にも困るべしと雖も、
然も亦彼の本來の性格が興つて大に然らしむるものなることを認めずんばならず。
天眞爛漫も、無邪氣も、愛嬌も、皆な悉く他の愛好を招致するには、充分の力ありと雖も、
然かも遂に他の敬重を招致するの力は之を有せざるなり。他より愛好せらるゝこ
とは、彼をして今日迄發展せしめたるに興つて大に勳功あらん。然れども今日以上、
更に一段の發展をなすには、愛好以外に敬重を有せざるべからず。而して其敬重は、
莊重沈毅の態度と重厚の徳質とに伴隨す。彼れ若し我輩の言を諒とせば、此點に於
ける、今一息の工夫に吝なるべからず。

(五) 茨木清次郎と吉岡郷甫

次に論ずべきは、茨木清次郎なり。彼は加賀の人、三十二年英文科を卒業す。初め
第四高等學校に教授たり、次で英國に留學し、歸朝後原職に復し、更に文部省視學官に
轉じ、現今に至る。

我輩曾て彼を文部省に見たること僅かに數度、未だ一度も語を交はしたることあ
らず。従つて彼の人物性格思想を觀察するの機を得ざりしを自白せずんばあらず
るなり。

我輩既に彼に就て多くを知らず。故に茲に彼を詳しく解剖批評するは、我輩の到
底爲し能はざる所也。然れども、若し我輩をして、遠慮なく自己の感想を語らしめば、
我輩は彼に對して加賀人特性の幾部を具へたる人物なりと言ふに躊躇せざるなり。
加賀人の特性とは何ぞや。非社交的性格是れなり。獨り自ら高ふする癖ありて、
容易に他と共同一致する美德に乏しきこと是れなり。蓋し舊封百萬石の與へたる
感化に外ならず。

人は遺傳と教育とに依りて、其性格を作るものなると共に、又、郷關の風土的大境遇
に依りて大なる影響を受くるものなることも否認すべきにあらず。東北の人は概

して敏捷の性に乏しと雖も、率直にして剛膽、稍々大陸的風骨を帯ぶ。西南の人は概して莊重を缺ぐと雖も、多智多才にして社交に長ず。而して均しく西南の中にもありても、薩摩と肥前とは稍々違ひ、長州と土佐とは大に違ふ。

思慮周匝、計巧密にして善く危難を免かる術を知るは長州人の特長なり。外面率直なるが如くして、内面測るべからざる變詐あり、行、朴訥なるが如くして、言に信ずべからざる險誕あるは薩摩人の特性なり。霸氣多くして權略に富み、口を開けば縦横の議論ある代りに動もすれば詭辯を弄し、遊説を好み運動を善くして一時の利害を制する技倆を有する代りに高遠の計畫に乏しく、善く機會に投ずる明を有すれ共、天分輕俊にして重厚の徳を缺き、放達にして實行力に乏しきは土佐人の通有性なり。

加賀は北陸にして西南にあらず。純東北を以て目すべからずと雖も、准東北の地たるに疑ひなし。故に加賀人は、西南人の状態よりも東北人の色彩に富む。

東北人は義理の念に明にして、利害の爲に輒すく動かざるの美點を有すれども、交譲妥協の精神に乏しく、正義に服従し、權力に叩頭せざる長所を有すれ共、自我の幾部を犠牲にして他と提携するの美點を缺く。而して加賀人は、實に此の傾向を有す。

我輩は茨木を認めて加賀人の好標本なりとはいはず。然れども加賀人通有性の幾部を享有する人物なりと信じて疑はざるなり。彼は未だ一度も省外の人の宴會に出でたることなし。御付き合といふが如きは、蓋し彼の了解し能はざる所ならん。彼は著書も出さず、雑誌にも書かず、新聞記者訪問するも黙して語らず。蓋し己の好まざる所を、殊更に努めてなすが如きは、彼に取りては殆んど無意義のことならん。

彼は英學が専門にして英語教授に關しては、兎も角相當の意見を有す。少くとも文部省中にありては、其のオソリチーなり。而して學校の英語問題は、我が教育界の宿題にして、屢々上下物議の種となる。然れども、彼は未だ曾て一度も之に關して意見を世に示したることなく、常に對岸の火災を傍觀するの態度を持す。

彼が省内の會議に於て如何なる態度を取りつゝあるや否やは、我輩深く之を知らず。然れども彼れ恐らくは意見を吐かざるべし。嘗に自ら進んで吐かざるべきのみならず、他より求められても、容易に之に應ぜざるべし。これ蓋し、彼の沈黙は、謹慎、自重より來るものにあらずして、彼の風土的一の天性より來れるものなるが故なり。内心に於ては、他人の意見の淺薄を嗤ひ、議論の時勢後れなるを冷笑し居る時と雖も